

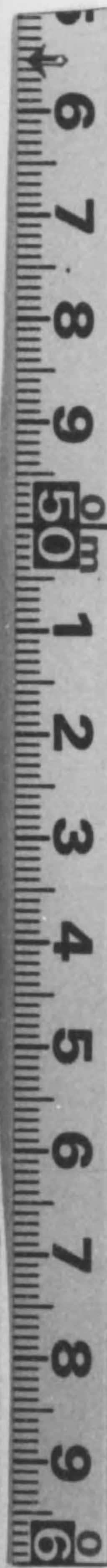
918-G34ウ



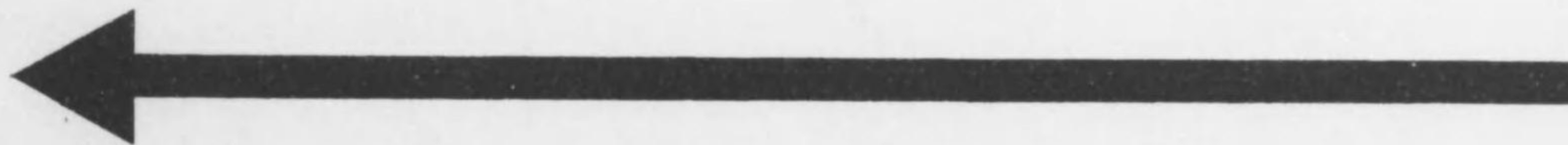
1200500759055

8
4

(6)



始



28. 3. 31

外-155

910.8
G34



早稻田大學
文學部教授

窪田空穂 譯

源

氏物語 下

〔現代語譯國文學〕
全集第六卷



發兌
非凡
關

現代語源氏物語下卷

~~720~~
~~51~~

夢	手	蜻	浮	東	宿	早
浮						
橋	習	蛉	舟	屋	木	蕨
五九七	五三三	四七九	四一一	三五二	二六七	二四七

總	椎	橋	竹	紅	勾	目
角	本	姬	河	梅	宮	次
一六一	九九	六九	二九	一五	一	



宮

光る源氏の君が薨ぜられて後、あの御光儀をうけ繼がれるほどの人は多くの御子孫の中にも求め難いのであつた。讓位の帝（冷泉院）をその御裔と申上げては勿體ない、今上の三の宮（匂宮）と、同じくその六條院で生ひ立たれた女三の宮の若君（薫）と、このお二方がそれぞれに美しいの御名をお取りになつてゐて、いかにも並々ならぬ御様子であるらしいが、ひどく見る目も眩しいといふ程にはあらぬやうである。もともと、ただ世の常の人柄としてはお立派に上品に艶かしくいらつしやる上に、尊い御血族として世人のお思ひ申してゐる待遇や有様も、源氏御幼少の頃の御評判や様子よりも稍立ちまさつてゐられるその御聲望によつて、半面にはこの上なくお立派なのである。紫の上のとり分け御最良にお育て申されたために、三の宮は二條院にゐられる。春宮をば然るべき尊いものにおもてなし申して、帝も后（明石中宮）もひどく御寵愛遊ばされ冊き申される宮であるから、内裏住をおさせしてゐられるけれど、矢張二條院を心おきない故郷として住みよく思はれるのである。御元服なすつてからは兵部卿の宮と申上げる。女一の宮は六條院の南の町の東の對の屋を紫の上在世の頃の飾付けもかへずに住んでゐられて、あけくれ偲ばれる。二の宮も同じ御殿の寢殿を時々の里住みの御部屋にされ、梅壺を御曹司にされて、右の大殿（夕霧）の中の姫君を得ていらつしやる。次の春宮候補者で、ひどく聲望が殊のほかで重々しく、人柄も確りしてゐられる。大殿の御女はひどく大勢いらつしやる。姉姫君は春宮に參られて、競争者もないやうにときめいて

ゐられる。その次々の姫君もみな順々に宮達へあげられるだらうと、世間の人も思ひ、後の宮もさう仰せられるけれど、この兵部卿の宮はさうはお思ひにならず、御自分の心から進まないやうなことなどは面白くないと思つてしまはれさうな御様子のやうだ。大臣も、何で皆同じやうに宮達へと、さうまできちんとかたづけなくともと落着いてゐられるが、またさうした御所望のあらうものならお受けしないでもないやうな素振を見せて、ひどく大切に冊いてゐられる。六の君は、その頃少し我こそはと思ひ上つてゐられる親王達や上達部の御心づくしの種となつていらつしやる。

六條院の薨ぜられて後、いろいろ集つてゐられた御方は、泣く泣く、いづれはお住みになる筈の住居どもに夫々移られたが、花散里と申す方は二條の東の院を御形見分けに戴いてお移りになられた。入道の宮（女三の宮）は三條の宮にいらつしやる。今上の中宮は内裏にばかりゐられるので、院の中さびしく人少なくなつたのを、右の大臣（夕霧）は「他人ごととして古への例を見聞するにも、その在世中に心をとどめて造築した人の屋敷の、死後名残もなくうち捨てられてしまつて、世の習ひも無常と思はれるのは、ひどく哀れにはかなさの思ひ知られるものを、自分の生きてゐる間なりともこの院を荒さず、あたりの大路など人影の絶えてしまはぬやうにしたい」といはれて、丑寅の町にかの一條の宮（落葉の宮）をお移し申して、三條殿（雲井の雁）と隔夜に十五日づつきちんと通うてゐられる。二條院といつて造り磨き、六條院の春の御殿といつて世にもはやされた玉

の豪も、ただこの方ひとりの御子孫のためのものであつたとみえて、明石の御方は大勢の若宮達の御後見をしいしい御世話申してゐられる。大殿は誰方の御事をも、故六條院のお考へのままに改めかへることなく、ゆき届いた親心にお事へなさるにつけても、紫の上がこのやうにして生きてゐられるならいかばかりに心をつくしてお事へ申上げられることだらう、遂に何ひとつこれといつて自分の好意としてお認めになられる折もなく亡くなられたことを、口惜しく飽かず哀しう思ひ出し申される。天の下の人の院を戀ひ慕ひ申さぬはなく、何かにつけても世の中はたゞ火を消したやうに、何事も映ない敷きをしない時とはなかつた。まして殿の中の人々は、御方方や宮達などは申すまでもなく、限りなく尊い院の御事は勿論、又かの紫の上の御有様を心に染めつつ、何事につけても思ひ出で申さぬ時の間とはない。春の花のさかりは、實にその長からぬによつてめでたさのまさるものではある。

二品の宮の若君(薫)は、院の御依囑なされたままに、冷泉院の帝が格別に思召し冊かれ、後の宮(秋好の中宮)も皇子達のあられずお心細く思つてゐられるので、これは結構な御後見として懇ろにお力としてゐられた。御元服なども院の御所でおとり行ひになる。十四で二月に侍従におなりになる。秋、右近の中將になつて、御賜りの加階などをさへ、何が御心配なのか急ぎ加へて成人びさせなさる。おはします御座所近い對の屋を宮の曹司として飾付けられるなど、御自ら御監督なさ

つて、若い女房も童下仕に至るまでも秀れた者をお選びになり、内親王などの御様子以上に眩しいほど立派に整へられた。院附でも後の宮附でも、お仕へする女房の中で容貌のよく上品に難くない者は皆そちらへ移し參らせ參らせして、院の内を氣に入つて住みよく居よく思ふやうにとばかり氣をくばられ、別格の御世話の種にお思ひになつてゐられた。故致仕の大殿(元の頭中將)の女御(弘徽殿)と申された御方の御腹に女宮のたゞひとりおいでになるのを限りもなく冊かれる御有様に劣らない。それも後の宮の御寵愛の年月につれてまさられる御様子の故であらうか、何でさうまでしなくとも見えるほどである。母宮(女三宮)は今はまだ御行を靜かになさつて、毎月の御念佛や年に二度の御八講など、をりをりの尊い御供養ばかりをなされて、所在なくあられるので、この君の出入りされるのを、逆に親のやうに頼もしい蔭に思つてゐられるので、君はひどくお氣の毒に思ひ、院も帝もお召しになつて離されず、春宮も次々の宮達もなつかしい御遊相手としてお誘ひになるので、暇なく苦しくて、どうかして身を分けたいものよとお思ひになる。幼ころにそれとなく耳にせられたわが生ひ立ちのをりをりを不審しく、ころもとなく思ひつづけるのであるが、問ふべき人もない。母宮に、事のけはひでも知つてゐると悟られようことは、お氣の毒な筋であるから、常々心にかけて、どうした事であるか、如何なる宿縁でかうした安からぬ敷きの添うた身に生れ來つたのであるか、かの善羅夷太子がわが身に問はれたといふ悟をも得たいものだと言

たれてくるのであつた。

おぼつかない誰に問はまじいかにしてはじめもはても
知らぬわが身ぞ

心もとないことではある、誰に問へばよいのであるか、どうして所生も行末も知られないわが身であるか。

答へてくれる人もない。事に觸れてわが身に惹ある心地のせられるのも、ただならずもの歎かしくのみ思ひ廻らし廻らしして、宮もこんな盛りの御姿を墨染におやつしになつて、それもどれほどの御道心で俄かに佛道に赴かれたのであるか、かうした思ひもかけぬ過失に、きつと世を憂しとお思ひになる事情があつたであらう、何で他人もそれと聞き知らずにるようぞ、それでも矢張り秘すべき事であるから自分には様子を知らせる人のないのであらうと思ふ。且幕勤行をされる御様子ではあるが、頼りなく鷹揚でいらつしやる女の御悟の程度では、蓮の露をも輝かしく玉と磨かれるといふやうな境に到ることも難い。五障も矢張り気がかりなものを、自分がこの御心を助けてせめて後世だけなりと甲斐ある御様にと思ふ。かの亡くなられた實父も、安からぬ歎きに結ばれて死なれたであらうなど推し量るにつけても、來世に生れてでも對面したい心となつて元服は懶がられたけれど、辭退しきれず、おのづから世の中にもてはやされて眩いまでに華やかな御身の榮えも、御自

分は目もくれず、ただ思ひ沈んでゐられた。

帝におかれても母女三の宮の御縁故による御最厚深く、ひどく可愛ゆいものに思はれ、後の宮もまた、もとより同じ殿で宮達と一緒に育つて遊ばれた幼時の御待遇を殆ど改められず、わが晩年にお生れになつて心苦しくも成人のほどを見届け得ぬことよ」と六條院の宣はれたのを思ひ出されては、おろそかならずお思ひ申された。右の大臣も御自分の御子どもの君達よりもこの君をば懇に並々ならずもてなしお叩き申上げる。昔光君と申された院は、父帝のまたなき御寵愛を得てゐられたとはいへ、お猜みになる人もあり、母方の御後見もないといふ風であつたが、御心情ももの深く、穩かに世の中に處されたので、比類なき御光儀をばあまり目立ないやうに靜められ、遂にかのゆゆしい世の騒動も起りさうであつた左遷の前後をさへ事もなくお過ごしになつて、後世を祈る御勤行も生前になされ、萬事にさり氣なくて、氣永くのどやかな御心構へではあつた。この君はまだ年若いのにひどく世の聲望があり過ぎて、氣位がこの上もなく高く入らせられる。實に然るべき宿縁で、まことに世間並の人とはお生れにならず、佛菩薩の假に宿つたのかとも見えるところがおありになつた。顔容貌も、判然と何處が秀れてゐる、ああ美しいと見える所もないけれど、唯ひどく艶かしく、氣恥づかしく思はれるほどで、心の奥の多かりげな様子が世間の人に似ないのであつた。君が漂はす香の芳しさはこの世の匂でなく、怪しいままで、起居振舞はれるところを遠く隔てたあた

りの追風も、百歩香のやうにまこと百歩の外にまで薫りさうな心地がする。誰でもこれ程になつた御身分で、ひどく見すばらしく、有りの儘に粧はする人があらうか、さまざまに我こそ人に優らうと装はひ用意するやうだのに、君はこんな世の常ならぬまでに芳しい、忍んで立寄る物蔭でも著しいわが匂の隠れあるまいのにうるさがられて、殆ど香もお炷きしめにならないが、數多の御唐櫃に埋もれてゐる香のかをりもこの君の言ひ様もない匂を加へ、御前の梅の木でも君がかりそめに袖觸られる梅の香は、春雨の雫にも濡れて身に染める人が多く、秋の野に主なき藤袴でも、本の香りはかくれて、床しい追風が殊の外で、君が折り取られたせるで匂ひまさるのであつた。こんなひどく怪しいまでに人の咎める香に染んでゐられるのを、兵部卿の宮は他の事よりも競ひたくお思ひになつて、この御方は特に色々の優れた香を炊きしめられ、朝夕の仕事として調合し、御前の前裁の中でも春は梅の花園を眺められ、秋は世の人の色を賞でる女郎花やさ牡鹿が妻にするといふ萩の露にも殆ど御心をお移しにならず、老を忘れるといふ菊、衰へゆく藤袴、見すばらしい地榆などは、ひどく見所もない霜枯の頃まで思ひ棄てぬなど、わざとらしく香を賞でる心を表に立てて風流を追うてゐられた。かうした次第で、この宮は些か柔弱にすぎ、風流に捉はれてゐられると世の人は思ひ申した。昔の源氏は、凡てこのやうに表立てて其の事といふやうに、風變りな、捉はれた所のなかつたことだ。源中將(薫)は此の宮へはつねに参り参りして、管絃などにもいづれ劣ら

ぬ物の音を吹き立て、いかにも若い同士互に挑ましくも思ひ合はれさうな人柄である。例の世の中の人には匂ふ兵部卿、薫る中將と、聞き苦しいほど噂しつづけて、その頃佳い女のあられる尊い方々の中には心を躍らせてわが聲にと申入れなどなさる方もあるので、宮は様々に面白くもありさうなあたりに言ひ寄つて、女の御容子有様をお探りになる。特に御心に染めて思はれるところは別になかつた。冷泉院の女の宮をばさうした方として見奉りたいものだ、慕ひ甲斐のあるだらうとお思になるのは、母女御もひどく重々しく奥ゆかしくいらせられる御家で、姫宮の御容子がいかにも求め難いほど秀れて、世の評判も好くあられる上に、ましていくらかお身近にお仕へ馴れた女房などが委しい御有様を事に觸れてはお耳に入れなどするのには、なほのこと忍び難く慕はしく思はれるやうである。中將は世の中を深く味氣ないものに思ひ入つた心であるから、なまじひに女に心を止めては、出家し難い歎きの残るであらうなどと思ふにも、煩はしい歎きのせられるやうなあたりに立ち入るのは慎まうと思ひ棄てられる。さし當つて心に沁むべき戀もないので、賢しら顔をしてゐるのでもあらう、人の許さぬやうな事などはまして思ひよるべくも無い。

十九になられる年、三位の宰相でなほ中將も兼ねてゐられる。帝、後の御寵遇により、臣下としてはひげ目もない立派な聲望であられるが、心の中には身の所生について思ひ知ることがあつて、憂へに沈むといふ風だつたので、心に任せた放縱な好色事を餘り好まず、萬事控へ目にし、自然と

老成した心様を人にも知られておいでになつた。三の宮(匂宮)の年につれて心を碎かれるやうな院の姫宮の御あたりを見るにつけても、一つ院のうちに且暮馴れてゐられるので、事に觸れても姫の有様を聞き見奉るにも、いかにもひどく並々ならず床しく由ありげな御たしなみの限りなくめでたいのを、同じくは實にこのやうな人を娶つてこそ生涯の満足すべき筋ではあると思ふものの、院が凡そのことは隔てなく思召して下さるとはいへ、ただ姫宮に關する隔てはこの上なくけ遠くさせつけていらせられるのも、御尤でもあり煩はしくもあるので、強ひても近づき寄らず、若し思ひもよらぬ戀心も萌したなら、自分も姫もひどく悪い立場になるだらうと思ひ知つて、馴れ寄ることもなかつたのである。君はかやうに人に賞でられるやうに生れついた御有様であるので、ちよつとしたかりそめの言葉をお掛けになる女も、思ひ離れる心もなくひどく靡きやすいといふ風なので、自然とかりそめの通ひ所も多くなるが、女のために目立たしいやうには待遇されず、ひどく丁度に紛らはして、何となく情なからぬやうに振舞はれるのが、却て氣が揉めるのを、慕ひ寄る人はそれに心ひかれひかれして、三條の宮に御奉公に参り集る者は數多くある。君の情ないのを見るのも辛いことではあるが、中絶してしまふよりはと心細さに思ひ佗びて、宮仕などするやうな身分でない方で君とのほかない契りに頼みをかけたものも多い。情ないとはいへ、懐しく見所ある君の御容姿なので、慕ひよる人は皆欺されてもゐるやうな氣がしながらもその情なさを見過せてゐる。君は母

女三の宮の御存生の間はあけくれ絶えず御眼にかかりお顔を拜することだけでもして孝養を怠るまいと思ひもし言はれもするので、右の大臣も大勢おいでになる御女達を一人づつは君と兵部卿の宮とへと考へてゐられるものの口に出しては仰しやれず、さすがに餘り近すぎる仲だとは思はれるけれど、この君達を措いて外には匹敵するほどの人の求められる時代かとは思ひなやまれる。正妻雲居雁腹の姫君よりも典侍腹の六の君はひどく立優つて美しく、氣立なども申分なく育つていらつしやるのに、世間の思はくの見下す傾きのある方が却てこんなに優れてゐるのを大臣は氣の毒に思はれて、一條の宮がさうした愛兒を持たれず淋しくゐられるので、六の君を引取つて養女にさし上げた。それとはなく姫をあつて君達に見せ初めたなら、必ず心をとどめられるだらう、女の容姿にかけて目のある人は特に思ひ寄られる筈だと大臣はお思ひになつて、餘りきびしくはもてなされず、當世風におもしろく、風流ごとを好ませて、男達の心を寄せる便次の多いやうになされる。

大臣は賭弓の還、饗の用意を六條院に於いてひどく心殊になされて、皇子をもお招き申上げようとの心遣ひをされた。その日皇子達の成人であられる御方は皆お出でになられる。后腹の皇子はどなたも氣高く清げにおはします中でも、この兵部卿の宮はいかにもひどく秀れてこの上もなくいらせられる。四の皇子で常陸の宮と申す更衣腹の御方は、思ひなしか御様子が殊の外劣つていらせられた。例年の通り左近衛が大勝した。例年よりは早く濟んで大將は退出される。兵部卿の宮、常陸

の宮、后腹の五の宮とを同じ御車にお乗せ申して退出される。宰相の中將は負け方で、しをしを退出されるのを、大臣が「皇子達の六條院へいらつしやる御送りに参られませぬか」と、車を止められて、御子の衛門の督、權中納言、右大辨など、その外の上達部も大勢あれこれに分乘し、誘ひあつて六條院へ参られる。道のやややひまどる中に、雪が少しちらついて艶な黄昏時である。物の音を興深くも吹きすさびながらお遣入りになるのは、實に此處を措いてどのやうな佛の御國にか、かやうな折からの氣晴しな所をもとめられようぞと思はれるのであつた。寢殿の南の廂の間に、いつものやうに南向に中少將が居並び、北向にむかひあつて垣下の親王達、上達部の御座がある。御酒が始まつて興ふかくなりゆくほどに求子を舞つて、その翻つた袖などの打返へすあふり風に、御前近い梅のひどく綻びこぼれた匂の、さと散りわたるにも、かの中將の御薫の一人引立てられて、言はうやうなく艶かしい。仄かに覗き見する女房なども、闇はあやなく心もとなき程であるが、その香には實に似るものもないよと賞であつた。大臣もひどく立派だと御覽になる。容貌も態度も常よりも勝れて、亂れぬ様に澄ましてゐるのを見て、大臣は「右近衛の中將も唱和なされよ、ひどく客人めいてゐられるよ」と仰しやるので、君は程よいやうに「神のます」など謡はれる。

註

- 一、院の年給として薫を四位に叙されたのである。
- 二、典據があらうが、分らない。
- 三、佛説の女人の五障、即ち梵天、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身となるを得ないこと。
- 四、色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ども（古今集）
- 五、にほふ香の君おもほゆる花なれば折れる琴にけさぞぬれぬる（古今六帖）
- 六、ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ども（古今集）
- 七、「賭弓」は、正月天子弓場殿に幸し、左右近衛、兵衛の舍人等の競射をみそなはず儀。「還鑿」はそのあとで勝方の大將の催す宴。
- 八、東遊の曲名。
- 九、春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えれ香やはかくるる（古今集）
- 一〇、降る雪に色はまがひぬ梅のはな香にこそ似たるものなかりけれ（拾遺集）
- 一一、「求子」を舞ふに謡ふ風俗歌「八少女はわが八少女ぞ、たつや少女たつや少女、神のますこのみ社に」

紅

梅

その頃按察の大納言と申すのは故致仕の大臣（昔の頭中將）の次男である。亡くなられた右衛門の督（柏木）のすぐの弟で、幼い頃から賢く花やかな心を持つてゐられた人で、昇進される月日につれて、一層ひどくこの世に生き甲斐のあり思ひどほりな身の上になられ、帝の御覺も極めてめでたかつた。北の方が二人をられたが、先の方は亡くなられて、今いらつしやるのは後の大政大臣（黒黒の大臣）の御女で、會て眞木柱を離れ難くなされた姫君を、もと外祖父の式部卿の宮が故兵部卿の親王に御娶せになつたのを、親王の亡くなられて後この大納言が忍び忍び通はれたのであるが、年月も経つたので今はさう世間を憚つてもゐられないのである。御子は亡くなられた北の方の御腹にも二人しかいらつしやらぬので、寂しく思はれて、神佛に祈つて、今の御方の腹に男君を一人まうけられる。北の方には故兵部卿の宮の御形見として姫君が一人ゐられる。大納言は分け隔てなくどの方をも同じやうにいとしんでゐられるのに、それぞれの御方の女房などは面白からぬ氣持もまじり、面倒な事の起る時もあるが、北の方は大層晴やかな當世風の方で、角立てずとりなし、御自分の方に苦々しいやうな事をも穩かに聞きなし、思ひ直されるので、聞き苦しいこともなくて見安いのであつた。

姫君達はお年も近く、次々に成人されるので御裳などをお着せになる。七間の寢殿を廣く大きく造つて、南面に大納言殿の大君、西に中の君、東に宮の御方とそれぞれお住まはせ申した。おほよ

そこに考へると宮の御方には父宮のあられぬのがお氣の毒なやうであるが、父君はじめ此方彼方の御遺産も多くて、内輪の儀式有様など奥ゆかしく氣高くとりなして、申分のない御様子でいらつしやる。大納言がこんなに冊いてゐられる評判がひろまつて、お一方へ次々に申込まれる方が多く、帝や春宮から思召しがあるけれど、内裏には中宮がゐられる、どれ程の人かその寵に追隨し得よう、といつて、思ひ諦めて卑下してお仕へするのも甲斐ないことであらう、春宮には左の大殿の女御（夕霧の女）の並ぶ者もないやうにときめいてゐられるのは競ひ難いけれど、さう許りいつてもゐられない、他人に抽させようと思ふ女の宮仕を断念しては何の本意があらうやと思ひ立たれて、姉姫君を参らせ申される。十七八のほどで美しく色艶のはめき立つやうにお見受けせられた。中の君もうち續いて上品に艶かしく、すつきりした様は姉君にまさつて美しくあられるので、臣下の人には惜しくて縁附けたくない御様なのを、かの兵部卿の宮が思ひ寄つてくれたならなど大納言はお思ひになる。宮は大納言の若君を宮中などでお見かけになる時はお側をはなさず遊び敵になさる。若君はこころばせ深く才智のほどの思はれる眼付額付をしてゐる。弟君と交際ふだけでは我慢が出来ないと私がいつたと大納言に申しなさい」などと宮が仰言るのを、若君がかうかうですと申上げると、大納言はにつこりして、ひどく甲斐があると思はれた。他人に劣るやうな宮仕よりは、この宮にこそ美しい女子はさし上げたいものである、思ひのまゝに冊いて見奉つたならわが命も延びる

やうに思はれるほどお立派な宮の御有様ではある」とおつしやりながら、まづ春宮に姉姫君を奉る準備をお急ぎになつて、春日の神の御託宣ももしかわが代にあらはれ出でて、故父大臣が冷泉院の女御の秋好の中宮にけおされた御事を胸いたく思つてお亡くなりになられた御無念を慰め申すこともあれよと心のうちに祈つて、姫君を参らせ奉つた。ひどく春宮の寵をうけてゐられる由、人々が評判する。かうした宮中の御奉公のお馴れにならぬうちには、確りした御後見がなくては如何と危んで、北の方が附添つてゐられるので、まことに限りもなく大切に冊き、後見をなされる。

姉姫君の参られて後、邸の内は事もなく淋しい心地がせられ、西の姫君はいつも一緒に住み馴れられて、ひどく寂しう思ひ沈んでゐられる。東の宮の姫君もこの姫君達と互に疎々しくはなされないうで、夜々は一緒にお寝みになり、いろいろの事をせられて、ちよつとした御管絃につけても宮の姫君を師のやうにお思ひして習ひ遊ばれたのである。宮の姫君は物耻を殊の外になさつて、母北の方にさへあからさまには容易にさし向ひになられず、見苦しいまでにおたしなみになるものの、心だてや様子の、埋もれたやうに暗くはなく、愛敬づいてゐられることは又人よりも優れておいでになつた。大納言は、こんな姉姫君の宮仕や何かとわが實子の方のことばかり思ひ構へるやうなのも氣の毒だなどと思はれて「然るべきやうに思ひきめて仰しやつて下さい、實の女と同じにお世話いたしませう」と母君にいはれるが「一向にさやうな世情づいたことは思ひ立ちもされぬやうな様

子ですから、なまなかの事をしては反つて可哀想でせう。御宿世にまかせて、私の存生中はお世話申しあげませう。死後が哀れに氣がかりですが、たとへ尼になつてなりとも、自然物笑ひになるやうな軽々しい事のなくて暮してほしう御座います」など泣いて、夫のお心づかひの有難いことを申し上げる。大納言はどなたも分け隔てなく親ぶつていらつしやるけれど、宮の姫君の御容貌を見たいものゆかしがられて「お隠れになるのは辛いことです」と恨んで、姿をお見せになることもあらうかと覗き歩かれるが、全くその片はしすらも御覽になれない。「母君のお留守中は私が代りにうかがふ筈ですのに、疎々しくわけ隔てをなさる御様子なので辛いことです」など申されて、御簾の前にお坐りになるので、宮の姫君は御返事などほのかに仰しやる。御聲や御様子など上品に美しく、御容姿のほどと思ひやられて、心の動かされる姫の御様子である。自分の御姫君達を他人に劣らないと思ひ驕つてゐるが、この君には到底勝ることは出来ない、だからこそ世の中はひろくて煩はしい、たぐひあるまいと思つてゐるのに、より優れたものも自らあり得るやうだなど、ひどく氣がかりに思はれる。「この頃何となく忙しかつたので、御琴の音さへお聞き申さずに久しくなりました。西の方にゐる中の君は琵琶に心をうち込んでゐますが、習得出来るものと思ひ込んでゐるのでせう。琵琶は生なかに弾いては聞きにくい音柄の楽器です、どうせ習ふなら注意してお教へになつて下さい。私はとりたてて習ふものはありませんでしたが、昔榮えてゐた世に學んだお蔭でせうか、聞き

分けるだけの辨へは何事にもひどくたよりなくはありませんでしたが、うち解けてはお弾きにならぬけれど、時々お聞きするあなたの御琵琶の音には昔が偲ばれます。故六條院の御傳授を受けた方で左の大臣が今世に残つてゐられます。源中納言、兵部卿の宮は、何事につけても故人に劣らぬやうで、ひどく宿縁の殊の外にあられる方々であつて、音楽には取りわけ熱心でいらつしやるが、手づかひの少しなよやかな撥音は左の大臣には及ばれぬと思はれますのに、あなたの御琴の音はいかにもよく似ておいでです。琵琶は押手の静かなのを上手とするものですのに、柱を押す時に撥音の音色のかはつてなまめかしく聞えるのが、女の弾法としてかへつて面白いものです。さあ、お弾きなすつて。誰か御琴を持つて参れ」と仰しやる。女房などは隠れ申す者もあまりない。ひどく若くて身分のいいらしい女房で、お目に懸るまいと思ふ者は、氣ままに隠れてゐるので「お附の人さへこんなへだてるのが氣にくはぬ」と腹を立てられる。

若宮が参内しようとして宿直姿で來られたが、殊更に儀式ばつた鬘よりもひどく好もしく見えていかにも美しいと大納言は思はれた。麗景殿(春宮へ参つた姉姫君)に御言傳を申される。「母君にお譲りして、私は今宵もえ参りますまい、氣分が勝れませす」と申しなさい」と言はれて「笛を少しお吹きなさい。どうかすると御前の御演奏に召し出される由だが、耻かしいことではある、まだひどく未熟な笛なのに」と微笑んで、雙調をお吹かせになる。ひどく面白く吹かれるので「満更

でもなくなつてゆくのはこの邊りで自然と合奏するせりです。是非とも弾き合はせて下さい」と宮の姫君をお責め申すので、迷惑に思はれる様子ながらも、爪弾にひどく巧みに笛に合はせて、ほんのすこし掻き鳴らされる。大納言も口笛太く吹き、もの馴れた聲でお歌ひになる。この東の端に軒近い紅梅がひどく面白く咲き匂うてゐるのを御覽になつて「お庭の花もこころばせ深く見えるやうです。兵部卿の宮が今内裏にいらつしやる、一枝折つて差上げなさい、知る人ぞ知る」といはれ、「ああ、光源氏が所謂御盛の近衛の大將などで入らせられた頃、私がまだ童で、貴方が宮に愛していただいてゐるやうに親しくお馴れ申したことが時経つにつれて戀しく思はれる。この宮達を世間の人もひどく格別にお思ひし、いかにも人に愛でられようとてお生れなすつた御有様ではあるけれど、光源氏に比べればその端の端にも思はれぬのは、矢張り光源氏を嗜まない方とお思ひした心のせりでもあらうか。私のやうな一通りの關係で思出し申すにも胸の晴れる時なく悲しいものを、親近の人で、君におくれて生きながらへてゐられるのは、並大抵の壽命のほどではあるまいと思はれる」と言ひ出されて、もの哀れに寂しく、思ひ回らしうち萎れて入らつしやる。折柄の堪へ難いのであらうか、花を折らせて、急いで若君を参内させられる。「致方もない、むかしの君のなつかしい御形見としてはこの宮だけである。釋尊のおかくれになつた御名残には、かの阿難が光を放つたのを、釋尊が再現せられたかと疑ふ賢しい聖があつたものを、私も源氏の君戀しさの間にくれ惑ふ心の晴ら

し處として、この宮に御言葉を差上げよう」とて

心ありて風のにははす園そのの梅にまづうぐひすの訪はずやあるべき

心あつて風のにははせる園の梅に、まづ鶯うぐひすの訪れずにおきませうや。(「風」を自身に、「梅」を中の君に、「鶯」を宮に譬へてゐる。)

と紅くわんごの紙に若やいで書き、この若君の懐紙ふところづみに取り交ぜ押したたんで、外に出しておやりになるのを、幼心おきなこころにも宮にひどく馴れ親しみたいと思ふので、急いで参られた。

宮は御母中宮の上の御局みつぼしから御宿直所おんとめどころに退出される時である。殿上人の大勢御送りに参る中に若君を見つけられて「昨日はなぜひどく早く退出したのです、何時参内したのか」など申される。「早く退出しました悔しさに『宮はまだ内裏に入らつしやる』と人が申しましたから急いで参内したので」と、若君は幼げながらも馴れなれしく申上げる。「内裏ばかりにゐず、心安い二條院にも時々遊びにいらつしやい。若い人どもの何といふこともなく集るところだ」と仰つしやる。この若君ひとりをお召しになつてお話をなさるので、人々は近うも参らず、退出したりして静かになつたので「春宮には貴方にお暇をすこしお許しになつたやうですね。お召がひどく繁々ひびくで困つてゐたやうだつたのに、この頃は姉君に御寵を奪はれて氣まりが悪いでせう」と言はれるので「お傍をお離しに

ならないのが苦しいございました。貴方様になら」と言ひさしてゐたので「大納言は私を人間らしくもないと思ひ棄てられたさうですね。尤もだ。でもいい氣持はしない。私と同じ古めかしい王家の筋で、東と申す宮の君、あの方に『思ひ合つていたゞけませぬか』とそつと話して下さい」など申される折から、若君が例の花を差上げると、宮はうち笑まれて、大納言に怨みを言つた後なら拙かつたらうにと、下にも置かず御覽になる。枝ぶり花房はなぼう、色も香も世の常でない。「園(四)に咲く紅梅は、色にとられて香は白梅に劣るといふやうなのに、これはひどく勝れて色香二つながら兼ね得て咲いたことだ」と、特に好きな花なので、差上げた甲斐あつて頻りに賞でられる。「今宵は宿直(五)でせう、このまま此處に泊つてゆきなさい」と召し離されぬので春宮にも参り得ない。花も耻かしく思ふまでに宮の芳ばしくて、お傍近く寝せられたのを、若君は幼な心には類なく嬉しく懐かしく思ひ申す。「この花の主はどうして春宮に参られなかつたのです」存じませぬ。心知らむ人になどと父の申すのを聞いたことでした」などお話しする。大納言の御氣持は、中の君を自分にと思つてゐるらしいと、宮はお聞きになつてゐるけれど、思ふ心は他の御方に寄せてゐられるので、この返事はつきりともなさらぬ。翌朝若君の退出する時、深くも心にとめぬやうな書き振りで

花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過すさましやは

花の香に誘はれてゆけるほどの身でありますならば、風のたよりをむなく過すことが出来ませうや（贈歌をうけて「花」は中の君、「風」は大納言の譬。思召しにふさはぬ私なのですの意。）

そして「やはり當分は翁どもに賢らさせないで、窈かに」と繰返して仰せになられ、この若君もまた東の宮の御方をばひどく睦まじう思ひ増さるのであつた。異腹の中の君の方が却つて顔を合はされなどして、普通の姉弟らしい様子であるけれど、子供心にも宮の君のひどく重々しく、理想的であられる心ばえを、甲斐ある様子にもお見上げしたいものだと思つてゐるのに、春宮の御方のひどく花やかに振舞つてゐられるにつけて、同じ姉君とは思ひながらも、如何にも飽かず口惜いので、兵部卿の宮なりと宮の御方の婿君として近しくお見上げ申したいものだと思つてゐると、この嬉しい花のお便りである。これは昨日の御返事であるから父大納言にお見せする。にくらしくも仰つしやることだ。餘り好色にすぎていらつしやるのを善からず申すとお聞きになつて、右の大臣や私などの前ではひどく實體に、御心を静めてゐられるのは可笑しいことだ。浮氣者とするに充分な御様なのに、強ひて眞面目ぶられるのも見所のすくなくなるだらうに」と蔭口をいつて、今日も若君が參内なさるので、また

もとつ香のにはへる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむ

御生來の芳ばしい香に匂うてゐる君の御袖が觸れましたならば、花もいふにいはれぬ評判を勝ち得ることぞせう。「花」は中の君の譬、「散らさむ」はその縁語、「袖ふる」は逢つたことの譬。

とは好色しいことぞ、あなかしこ」とまめやかに申上げられる。宮は大納言がほんとにどこまでも中の君をと思つてゐるのかと、流石に御心もときめかれて

花の香をにほはす宿にとめゆかばいろにめづとや人のとがめむ

花の香を匂はす宿にたづねて行つたならば好色しいと人が咎めないでせうか（「いろにめづ」の「色」は「花」の縁語で、好色の意を持たせたもの。）

など、矢張りうち解けず御答へなさるのを大納言は面白からず思つて居られた。

北の方が退出されて、内裏での事をお話しになる序に「若君がある夜宿直して罷り出た時の匂のひどく芳ばしかつたのを、人は氣にもとめませんでした、春宮がひどく氣にせられ「兵部卿の宮に近づき申したのだ、道理で私をよそにしたのだ」と氣どられてお怨み遊ばされたのをかしよう御座いました。貴方から宮に御消息をおあげしましたか、そんな様子も見えませんでしたか」と仰つしやるので、大納言は「さうでした、梅の花を賞でられる方だから、彼方の端の紅梅のいかにも盛りであつたのを、仔細ありげに折つて差上げたのです。宮の移り香はいかにも格別です。宮仕へを

なさる女などにはああは薫^たきしめられぬことです。源中納言はこのやうに好きずきしくは薫^たき匂は
されませんが、生來の香は世に類^{たぐひ}もない。何とも不思議で、前世の契のどのやうだつた報でああなの
かとゆかしいことです。同じ花でありながら、梅はおのづからにほひ愛でたくて、その生ひ出でた
原^{もと}に心をひかれる。この宮などの賞でられるのも尤もです」など、花によそへてもまづ宮のお噂を
申される。

宮の御方はもの思ひ知られる程に成人してゐられるので、何事によらず見知りもし、聞きとめら
れないでもないが、夫にまみえて世間並のくらしをするといふことはすつかり思ひきつてゐられ
る。世間の人も權勢に従ふ心あつてか、兩親^{ふたおや}の並つた御方方には心を盡して言ひ寄り、花やかなこ
とが多いけれど、宮の御方は何事につけてもしめやかに引込んでゐられるのを、宮はみづからに相
應しいものに聞き傳へられて、いかにもしてと深く心を寄せられるやうになつた。若君をいつもお
傍^{そば}にお引つけになりなりして、忍びやかに宮の御方にお文を寄せられるけれど、大納言の君が宮を
中の君にと深く思ひ込まれて、宮がさうも思ひ立つてお望みになることがあつたならばと、御氣色
をさぐつてはこころ待ちしていらつしやるのを見るとお氣の毒で、北の方は「まるで反對に、その
やうな事を思ひ寄るべくもない宮の方にかりそめの言葉をお盡しになる。甲斐なげの事よ」と思ひ
も言はれもする。宮の御方からはかりそめの御返事などもないので、宮は負けじ心も加つて思ひ

やまれるべくもない。北の方は、ままよ、宮の御有様の宮の姫君の婿とお見上げ申したくお立派
で、將來もおありなのに、何で思案することがあらうかとお思ひになる時もあるが、宮がひどく色
めいておいでになり、通ひ給ふ忍び所も多く、宇治の八の宮の姫君にも御志淺^{みこころざし}からず、ひどく繁
繁^{しげ}お通ひになる頼もしげもない御心の浮々しさなども、ひどく氣にかかるので、内心では思ひ切つ
てゐられるものの、ただ勿體ないばかりに、そつと姫に代つて稀には賢^{まこと}しらに御返事をさし上げら
れる。

註

- 一、今はとてやどかれぬともなれ來つる眞木の柱はわれを忘るな（眞木柱の巻）
- 二、君ならで誰にか見せむ梅のはな色をも香をも知る人ぞ知る（古今集）
- 三、「大輪」に出でゐる故事
- 四、紅のいろにとられて梅の花香ぞことごとくに匂はざりける（河海抄に引く）
- 五、あたら夜の月と花とをむなしくば心知れらむ人に見せばや（後撰集）

竹

河

この話しは、源氏の御一族でもあられなかつた後の大殿家（髭黒の太政大臣）に仕へてゐた口さがない女房共の生き残つてゐるのが問はず語りに話し置いた事で、紫の上の所縁の人々の話とは違つてゐるであらうが、この女どものいふには「源氏の御子孫について間違つた事などの交つて傳へられてゐるのは、自分よりも年老いて呆けた人の覚え違ひでもあらうか」など訝しがつてゐるのであるが、何れが本當であらうか。尙侍（玉鬘）の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人いらしたが、様々に冊き育てようと思ひ込まれ、年月の經つのももどかしかつてゐられる中に殿がはかなくお亡くなりになつたので、夢のやうで、何時かと準備されてゐた姫君達のお宮仕ものび／＼になつた。人の心は權勢にのみ追従するものであるから、あんなに迄勢力のすばらしくあられた大臣の御後だけに、内々の御財物、莊園など、さういつた方の衰へはないけれど、大方の有様は生前とは引き違へたやうで、殿の内はひつそりとなつてゆく。かんの君（玉鬘）の御近親は隨分世に時めいてゐられるけれど、却て高貴の御間柄のこととて、もともと親しくされなかつた上に、故殿が些か情味にとぼしく一徹に過ぎてゐられた御性質で、人から打解けられぬ事もあつたためか、かんの君は誰にもさう懐かしく消息も通はし得ずにいらつしやる。六條院には、すべてを矢張り昔どほりにこの君を御子として扱はれて、死後の事どもを書置かれた御遺産處分の文などにも、中宮の御次にお加へ申されたので、右の大殿などは、その氣持で、近しいところよりも却つて然るべき折々にお訪

ね申す。男君達は御元服などしてめいめい大人びられたので、殿のお亡くなりになつた後は心もとなくあはれな事もあるが、自然と立身されてゆくやうである。姫君達をばどうお扱ひ申さうかと君は思ひ亂れられる。帝におかれても、故大臣が是非に宮仕させたい本意の深い由を申上げて置かれたので、もう年頃になられたであらうと年月から推量られて、仰言が絶えずあるけれど、中宮のいよいよ並ぶ者もないやうに時めきまさつてゆかれる御様子に壓されて、何の御方も見る甲斐もなくいらつしやるその末に參つて、中宮から遙かに横目で見られるのも煩はしく、また人に劣り、もの數にも入らぬ有様でわが女を見ようのは、また心づくしなことであらうと思はれた。冷泉院からはまた、ひどく懇ろに仰せられて、かんの君が昔御意に副はず過ぎされた情なさをさへくり返しお恨み遊ばされて「今はまして齢もとり、興もない様にお嫌ひになるとも、安心な親代りに思つて姫君を譲つて下さい」と、ひどくまめやかに仰せられたので、どうしたものであらう、自分のひどく口惜しい宿世で、案外に氣の利かないものと院がお思ひなすつたので、お耻かしくも勿體ないものを、この度は姫を奉つて晩年の今に御見直しいただいたものか、などと心も定めかねてゐられる。姫君は容姿がひどく美しくていらつしやる評判があり、思ひを懸けられる人が多い。右の大殿の子の藏人の少將とかいつたのは三條殿（雲井雁）の御腹で、親御達は兄君達よりも特にひどく冊かれて、人柄も極めて優れてゐる君で、ひどく熱心に申込まれる。どちらにつけても疎からぬ

御開柄であるから、この君達の親しく出入なさりなどするのは、ひどく疎々しくなどはお待遇しなさらぬ。少將はこの女房にも近く馴れ寄りつつ、思ふことを相談するにも便宜があつて、夜晝となく姫のことばかり話しあふさはがしさを、煩くはあるものの氣の毒にかんの君もお思ひになつた。母北の方も度々御文を差上げる。「まだひどく輕々しい身分ですが、御承引下さることも御座いませうか」と大臣も申されるのであつた。かんの君はこの姫君をば臣下の者にとは決してお考へにならず、中の君を、少將が今少し世の評判の輕々しくない身分に昇進したならば、許しもしようと思はれた。お許しにならねば盗んでも取りかねまじく、氣味悪いほど少將は思ひ込んでゐた。かんの君は思ひも寄らぬ事とお思ひにならぬけれど、女の方も心を許されない事で間違ひの起つた時は、世の聞えも輕々しい譯であるから、少將の思ひを取次ぐ女房をも「ああ危い、間違ひをひき起さぬやうに」など仰つしやるのに、女房は氣を挫かれて厭はしがるのであつた。

六條院の御晩年に朱雀院の三の宮の御腹にお生れになつた君は、冷泉院が御子のやうに思つてお冊き遊される四位の侍從（薫）で、その頃十四五ぐらゐで、年端もゆかず幼いわりには、心構への大人らしく結構で、すでに勝れた將來が明らかに見えられるのを、かんの君はわが婿として見たいものよと思はれた。かんの君の殿はかの三條の宮と極めて近いところなので、然るべき折々の遊び所として殿の君達に伴はれてお見えになる時がある。奥ゆかしい女のいらつしやる所であるから、

若い男の氣を配らぬはなく、見られようとてちらつきさまよふ中で、容姿の佳いのはこの入り渡りの藏人の少將、懐かしく、見るにも氣耻かしいやうで艶いてゐる點ではこの四位の侍從の御様子に似る人もなかつた。六條院の御近親であると思ひなす故で立派に見えるのであらうか、世間に自らもてはやされた方である。若い女房共は特にこの君を賞であつた。かんの殿も「ほんとに好い方だ」など仰しやつて、親しく物語りせられなどする。「院のお氣立を思ひ出し申しては、慰む時もなく悲しくのみ思はれますのに、その御形見にも貴方ならで誰をお見上げいたしませうや。右の大 臣は物々しい御身分で、序のない對面も容易ではありませんし」など言はれて、兄弟と同列にお思ひになつてゐられるので、この君も親しい所に思つて殿に來られる。世の常の好色めいた風もなく、ひどく落着いてゐるのを、此處彼處の若い女房どもは口惜く物足らぬことに思つて、もの言ひかけては惱ますのであつた。

正月の朔日ごろ、かんの君の御兄弟の大納言、この方は曾て高砂を諺つたよ、藤中納言、この方は故大殿（髭黒）の長男で眞木柱と同腹、などがかんの君の許にお出でになつた。右の大臣も御子ども六人とも引き連れて來られた。御容貌から何まで、飽かぬことなく見える大臣の御様子と御聲望である。御子息達も様々にひどく美しく、年のわりに官位も進み、何の物思ひもあるまいと見える。藏人の君は、兩親にかしづかれる様は格別であるが、始終うち沈んで思ふことあり顔である。

大臣は御几帳をへだてて、昔に變らず御物語してゐられる。「これといふ用がなくて、繁々お伺ひもいたしませぬ。年とるにつれて、参内より外の外出など氣はづかしくなつて参りましたので、昔のお話も申上げたいと思ふ折々も、つひそのままに過してしまふことです。若い子供等は御用の節は召し使つて下さい。必ず誠意を認めていただけと言ひ聞かせてあります。」など申される。「今はこのやうに世にある人数にも入らぬやうになつてゆく有様を、人並にお思ひ下さいまして、むかしの院の御事もひどく忘れ難く思はれます」と申される序に、院（冷泉院）から姫君を望ませられる事を仄めかされる。「確りと後見のない人の宮仕は却つて見苦しいものをと、あれやこれやと思ひ煩つてゐます」といはれると「内裏でも仰せられる事のあるやうに承はりましたが、どちらへ御決めになるべきものでせうか。院は御位を去らせ給うて盛の過ぎられた心地がするけれど、世にも稀な御有様は少しもお老けになられぬので、私も美しく生れた女があつたならばと思ひ寄りながら、立派な方々の御中に御奉公の出来る女がなく口惜しく思はれます。一體女一の宮の女御はその事を諒解されてゐるのですか。前にも宮仕を望んだ人で、さういふ遠慮からうまくゆかないこともありまして」と言はれるので「女御が、今は徒然に閑になつた境涯を、院と一つ心に姫の後見をして粉らはしたい、などと勸めて下さるにつけて、實はどうしたものかと思ひ煩つてゐる次第です」と申される。誰彼ここにお集りになつて三條の宮に参られる。朱雀院をお忘れにならぬ人々も、六條院の御

縁故の人々も、夫々に猶かの入道の宮（女三の宮）をば行き過ぎ難くて参られるのであらう。この殿の左近の申將、右中辨、侍従の君なども、直ちに大臣の御供に出掛けられる。ひき連れて行かれる勢は殊の外である。夕ぐれに四位の侍従がこの殿に参られた。大勢集つた大人びた若君達も、夫夫に秀れて、誰方が醜かつたであらうか、皆美しかつた中に、遅れてこの君の現れたのは、ひどく殊の外目とまる心地がして、例の物賞でする若い女房は「やつぱり此の上もないよ」と言ふ。「この殿の姫君の御傍には、この君をこそさし並べて見たい」と聞きにくく言ふ。いかにもひどく若く艶かしい様子で御振舞ひになる匂香など世の常でない。心ふかい姫君と申すも、心あられる人は、實に人よりは勝れてゐるやうだとお見知りになるだらうと思はれる。かんの殿は御念誦堂にいられて、「こちらへ」といはれるので、東の階から上つて戸口の御簾の前にお坐りになる。御前近い若木の梅の心もとなく蕾んで、鶯の初聲もひどく大まかであるのに、ひどく好々しくあらせたい様子をしてゐられるので、女房共がはかないことを言ひかけるのに、君は言少なに取澄してゐるのにくらしがつて、宰相の君といふ上臈の女房が詠みかけられる。

折りて見ばいと匂もまさるやとすこし色めけ梅のはつはな

折つてみれば一層艶もまさつて見えようかと思はれるやうに今少し色めけよ、梅の初花。（梅のは

つはな」は薫の體、「色」は「花」の縁。

侍従の君は詠みぶり即妙と聞いて、

よそにてはもぎ木なりとや定むらむしたに匂へる梅
のはつはな

よそ目には面白くない掬木であると定めてせう、内々は艶めいてゐる梅の初花です。(「梅のはつはな」は自分の體。)

嘘と思ふなら袖を觸れて御覽なさい」など言ひ戯れるのに「まことは色よりも、香の方が」と、女房共は口々にいひ、袖を引きかねないまでに騒ぐ。かんの君が奥の方からるざり出でられて「ひどい方々ですこと、立派な眞面目人にまで、何とまあ、厚かましいこと」とそつと仰しやるのである。まめ人と名を附けられたことよ、ひどく、面白くない名かなと思はれた。この殿の藤侍従は、殿上出仕などもまだしないので、所々へ回禮にも行かないで殿に居合はせられた。淺香の折敷二つだけで菓子と盃だけお出しになられた。大臣はお年をとられるにつれて、故院にひどくよく似て來られます。この君は容貌の似てゐらつしやる所もお見えにならないのに、様子のひどくしめやかに艶めいてゐる様態は、故院の御若盛りの頃が思ひやられます。丁度こんなでいらつしたやうです。」など思ひ出し申されておうち萎れになる。歸られたあとにまで漂ふ香の芳ばしさを女房共は賞で騒

ぐ。侍従の君は、まめ人の名を忌々しいと思つたので、二十日すぎの頃梅花の花の盛りに、匂少なげに取扱はれた浮氣者に、わがみやび心を見馴れさせてやりたいと思はれて、藤侍従の御許に來られた。中門をおはいりにならうとすると、前から自分と同じ宿直姿の人が立つてゐた。隠れようとするのを引留めると、例のこの邸を常にさまよふ少將であつた。寢殿の西面に、琵琶や箏の琴の音のするのに心を惑はして立つてゐるのであらう。苦しうなことよ、人の許さぬ戀を思ひそめるのは罪障の深かるべき事かなと思ふ。琴の音も止んだので「さあ、案内して下さい、私はひどく不案内なのです」といつて、連れ立つて西の渡殿の前の紅梅の木のもとに「梅が枝」を吟んで立ち寄りけはひの、花よりもまさつてさつと香ふので、女房共は妻戸をおし開けて和琴をひどくおもしろく歌に弾き合はせた。女の琴では呂の歌はかうまでは合はせられぬものなのに、巧いと思つてもう一度折り返して諳ふのであつたが、琵琶の音も又なく當世風である。趣ふかくたしなまれる殿であるよと心ひかれたので、君も今宵はすこしうち解けて戲言なども言ふ。内から和琴をさし出した。互に譲り合つて手も觸れないので、藤侍従の君をして、かんの君は「故致仕の大臣の御爪音に實によく似て入らつしやると聞いてゐますが、ほんとお聞きしたく存じます。今宵は矢張り鶯の音にも誘はれなすつて下さい」と申出されたので、はにかんで爪を嚙むべき事でもないと思つて、それほど心も入れず弾き鳴らされるけはひ、ひどく音色も深く聞える。かんの君は、常にお見上げし親し

くもされなかつた親であるが、もう世にいらつしやらなくなつたと思ふとひどく心細くて、ちよつとした事のついでにも思ひ出されて、ひどく悲しい。「およその君は不思議に故大納言（柏木）の御有様にひどくよく似て、琴の音などももうそつくりには思はれる」といつてお泣きになるのもお年を召されたしるしの涙もろさであらうか。少將もひどく面白い聲で「さき草」を謡ふ。賢ら心のついた年寄も交つてゐないので、おのづと互に興を催されるのに、主の侍従は故大臣に似てゐられる故か、この様な方面は下手で酒ばかり飲んでゐるので、「御祝儀だけでも謡ひませんか」と恥かしめられて、「竹河」を人々と合せて、まだ稚くはあるが面白く謡ふ。簾のうちから土盃が出た。「酔が過ぎましては秘事も包みきれず、詰らぬことを言ふ業と聞いてゐます。どうなさるのですか」と、侍従（薫）は仲々受けつけない。小桂の重なつた細長の、人香のなつかしく沁みたのを、有り合はせるままに被けられる。「何ですか、これは」など騒いで、侍従は主の藤侍従にうち被けて歸る。引きとめて被けるけれど、「水驛で夜が更けてしまつた」といつて逃げて行つた。少將は、この源侍従の君がかうして立ち寄るやうだから、人々は皆この君にこそ心を寄せられるであらうと、わが身はひどくくじけ、ひどく弱りこんで、味氣なくも怨む。

人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜の闇

人は皆花に心を移すでせう、私はひとり春の夜の闇に惹つてゐます。（「花」は「薫」の譬。）

とうち歎いて立つてゐるので、内の女房の返し、

をりからやあはれも知らむ梅のはなただかばかりに
移りしもせじ

折につけてこそ心ひかれもいたしませう、梅の花の咲き匂つてゐるといふただそれだけでは心も移りばしますまい。（「梅のはな」は同じく「薫」の譬。「ただかばかり」の「ただか」は「梅のはな」の縁。）

翌朝四位の侍従（薫）の許から、主の藤侍従のもとに、「昨夜はひどく亂りがはしかつたのを人々は
どう御覽になられたでせう」と、かんの君にも御覽なさいといふ積りらしく假名がちに書いて、端
に、

竹河のはしうちいでしひと節にふかき心のそこは知
りきや

竹河の片端を讀つたあの一節に私の深い心の底を察し下さつたでせうか。（「はし」「ふかきそこ」
いづれも「河」の縁語。「節」は「竹」の縁語。）

と書いてある。寢殿に持つて参り、誰彼御覽になる。「字などもひどく趣のふかいことよ。どうした

万でせう、もうこんなに何事にも秀れてゐられて。幼くて院にお別れになり、母宮のしどけなくお育てになつたけれど、矢張り人に勝ち勝るべき宿縁なのでせう」と、かんの君は、この御子達の字などの拙いのをたしなめられる。藤侍従の返事はいかにもひどく稚く、「昨夜は水驛といはれて歸られたのを人々が氣にしてゐるやうでした。

竹河に夜をふかさじといそぎしもいかなる節を思ひ
おかまし

竹河に夜を更かすまいと急いで歸られたものを、どういふ事を思ひ頼んでゐればよいのでせう。

實に、源侍従はこの事をきつかけにしてこの君の御曹司に來られて、姉姫君への思ひを言ひ寄る。少將の推量したその通りに皆人が好意を寄せた。藤侍従の君も稚な心に、近しい親戚としてこの君と朝夕親しくしたいと思ふのであつた。

三月になつて、咲く櫻あれば散る櫻もあり、空は花曇り、大方の盛りである頃、長閑にあられるかんの君の邸は何も取紛れる事もなく、端近くても罪も受けさうにない。姫君達はその頃十八九ほどでいらつしただらう、御容貌も御氣立もそれぞれに秀れてゐる。姉君はひどくすつきりと氣高く、當世風をしてゐられて、臣下の妻としてお見上げしたならば、いかにも似つかはしくなく見えらる。櫻がさねの細長や山吹がさねなどの、折に合つた色合の懐かしいまでに重なつた裾の方ま

で愛敬のこぼれ落ちるやうに見える御身のこなしなども美しく、見てゐて恥かしいほどの氣品が添つていらつしやる。もう一方の中君は薄紅梅の細長に櫻がさねを召され、柳の絲のやうにたをやかに見える。ひどくすつきりと、なまめかしくすつきりした容姿で、重々しく心ふかい様は勝つてゐられるけれど、色艶の美しさでは到底姉君に及ばぬと人々は思つてゐるやうだ。碁をおうちになるとさし向つてゐられる頭つき、御髪垂れた様子など、ひどく見所がある。藤侍従の君が審判役となつて傍にゐられるのを、兄君達がお覗きになつて「侍従の受がひどくよくなつたものだ、御碁の審判を仰せつかつてゐるよ」といつて、大人らしい様子をして坐られるので、おそばの女房どももそれぞれにすまひを直す。中將が「宮仕が忙しかつたので、姫の受が侍従に劣つてしまつた、ひどく本意ない事だ」と歎かれると、弟の右中辨も「私のやうな辨官は猶更忙しく、あなた方への宮仕はおろそかになつてしまふのですから、さうまではお見棄てなさいますな」など申される。碁を打ちさして恥らつておいでになる、ひどく美しい。内裏などに參つてをりましても、故殿がいらしたらと思はれることが多くて、中將は涙ぐんでお見上げしてゐられる。二十七八ぐらゐらつしやるので、まことによくお出来になられ、姫君達の御身上を、如何にもして昔父君の思ひ定めてゐたことに違へぬやうにしたいと思つて居られた。御前の花の木などの中でも色合の美しい櫻を折らせて「外のとは比べものにもなりません」などと翫ばれるので、「あなた方がまだ幼くいらした時、

この花は私のだ私のだと争はれたのを、故殿が「姉君の御花ぞ」と定められる、母君は「妹君の御木」とお極めになつたのを、私はひどくさうは泣き騒ぎはしないが、心安からず思つたことでありましたよ」といひ「この櫻のいまは老木になつたのにつけても、過ぎ去つた年を思ひ出しますと、多くの人に死に別れました身の歎きも抑へ難くて」など、泣きみ笑ひみ申されて、いつもよりはゆつくりしていらつしやる。人の婿になつて今は静かに邸にゐられることも少いの、花に心をとめて落付いておいでになる。

かんの君はかうした成人した方の親になつてゐられるお年のわりにはひどく若く美しく、まだ盛りの御容姿に見られる。冷泉院の帝は常にその御容姿の今もなつかしく、昔戀しく思ひ出でられるので、何につけてこの人に近づかうかと思案せられて、姫君の出仕の事を強ひて仰せられるのである。院へ差上げることは、この君達が「矢張り映えない心地がしませう。すべての事は時勢に従つてゆくのを世間の人も認めるやうです。いかにも御見上げしたい御様子はこの世に囁かなくていらせられるやうですが、もう盛りとは申せぬ感じがいたします。琴笛の調、花鳥の色でも昔でも、時に従つてこそ人の耳にもとまるものです。春宮は如何です」など申されるので、かんの君は「さあ、どうでせう、春宮にははじめから貴い御方（夕霧の女）が上つて、傍に人もないやうに寵をほしいままにしてゐられるので、なまじいにお仕へするのにも心配で、人笑はれな事もあらうと差控へられ

ますが、殿が御存生であつたならば、行末の運不運はとも角、さしあたりは甲斐ある様に計つて下さるでせうに」など申されて、皆物あはれである。

中將達のお立ちになつて後、姫君達は打ちさしてゐられた碁をお打ちになる。昔から争はれる櫻を賭物として「三番に一番勝ち越した方に花を贈ることにしませう」と戯れあつて申される。暗くなつてくるので端近く出て打ち終へられる。御簾を巻きあげて、女房共は皆それぞれに張合つて御方の勝を祈る。折しも例の少將は、藤侍従の君の御部屋に來たのに、兄君達と連れ立つて出てゐられたので、一體に人少い折から、廊の戸の開いてゐるのにそつと寄つて覗いた。こんなうれしい折をみつけたのは、佛などの世に現はれ給うたのにも参りあつたやうな心地のするの他愛のない心ではある。夕ぐれの霞のまぎれにはつきりはしないが、つくづく見ると、姉君の櫻の細長の模様もそれと見分けられた。まことに散りなむ後の形見にも見たく、艶やかにお見えになるにつけても、ひどく縁遠い人妻になれようことが、つくづく侘しい。若い女房共のうち解けた姿など、夕日に映えて美しく見える。右の妹君がお勝ちになつた。「高麗の亂聲の遅いこと」など浮々といふのもある。「右に心を寄せ申して、西の御前によつてゐる木を、左のものとされて、だからこそ日頃の争ひが続いてゐたのですよ」と右方は心地よげにきほつて言ふ。何事とも分らないが面白いと聞いて、口出しもしたいけれど、うち解けてゐられる折からたしなみないことだと思つて、そつと出て

かへる。その後も又かうした機会もと、あたり近く窺ひ歩いてゐた。姫君達は花の争ひをしいしい
明し暮される中、風の荒らかに吹いた夕ぐれ、花のみだれ散るのがひどく口惜しく惜しまれるの
で、まげだ負方の姫君

櫻ゆゑ風にこころのさわぐかなおもひぐまなき花と
見る見る

この櫻ゆゑ風に心の採めることです、思つてもその甲斐のない花と知りながら。

御方の宰相の君

咲くと見てかつは散りぬる花なればまくるを深きう
らみともせず

咲くと見れば端から散つてしまふ花であるから負けてもそんなに怒めしくは思ひません。

と味方すれば、右の姫君

風にちることは世のつね枝ながらうつろふ花をただ
にしも見じ

風に散るのは世の常のことではあるが、枝ごと此方に移つてくる花をおほふそには思ひますまい。

この御方の大輔の君

心ありて池のみぎはにおつる花あわとなりてもわが
方に寄れ

心あつて池の汀に散る花よ、よし泡となつてもわが方に寄れ。(枝よりもあだに散りにし花なれば落
ちても水の泡とこそなれ——古今集——による。)

勝方の女童が庭に下りて花の下を歩き、散つた花びらを澤山拾つて、持つて来ていふ。

大ぞらの風にちれどもさくら花おのがものとぞかき
つめて見る

空ふく風に散つても、なほこの櫻ばなは自分の物としてかき集めて賞でるのです。

左方の「なれき」といふ女童

櫻ばなにほひあまたに散らさじとおほふばかりの袖
はありやは

櫻ばなの色艶をあちこちに散らすまいと覆へるほどの袖はよもお持ちにはなりませんまい。

心狭げにも思はれます」など言ひ貶す。かうしてゐるうちに月日の空しく経つにつけ、姫君達の行
末の氣がかりなのに、かんの君はいろいろに思ひなやまれる。冷泉院からは毎日に催促の御消息が
ある。弘徽殿の女御は「御出仕のおそいのは、私を疎々しく思ひ隔てられてなのでせうか。院は

「あなたがお疎み申すからだらう」とひどく憎げに仰しやるので、御戯談にしても苦しいのです。同じことなら近い中に思ひ立たれて下さい」など、ひどく眞面目にお勧め申される。かんの君も、かうなる姫の宿縁であらう、かうひどく生憎に仰しやるのも恐れ多いなどと、漸く姫君の出仕を思ひ立たれた。御調度などは澤山準備しておいでになるので、女房共の衣裳や何か細々しい事を御用意になる。これを聞いて、藏人の少將は今にも死にさうに悶えて母北の方（雲井雁）を責め申すので、お困りになつて「ひどくお恥かしい事について、仄めかし申上げますのも、まことに愚しい親心の迷ひです。御同情もありますならば、御推量の上何とかお慰めいただきたく存じます。」など、お氣の毒にも仰しやるので、心苦しいことよとかんの君はうち敷かれて「どういふ風にしてよいやら思ひきめる術もありませんが、院から無理に仰しやられますので思ひみだれまして。眞實な御心で御座いますならば、當分お心を静められて、お慰め申すやうを御覽下さつてこそ世間の聞えもよいかと存ぜられます」など申されるのも、この入内をすませて後、中の君を少將にとお考へのやうである。姉妹を同時にかたづけては悪く得意氣に見えよう、まだ位なども低いのだからなどお思ひになるのに、少將は一向に中の君に心を移さうともしない。ほのかに姉君をお見上げして後は面影に浮んで戀しく、どうした折に近づけるかとばかり思つてゐたのに、かう望みもかけられずなつたのをお歎きになること限もない。たとへ甲斐ない事なりと言ひたいと思つて例の藤侍従の部屋に来る

と、源侍従の手紙を見ておいでになつた。ひきかくすのを、それと知つて奪ひ取つた。仔細ありげに見えようかと侍従は強ひてもかくさない。手紙は、それとなく、たゞ怨めしげな思ひをほのめかしてあつた。

つれなくてすぐる月日をかぞへつつものうらめしき

暮の春かな

情無く過ぎてゆく月日を数へかぞへして、もの怨めしい春の暮であることよ。

人はこんななままでゆつたりと、様よく、妬ましいやうだ、自分のひどく人笑はれな焦心を、一つには皆が見馴れて、侮られるやうになつたのだと思ふにつけても胸が痛むので、なほのこと口もきけず、常に話相手とする中將の部屋の方へ行くにも、いつもの通り甲斐ないことだと歎きがちである。藤侍従が「この御返事をしよう」と母君の許に參られるのを見ると、少將はひどく腹立たしく心もみだれ、若い一本氣な氣持に一途になやむ。あきれるまでに恨みなげくので、この取次役の中將のおもとも餘り冗談めかすわけにもゆかず、氣の毒に思つて容易に返答もしない。少將は、あの御蔭の隙見をした夕暮の事もいひ出して「あれほどの夢でもまた見たいものだ。ああ、何を頼みにして生きてゐよう。かうしてお話するのもいま暫くのやうに思はれて、『つらきもあはれ』といふ歌の心は全くその通りでした」とひどく眞顔になつて言ふ。あはれとて、言ひ慰めやうもない事

ある。あの、中の君を興へてお慰めにならうとする殿の御計ひを、少しもうれしがるやうな様子もないので、あの夕ぐれのいかにもあらはだつたので、こんなひどく生憎な氣持が加つたのであらうと、中將はもつとも思へて「かんの君がお聞きになりましたら、何とも怪しからぬ御心であるよとお疎みになるでせう。私もお氣の毒と思つてゐる心も失せました。まことに氣がかりな御心でありますこと」とやりかへすと、「いやもう、どうでもよい、今はもう長くもない體だから怖くもありません。それにしても、碁にお負けになつたのがひどくお氣の毒だつた。あの時、あなたが私をおだやかに傍に近づけて、姫君に目でお知らせ申してくれたならこの上なかつたものを」など言つて、

いでやなど數ならぬ身にかなはぬはひとに負けじの
 ころなりけり

何とまあ、どうしたことぞ、物の數でもないわが身に不相應なのは、この人に負けまいとする心ではある。「負けじ」は碁の縁で、姫が院に參られることを暗示してゐる。

中將が笑つて

わりなしやつよきによらむ勝まけを心ひとつにい
 がまかする

無理なことですよ、強い方が勝つ勝負ですのに、どうして自分の心のままに出来ませう。

と答へるのまで少將は辛かつた。

あはれとて手をゆるせかし生死を君にまかするわが
 身とならば

あはれと思つて力をかして下さい、生死もあなたに委ねてゐるわが身とならば。「手をゆるせ」「生死」は、いづれも碁の縁。

など、泣きみ笑ひみ語り明かす。

翌日は四月になつたので、兄弟の君達が參内してあちこちするのには、少將はひどく沈み込んで物思ひに耽つておいでになるので、母北の方は涙ぐんでいらつしやる。大臣も「院の思召しの手前もあらう、どうして進んで承知してくれようと思つて、残念ながら面會した折にも言ひ出さないでしまつた。私自身強ひて申入れたなら、さうはいふもののお断りにはならなかつたらうに」などいはれる。さて少將は例のやうに

花を見て春はくらしつ今日よりやしげきなげきの下
 にまどはむ

花を眺めて春は暮して來た、今日からは繁つた木かげに歎きくらすことであらう。「花」は姫君の

譬「なげき」は木の縁。

と申し送られた。かんの君の御前で、誰彼上臈の女房等が、姫君に思ひを寄せる人々のそれぞれに氣の毒なことを申上げるなかに、中將のおもとが「生死を」といつた様子が、口先だけではなく辛さうでした」など申すので、かんの君もお氣の毒とお聞きになる。大臣や北の方の思はくもあるので、少將の御歎きが深いのなら、せめて中の君を代りにもと思はれる。院への御出仕を防げようと思はれるのは心外この上ないことではあるが、臣下との縁組など思ひも寄らぬことに故殿が思ひきめてゐられたものを、院にお仕へするのでさへ行末の映えないことと思つていらつしやる折から、この御たよりを受けとつて女房共はあはれがる。中將の御返事

けふぞ知る空をながむるけしきにて花に心をうつし

けりとも

今日はじめて知りました、何氣なく空を眺めてあるやうな様子で實は花に心を寄せてゐられたのだと。(「花」は姫君の譬。)

女房共が「まあお氣の毒な、すつかり冗談にしてしまふこと」などいふが、煩がつて書直さない。

姫君は九日に参内される。右の大殿が御車と御前驅の人々を澤山おさし廻しになつた。北の方も怨めしいと思ひになるけれど、日頃はさうでもなかつたのに、この事故に繁々文通もしてゐられ

河 竹

たのを、又疎遠になつてしまふのも餘りなので、被物の料として立派な女の衣裳をたくさんお贈りになつた。手紙には「變に魂も抜けたやうな少將の様子にかまけてゐますうちに、存じよりも致しませんでしたが、お知らせ下さらぬのも疎疎しく思はれます」とあつた。穩かなやうで、それとなく仄めかされるのをお氣の毒と御覽になる。大臣からも御手紙がある。「私自身も参らねばと思つてゐましたが、慎まなければならぬ事がありました。子供らを色々の御用にもと差向けます。御遠慮なくお召し使ひ下さい」といつて、源少將や兵衛の佐などを遣はされた。お情ぶかくいらつしやるのかんの君はお喜びになる。大納言殿(紅梅)からもお供の御車を差上げる。この北の方は故大臣の御女で、眞木柱の姫君だから、どちらから言つても睦じく交際される筈なのに、さうでない。藤中納言は自身來られて、中將や辨の君達と一緒に用をされる。殿が生きてゐられたならばと何事につけても心が傷む。藏人の少將の、例の中將のおもと思ひ入つた言葉の限りをつくして「もう最後と思ひすてた命の、さすがに悲しいのに、あはれと思ふとだけでも一言仰しやつて下さつたら、それに懸け止められて暫しでも生き永らへれるかも知れません」など書いてあるのを、お部屋へ持つて伺ふと、姫君お二方話し合つて、ひどく沈んでいらつしやる。夜晝一緒に暮すのにお馴れになつて、中の戸だけで隔てた西と東の對の屋をさへいとはしいものにされて、互に行き來してゐられたのに、これからは別れ別れになることよと歎いておいでになるのであつた。特に心を用ひて粧ひ身づ

くろひさせ申した姉君の御容姿はひどく美しい。故殿が宮仕をさせたいものと、常にお考へになり口にしてゐられた事などを思ひ出してもあはれな折からとて、姫君はその文を取つて御覽になる。大臣や北の方のあんなに揃つて頼もしげな御身の上で、どうしてかう詰らぬことを思ひいふのであらうと不思議なのにつけても、「限」と書いてあるのを本當であらうかと思はれて、すぐこの御文の端に

あはれてふ常ならぬ世のひと言もいかなる人にかく
るものぞは

あはれといふ一通りでない折のひと言は、どのやうな人にいひ掛けるべきものでせうか。

怖ろしい死などの場合にいふものとはのかに知つてゐます」とお書きになつて「かう言つてやりなさい」といはれたのを、そのまま差上げると、少將は限りなく珍しいにも、いまは別れと思へばひどく悲しく涙もとまらない。折りかへして「誰が名は立たじ」など言ひがかりをつけるやうに書いて、

生ける世の死はこころにまかせねば聞かでややまむ

君がひと言

この世の死は思ふにまかせぬものなので、終に聞かないでしまふのでせうか、あはれといふ君が

言を。

墓標の上にも懸けて下さるほどの御心とお思ひ出来るやうならば、ひたすら死に急がれるのです。が」などあるので、姫君はさつきはあさはかにも返事をしたことよ、書きかへないでそのまま渡したやうだと心苦しく思はれて、ものも言はれなくなつた。お附添には、女房や女童など、見苦しからぬ者だけをおまとめになつた。大體の儀式などは入内のそれに變ることもない。まづ弘徽殿の女の御許においでになつて、かんの君は御話などなさる。夜更けて院の御前に参られた。后や女御など、皆久しくお仕へして年老けておいでになるのに、姫君のひどく美しく、女盛りで見所ある様子を御覽になられることとて、どうして御寵愛おろそかであらうぞ。花やかに時めいていらつしやる。下々の人のやうに氣安く振舞つておいでになる院の御有様はいかにも理想的で結構であつた。院は、かんの君がしばらく留つてゐてほしいとしきりに思つてゐられたのに、ひどく早くそつと退出されたので、口惜しく辛くお思ひになつた。

冷泉院には源侍従の君をばあけくれ御前に召されてお離しにならず、まことにもう昔の光源氏の御幼時に劣らない御寵遇である。院の御所ではどの御方にも疎からず、親しくつきあひ伺つてゐられる。新しく参られたこの御方にも、御盃申す風にふるまつて、胸の中では自分をどう思つてゐられるだらうかを知りたい心まで動いてゐた。夕暮のしめやかなのに、藤侍従と連れだつて歩くに

も、かの御方の御前に近く見やられる五葉の松に、藤のひどくおもしろく咲き懸つてゐるのを、池の汀の石に苔を席として腰かけて眺めてゐられた。露骨ではないが、はかない思ひを怨めしげにほのめかしつつ藤侍従と話す。

手にかくるものにしあらばふぢの花松よりこゆる色
を見ましや

手のとどくものであるならば、藤の花が松を越して咲いてゆくのをよそに見ようや。(「藤のはな」は御方の譬、「松よりこゆる」は姫が院に参られたことを下に含めたもの。)

と詠んで花を見上げた様子など、藤侍従はひどく氣の毒に心苦しくも思はれるので、自分の考へてもゐなかつた事の次第であることを仄めかす。

むらさきの色はかよへど藤のはな心にえこそまかせ
ざりけれ

紫の色はゆかりの兄弟ですが、あの藤の花に手がとどかぬやうに姉君のことは心のまゝに出来ませんでした。

藤侍従は實直な方で、お氣の毒と思つた。源侍従の君はひどく心もくれ惑ふほどには思ひこみはしなかつたが、口惜しくはお思ひになつた。かの少將の君は眞劍に、どうしようかと、間違もしかね

ないまでに、静めやうもない氣がした。姫君に思ひを懸けてゐられた人々は中の君を得たいと心を移すのもあつた。かんの君は少將の君を、母北の方の御怨もあるので、中の君にと思はれて仄めかし申されたが、少將はそれきりおとづれもしなくなつた。院の御所には、大臣の君達も前から親しく伺候してゐられたが、この姫君が來られて後は、少將はあまり参らず、たまに殿上の方に顔をみせることがあつても、情なくて逃げるやうに退出する。

帝におかせられては、故大臣が姫を是非とも後宮にと深く志してゐられたのに、かう全く反對の御宮仕をされたのをどうしたのかと思召して、兄の中將を召してお問ひになられた。中將は歸宅して「御機嫌はおよろしくないのです。ですからこそ、世間の人も不審に思ふだらうと、豫て申しましたのに、お考へが別で、こんなにお決めになつたので、とや角申しにくくてゐましたのに、かうした仰言のありますのは私どもの身のためにも情ないことです」と、ひどく面白くないと思つてかんの君をお責めになる。かんの君は「いえ、さし當つてかう急に思ひ立ちはしなかつたが、院が無理に、御氣の毒になるほど仰せられたので、後見のない宮仕へは宮中ではうまくゆかないやうだから、院の今は心おきな御様子であられるのにお任せ申さうと思ひついたので。誰もみな、都合の悪いことは眞直にお諫めにならないで、今になつて、右の大臣も私の計らひが悪いやうに取りなしていはれるので辛い。これもさうなる宿縁でもあらう」とおだやかに仰しやつてお騒ぎにもなら

ない。「さうした前世の御宿縁は目に見えぬものですから、陛下がかやうに思召して仰せられるのを『御縁がないのです』など、どうして申譯が出来ることとせう。明石の中宮を御遠慮申上げてといはれるが、では院の女御をどうされようと思ますか。後見とか何とか、事前には互に思ひ合つてゐられても、さうもゆきますまい。まあやがて分ることです。よく考へてみますに、内裏には中宮がいらつしやるからといつて他の方はお仕へになられませんか。君への御奉公はその點が氣安いのを昔から興ある事にしてゐるのです。もしちよつとした事の行違ひがあつて、女御が面白からずお思ひになられたなら、不都合なことのやうに世間に思はれませう」などと兄弟二人して申されたので、かんの君はひどく辛いと思はれた。それでも院の限ない御寵愛だけが月日につれて増してゆく。七月からお孕みになつた。うち惱んでゐられる様子、まことに人々がさまざまに言ひ寄つてお苦しめるのも尤もであるよ、どうしてこんな美しい方を一通りに見すごし聞きすごしてしまへようぞと思はれる。院にはあけくれ御管絃をお催しになりなりして、源侍従も近く召し入れられるので、御方の御琴の音などは聞くことが出来る。あの、梅が枝に合はせたことのある中將のおもとの和琴も常に召し出してお弾かせになるので、それを聞き合はすにつけても源侍従は平靜ではあり得なかつた。その年も明けて男踏歌を催された。殿上の若い君達の中に音楽の上手の多い頃である。その中でも勝れた者を選ばれて、この四位の侍従が右の歌頭である、かの藏人の少將も樂人の數の中に加は

つてゐた。十四日の月のはなやかに曇りなく照る中を、内裏から出て冷泉院に参る。弘徽殿の女御もこの御息所も院の御座所近くに御席を設けられて御覽になる。上達部、親子達が連れ立つて参れる。右の大臣と致仕の大殿の御一族の外には花やかに美しい人はない世であると見える。内裏の御前よりもこの院をばひどく耻かしく格別に思ひ申して、皆人がしきりに心づかひする中にも、藏人の少將は御方が御覽になるだらうと思つて静心もない。色もついてゐない見苦しい棉花も、挿す人柄によつて別様に見分けられて、舞の姿も歌聲もひどく面白かつた。竹河をうたつて御階の下に舞ひ寄る時、少將は過ぎし夜のかんの殿ではなかつた管絃も思ひ出されたので、間違もしさうにくれ惑ひ涙ぐむのであつた。踏歌が後の宮の御方に参ると、院もそちらにお出ましになつて御覽遊ばす。月は夜深くなるにつれて晝よりも間のわるいほど明るく澄みのぼつて、少將は御方がどう御覽になるかとのみ思はれるので、心も空に舞ひ漂うてゆき、水驛の盃をさされるのにも自分ひとりが目をつけられてゐるやうで面目なく思ふ。源侍従は一晩中とこゝろを舞ひ歩いて、ひどく惱ましく苦しくて臥せてゐるのに、院からお召しになつたので「ああ苦しい、しばらく休みたいのに」とむづかりながら参上された。内裏の踏歌の様子などおたづねになる。「歌頭は年をした人が従來は勤めたものなのに、貴方が選ばれたとは奥床しいことだ」と仰せられ、可愛く思召されるやうだ。萬春樂を御口吟まれながら御息所の御方に渡らせられるので、源侍従もお供して参られる。踏歌を

見物に上つた縁ゆかりの女共が多くて、いつもよりも花やかに、様子が當世風である。侍従は渡殿の戸口に暫くして、聲を聞き知つた女房共に言葉などかけてゐられる。「ゆうべの月は明るくてきまり悪いほどだった。藏人の少將の月の光に眩しがつてゐた様子も、御息所の前ゆゑで、月光に恥ぢたのではなかつたやうだ。内裏ではそんな風には見えなかつたですよ」などお話しになるので、女房共の中にはあはれと聞く者もあつた。中の一人が「闇でも貴方様の御香はかくれるべくもありませんが、月に映えた御姿はいま一層お立派だとお噂したことでした」などと巧たくまく言つて、御簾の内からはなけれど

この前竹河を歌はれたあの夜のことは思ひ出されますか、思ひ出すほどのこれといふ事もありませぬけれど。「飾」は「竹」の縁。

といふ。ちよつとした事だけれど、涙ぐまれるにつけても、まことに淺くは想つてゐない事であるよとわれと思ひ知られる。

流れてのたのめむなしき竹河によはうきものと思ひしりにき

いつかはとの心頼みも今は空しいのに世は憂いものと思ひ知りました。「よ」は竹の縁、「流れて」

「うき」は河の縁。

といはれる物あはれな様子を女房共はおもしろがる。それは、ひどく他の人のやうに歎かれはしなかつたけれど、人柄が流石に同情をよぶのである。「いひ過ぎるかも知れない、ああ危い」と立つと、院が「此方こちへ」とお召しになるので、間が悪い心地がするが參られる。院は「故六條院が踏歌の朝女樂をなさつたがひどく面白かつたと右の大臣が話された。何事につけても故院の後繼者となるべき人の求め難くなつたことだ。ひどく音楽の上手な女までも多く集つてゐて、ほんのちよつとした事も面白かつたであらう」など思ひやられて、御琴などをお調べになり、箏は御息所、琵琶は源侍従にお持たせになる。御自身和琴わごんを弾かれ「この殿(二四)」などをなさる。御息所の御琴の音はまだ稚い所があつたのに、院が大層よく教へ込んで了はれた。當世風で爪音つまねもよく、歌や雅樂の曲など上手にひどく面白くお弾きになる。何事にも心許なく劣つたところはあらぬ方のやうだ、御容貌などはまたひどく美しいだらうと、源侍従は矢張り心惹かれる。かうした折が多いので、自然御息所に疎からずお馴れになる。餘りに狎なれなれしうは恨みかけないが、折々につけて、思ふ心の遂げられなかつた悲しさを仄かすのも、御息所はどう思はれたか、私は知らぬ。

四月に女宮がお生れになつた。それ程際やかな映ひあることでもないやうだが、院のお喜びが一通りでないで、右の大殿をはじめとして御産おんうぶ養やしなひをなさる方々が多い。かんの君がしつかりと抱い

て可愛がつておいでになると、院から早く上るやうにとしきりに仰おほせがあるので、五十日の祝の日に参られた。女宮お一方いらつしやるが、この宮がひどく珍しく美しくおいでになるので、院は大變可愛く思召された。もうただ御息所の方にばかりいらつしやる。女御方の女房共は「まあ、かうした事にならなくてもいいのに」とただならず言ふのであつた。御本人達の御心としてはさう輕々しくお離れになりはしないけれど、お附つの女房共の間に困ることも起りなどして、かの中將の君の、流石に兄だけに、言つてゐられた事が當つて来る。かんの君も、無暗とこんなことばかり言つてゐて果はどうなることか、世間の笑ひ草になり、ひどい取扱ひをうけるかも知れない、院の御寵愛は淺くはないが、久しく仕へてゐられる御方々が面白からずお見棄てになれば苦しいことだと思つてゐられるのに、帝におかれては、姫を出仕させなかつたことをひどくお氣に召さずお思ひになりなりして、度々御言葉がある人がお話し申すので、煩はしく、中の姫君を公おほかけの女官として御奉公申させようと思はれて、尙侍たしのかみの役をお譲り申す。朝廷でもひどく重んじられる役であるから、前から辭職したいと考へてゐながら辭し切れずゐられたのを、故大臣の御奉公を思召し、ずつと昔の、母が娘に譲つた例などを勘へられ、御聽許になつた。この姫君の、かうなられる御宿縁で、年來申上げてきた辭職が許されなかつたのだと思はれた。かうして心安く御奉公もなさるやうにとお思ひになるにつけても、藏人の少將にお氣の毒で、母北の方が特にお頼みになられたのに、お約束す

るやうに仄かし申したのも、どうお考へになるだらうと思案せられる。辨の君をして他意ないものやうに大臣に申上げられる。「帝からかうした仰言がありまして、様々に無理な宮仕を好むよと、世間の聞えもあらうかと思はれまして思ひ餘つてゐます」と申されるので、大臣は「帝の御氣持は、姉姫君のことをお咎めになられるのも御尤に存じます。公事おほかけにつけても宮仕をされないのは宜しくない事でせう。早く思ひ立たれる事です」といはれた。そして今度は明石の中宮の御意を伺つて参内なさる。故大臣が御存生ならば、たとへ——ともけおされはしまいになど、かんの君は心細いことなどをお考へになる。姉君は容貌など評判で美しいと帝は聞し召してゐられたのに、事が御心に反したのを、御氣に入らぬやうだが、この中の君もひどく上品で、奥床しくたしなんで御仕へしてゐられる。

前まへのかんの君（玉鬘）は、出家しようと思ひ立たれるのを「いろ／＼お二人をお世話申さねばならぬうちは、勤行もせわしないやうに思はれるでせう。もう少しどちらも安心のゆくやうに見届け申してから、氣のもめることもなく一筋にお勤めなさい」と君達がいはれるので、思ひとまられて、内裏には時々そつとお参りになる時もある。院には煩はしい御心を矢張り抱いていらつしやるので、然るべき折にも全く参られない。むかし院の思召にそはなかつた事を思出して流石に勿體なく思つたその御詫びに、誰もよくない事と考へてゐたのも知らぬ顔をして姉姫君を差上げておい

て、その上自分までも、たとへ噂にしろ院との間に浮いたはなしが世間に立つたとしたら、ひどく耻かしく見苦しいであらうと思はれるが、さうした憚りによつて参れないとは御息所にもお打明け申さないで、御息所は、自分を昔から故大臣はとりわけ可愛がられ、かんの君は妹君を、櫻のあらそひなどちよつとした時にも最上せられた名残で、今も思ひ下されるよと怨めしくお思ひ申された。院もまたひどく情ないと思召し仰しやりもするのであつた。「私のやうな老い古びたところによこして、思ひ下されるのも尤だ」とお話しになり、御息所をただもういとしいと思ひまさられる。暫くしてまた男御子をお産みになつた。澤山お仕へしてゐられる御方々にかうした事がなく久しかつたのに、一通りならぬ御宿縁であるよと世間の人が驚く。院の帝はまして限なく珍しいものにこの誕生の皇子をば思召された。讓位されない時であつたなら、どんなに甲斐あることであらう、今は何事にも榮のない御境涯をひどく口惜しいとお思ひ遊ばした。弘徽殿の御腹の女一の宮をこの上ないものにお思ひしてゐられたのに、こんなに美しい御子達が相ついでお生れになつたので、珍しい所としてひどく格別に御寵遇されるのを、女御もこんなに迄なさるのには餘りにひどくはなからうかと御心がさわぐのであつた。何かにつけて穩かでなく、倭けた事が起つたりして、自然に御仲も隔たつてくるやうだ。世の習として、數でもない下々の人の仲でも、はじめから道理のある本妻の方に、係りもない一般の人も味方するものやうだから、院の御所の上下の人々は皆、尊い地位

にのぼつて久しくなつてゐられる女御の方にはかりよい理窟をつけて、ちよつとした事にも御息所の方を悪く取りなしたりなどするのを、御兄の君達も「それ御覽なさい、悪いことを申しましたか」と、なほ更にいはれる。氣づかはれ、聞きづらいので「こんなではなく、安らかに體裁よく暮す人も多いやうである。この上もない幸運がなければ、宮仕などは思ひ寄つてはならぬことである」と母君はお歎きになる。

姫君にいひ寄られた方々は、相應に立身されて、婿にしても滿更でない向の多いことである。その中で源侍従といつてひどく年若く幼稚に見えてゐる方は、もう宰相の中將で、匂宮とともに、匂ふよ、薫るよ、とひどく聞きにくいほど賞で騒がれるのであつて、まことにひどく人柄も重々しく奥ゆかしいのに、身分高い親王達や大臣がその御女をあげたくて申し寄られるのも聞き入れずゐるにつけて、かんの君は「以前は若くて頼りないやうだつたけれど、だんだん立派に成人してゆかれるやうだ」など言つていらつしやる。藏人の少將だつた方も、三位の中將とかいつて聲望がある。「少將は容貌さへも理想的だつた」などと、口さがない女房は、ひそひそと「煩はしい御宮仕よりは」など言ふのもあつて、お氣の毒に見受けられた。この中將(藏人少將)は矢張り想ひそめた心をかへず、憂くも辛くも思ひ思ひして、左大臣の御女を得たけれど、餘り心も留められない。「道のはてなる常陸帯の」と、手習にも口癖にもするのは、どのやうに思つてであらうか。御息所は安げ

もない身の頃はしさに、里に退りがちになられた。かんの君は豫期に反した御有様を口惜しいと思ひになる。内裏の妹君は却つて花やかに心安げにゐられて、まことに風情ふかく、奥床しい御寵愛をうけてお仕へしてゐられる。

その頃左大臣が亡くなられて、右大臣は左に進まれ、藤大納言は左大將を兼ねた右大臣になられる。次々の人々も昇進して、この薫中將は中納言に、三位の君（藏人少將）は宰相になつて、昇進された人々を拾つてみるに、この二三の御一族以外に人もない時世ではあつた。中納言昇進のお禮廻りに、前のかんの君の許においでになつた。御前の庭で拜賀される。かんの君は對面せられ「こんなにひどく草深くなつてゆく葎の門を素通りなさらぬ御心につけ、まづ故六條院の御事が思ひ出されまして」など申される。御聲は上品に愛敬があり、なつかしく花やかである。お老けにならぬことよ、かうだから院の上は、なほ恨み給ふ御心の絶えないのであるよ、今に事件をひき起されよう、と思ふ。昇進などは内心さしてうれしくも思つてはるませんが、まづ御眼にかかりに参つたのです。『素通りしない』など仰しやるのは、疎遠の罪をお咎めなさるのでせうか。」と申される。かんの君は「今日はおめでたい日なので、年とつた身の上ばなしなど申すべき場合でもないと遠慮してゐますが、わざわざお立寄り下さることはむつかしいのですから、それに御對面の折でなくては矢張りくだくだしくお話も出来かねる事として。院にお仕へしてゐられる姫がひどく身の上を思ひ

欠

欠

との願ひから、山深くお尋ね申した本志を忘れ、好色なかりそめごとを始め、戯れやうとするのは、ことが違つてゐるではないかと、思ひ返して、宮のお様子の大層お氣の毒なのを、心からお慰め申され、幾度も御訪問をつづけられて、期待してゐたやうに、優婆塞の身で以て修業をつづけてゐられるそのお住ひの山が奥深いと同じやうに奥の深い悟り、經文などについて、きざな知つたか振ではなく、大層正確になさるお講義、これらを中將の君は傾聴してゐられる。聖らしい人、學問のある僧などは、世間にいくらかもあるけれども、あまり勿體ぶつてゐるし、づつとかけ離れてゐる學徳の深い僧都、僧正の位階の人達は、忙しくそれにそつけなくて、佛道の上での不審を質問せようとするのも、迎山なやうにお考へになる。と言つてさうした學徳地位のある僧ではなくても、持律持戒を守るだけの尊さはあるけれども、さうした僧では素振りが卑しく、言葉が濁つてゐて、不作法に世間ずれがしてゐるのが、頗る不愉快で、晝間の中は職務のことで忙しくしてゐて、靜かに鎮まつた宵の間を待つて御寢室深くへ呼び入れ、話しあはれるにしても、争はれぬもので非常に固苦しかつたりばかりするのだが、これが宮であると、大層上品に恐縮さうな風をなすつて、お話しになる言葉も、同じ佛の御教へであつても、眼前の例の中へ引き入れ、世間に類を見ないほど深く學んでいらつしやるといふわけではないけれども、高貴の人は、御理解になつてゐることが、普通の人は又大變に違つてをられてゆかしいところがあるから、お見馴れになることが段段と重なる

つて来るにつけ、初中お會ひしてゐたいといふ心になつて、お職務にお手透きがなかつたりなどして日が経つ時は、中將の君は宮を戀しく思はれる。この中將の君が、かういふ風にお敬ひ申してをられるから、自然冷泉院からも、かかさずお手紙なんかがあつて、幾年來世間の噂にもあまり上られず、極度に淋しさうであつたお住ひに、やつと人の姿を見掛けることが時時あるやうになつた。院が折折お見舞ひを言つて寄こされることには手違がひなく、この中將の君も、何か事があるにつけて先づ、と言ふのは風流のことにも、生活の上のことにも、何かと御相談なさることが、三年ばかりになつた。

秋の末頃、毎年四季に一度づつなさるお念佛を、この河は、網代に激する浪が、この頃は非常に騒しくて静かでないよとおつしやつて、あの阿闍梨が住んでゐる寺の堂にお移りになつて、そこで七日の間そのお念佛を行はれた。留守居の姫君達は、大變心細く常より一層退屈であたりの景色を眺めていらつしやる頃のこと、中將の君は、しばらくお邪魔に上らないなとふと思出しになるとそのまま、有明の月が、まだ夜が深いのに丁度さし登らうとしてゐる時にお住ひを出られ、こつそりと、御供に重だつた者もお連れにならないで、お微行でお出でになつた。宮の山莊は川のこちら岸にあるので、舟などの手敷のかかることもなく、お馬でお出でになつたのである。山深く這入つて行くに従つて、霧が前に立ちふさがるので、道もそれと見分けられない林の中を分けて行かれる

と さらさらしい風が猛り狂ふために、ほろほろと落ち亂れるその木の葉がこぼす露が散りかかつて来るのが、非常に冷たく、自分の氣儘からとはいへ全身すつかりお濡れになつた。こんな無様なお微行は、あまりなすつたことのない薫の君はお心の中で、心細くまた趣きのあることに思はれた。

やまおろしにたへぬ木のはの露よりもあやなくもろ

き我がなみだかな

山を吹きおろして来る風に堪へきれないで落ち散る木の葉が宿す露よりも、一層味気なく、こぼれ易い、私の涙であるなあ。

里人が驚くのがうるさいと、お供の者の先拂ひの聲も立てさせにならず、柴の垣根の間を通抜けて、其處とも彼處とも分らずに流れてゐる川の流れなどを、踏み散らす馬の足音までも、これも立てさせまいと心をおつかひになるが、隠れもない中將の君特有のお匂ひが、風につれて著しいので、どなたかお忍びのお方の世にも稀ないいかをりであると、折柄寢覺めて驚く家が、其處にも此處にもあつた。宮のお住ひも近くなつた頃、それが何であるか分らない樂器の音が、物凄く冴えかへつて聞えて来る。宮父子が日頃かうして遊ばれると聞いてゐながら、その時に會はず、親王の御琴のその有名な音も、まだ聞くことが出来ないでゐるよ。いい機會のやうだ。と思ひながら門をお遣入りになると、それは琵琶の響きであつた。黄鐘調に弾いてゐる、世間普通の合奏ではあるが、場處が

場處であるせるか耳新しい氣がして、すくひ上げる撥の音も、清らかさうで感が深い。箏の琴が、悲しくなまめいた聲を立てて、絶え絶えにそれに交つて聞える。少し聞いてゐたいので、中將の君は物蔭へ忍ばれたが、それらしい物音をはずきり聞きつけて、宿直の者らしい男の何だか頑固らしいのが、出て来て、「かくかくのわけで阿闍梨の寺の堂に籠つていらつしやいます。お出でになつたことを申し上げてまゐりませう」と申上げる。「いやいや。そんな日限の切つてあるお勤めの最中をお騒がせ申すのは面白くない。こんなに夜露にびつしより濡れながら伺つて、かひなく歸つて行く淋しさを、姫君達に申上げて、お氣の毒にとのお言葉が頂ければ、それで十分だ」とおつしやると、醜い顔で笑つて、「申させませう」と言つて退つて行くのを、「おい一寸」と呼び寄せて、「づつと人の噂ばかりに聞いてゐて、一度ほんたうにお聞きしたいと思つた御琴なんかの音を、ああ願つてもない機會だ、ほんのしばらくの間、一寸立寄つて聞くにいい、何かの物蔭の隅かなんかはないかね。後先のわかまへもなく、臆面なしに出掛けて行つたばかりに、萬事お終ひになさつてしまつては、残念この上なからう」とおつしやる。御素振り御容姿が、かうしたありきたりの宿直の者の感じにも、大變立派に恐れ多く思はれたから、「人が聞かない折は、毎日かうしてお遊びになつていらつしやるがよしそれが下男であつても、京都から参つて、一緒に暮す者があります時は、琴の音一つお立てになりませぬ。多分、かうして姫君達のいらつしやることを、隠しておいでになつて、世

間の人達にお知らせすまいと、お考へになつていらつしやるからでございませう」と、申し上げると、笑つて、「無情なお隠し立てだ。だがそんなにお隠しになつたところで、世間の人達はみんな世にも稀な美人でいらつしやることを、嘆ぎ出して終ふだらうに」とおつしやつて、「やつぱり案内してくれ。私はね、好色の心なんか持ちあはせてゐない者だよ。この淋しい山莊にかうして琴なんかを搔鳴らしていらつしやる御様子を想像してみるにつけ、どういふものか、實際、世間普通のお方には考へられないんだよ」と、ことこまかにおつしやると、「桑原桑原。如何にも無分別のやうに、後でお叱りを受けることでせう」と言つて、姫君達のいらつしやるお部屋の前は、竹の透垣を結び渡して、何處も仕切りが嚴重であるが、其處を教へてお連れ申した。お供の者達は、西の廊下に呼んで坐らせて、その宿直の者が應對する。

中將の君が向うへの通路になつてゐるらしい透垣の戸を、押開けて御覽になると、簾を少し短かめに捲上げ、月に風情を添へながら霧が飛過ぎてゐるのを眺めながら、人人がゐた。簀子の上には、瘦せて悄然とした女の子が一人と、同じやうなさまをした女房達が、ひどく寒さうにゐた。部屋の中の人は、一人は少し柱の蔭になつてゐて、琵琶を前に据ゑて、撥を手で弄びながらゐたが、雲の中に隠れてゐた月が急にかつと明るく現れ出ると、「扇でなくつても、これでも、月を招き出すことが出来るのね」と言つて、月を覗き見た顔は、非常に可憐で、艶麗のやうに見受けられる。

そばに俯向きにかがんでゐた人は、琴の上におほひかかつて、「入日を招き返した撥はあつた。が随分妙なこじつけ方をなさる姉様ね」と言つて、笑つた様子は、今少し重重しくおくゆかしかつた。「入日とまでは行かなくつても、これもまんざら月に縁のないものではありますまい」などと、とりとめのないことを、仲好く言ひあつていらつしやるお様子など、まるつきり餘處で想像してゐたのとは違ひ、づつと淋しくくゆかしい。昔の物語なんか語り傳へられてゐることを、禁中の若い女官達が讀んでゐるのを聞くと、淋しい山莊に美しい姫君達が思ひがけなくゐられるやうなかうしたことがきつと書いてあるが、そんなことは實際にはなかつたらうと、腹立たしく思はれるのだが、ああこの世には情趣のあふれた世間の裏といふものがあつたと、中將の君は姫君達に心を奪はれて行かれるらしい。霧が深いから、はつきり見える筈がない。また月が出て來るであらうと思つてをられる中に、奥の方からお客様が來ていらつしやるとお告げ申した者があつたのであらう、簾を下して皆這入つてしまつた。びつくりしたといふ風ではない、おだやかにふるまつて、靜かに隠れて行つた様子など、衣ずれの音ひとつせず、極めてしとやかな物腰で、胸が詰まるやうで、非常に上品で雅であるのを、感の深いことに思はれる。中將の君はそつと、其處を出て來て、お車を持つて來るやうに、京都へ使ひを走らせになつた。そしてさつきゐた宿直の者に、「折悪しくお留守に上がりましたけれど、かへつて幸せに、日頃から願つてゐたことを少し叶へさせて頂いて、か

うしてお邪魔してゐることをお取次ぎしてくれ。すつかり夜霧に濡れてしまつたこともお知らせしようよ」とおつしやると、行つて申上げた。姫君達は、こんなに隙見が出來たらうとは思つてもみられなかつたが、氣儘に合奏なんかをしてゐたのを、お聞きになつたのではなからうかと、居ても立つてもゐられないくらゐ恥しがられる。さう言へば不思議とかをりの高い風が吹いてゐるが、想像も及ばないことであつたから、怪しまなかつた愚鈍さよと、狼狽して恥しがつていらつしやる。双方の間を取次ぐ女房も、物馴れない齡の行かない者であつたから、いい機會であるから何事もと薰の君は決心して、未だに深く閉ざしたままでゐる霧にまぎれて、さつきの簾の前へ出て來て、そのまま其處にいらつしやる。山家育ちの若い女房達は、應對の返事をすることも知らないくらゐで、御座布團をお進めする様も無器用に思はれる。「この簾の前に、そはそはしてをります。一寸した出來心だけでは、かうも尋ねて來まいと思はれる險しい山路だと思ひますのに、思ひの外のお取扱ひですね。だがかうして物凄いな夜露に濡れる旅をつづけてをります中には、なるほどさういふ心であつたかとお察し下さる時もあるだらうと、お期待してをります」と、極めて眞面目におつしやる。若い女房達の中に、うまくお答への出來るやうな者もゐず、一同おし黙つて恥しさうにしてゐるのも、恰好のいいものでなかつたから、侍女の奥深くに寝てゐるのを起さうとなさつたところが、手間取つて、わざとらしくなつてしまつたのが氣詰りで、「なんにも存じませぬ私達の身の上で

呑込み顔に何と申上げられませう」と、大層おくゆかしい上品な聲で、引籠つたまま聞えるか聞えぬかに姉君がおつしやつた。「内内知つてゐながら、世間のことを知らず顔でゐるのも、世の風習だと伺つてゐますが、貴女のやうなお方が、そんなに曖昧になさうといふのは、それは残念なことに思はれます。」立派に何事も悟り切つていらつしやる父君の宮などと、列べて噂されていらつしやる貴女のお心の中は、萬事に渡つて綺麗に澄んで推量られますが、このやうに隠し切れませぬ私の思ひが深いか浅いかぐらゐるは、御辨別あつてこそ、さういふお心でいらつしやる甲斐があるといふものでございませう。世間一般の好色と一緒にして、お考へになるのだらうか。さういふ方面のことは、よしわざわざ進める人があつても、誘惑されるなどは思はれない強い心を持つてゐるのですよ。かういふことは自然人からもお聞き及びになることとございませう。退屈をし切つて日を過ごしてをりまする私の人世觀を、お話し相手にお願ひしてお話し、かたがた、こんなに世間を離れてさぞかしお歎きの、深からうとお察し出来るお心のお氣晴らしに、私をびつくりさせるやうなお話をして下さるやうになつてお暮しになつて下さつたら、私の願つてもないこととす」などと、長長とおつしやると、姉君は恥しくて答へにくいので、起した老女が出て來たのにお任せになつた。老女(辨)は意想外に出しやばつて、「ああ恐れ多い。お氣の毒なこの場の體でございませう」と。どうぞ簾の中へ。若い人達は、物の程度といふことを知らぬやうでございませう」などと、甲高

に言ふ聲が、年寄じみて、ゐるのを、聞苦しいことに姫君達は思はれる。「すつかりおちぶれて、世の中に住まつていらつしやるお方達の數には這入らぬお有様で、當然さうあらねばならない方々さへ、参上して禮をお盡し申されることも、段段減る一方のやうなのに、今時に珍しいお志のほどは、數ではございませぬ私ごときの膽にまで、深く銘じ申されるのでございませうが、姫君達の世馴れなお心の中でも無論それをお存じになつていらつしやるのでございませうが、申上げにくいのでございませう」と、大變あけすけで物馴れてゐるのが、小面憎くはあるが、その態度が一通りの人らしくて、おくゆかしい話ぶりなので、「ひどく頼りない心地がしてゐるが、眞に嬉しい御應對です。萬事實際、分つてゐて下さる力強さはこの上ありません」と言つて、御簾のそばに寄つたままではらつしやるのを、几帳のかたはらから見ると、やつと物の色目が區別され出した明け方の折柄、成程御微行姿と見える、狩衣姿がしたたかに濡れしをれてゐるおん身に、嗚呼この世の匂ひではないのか知らと、怪しまれるほどいい匂ひが満ちてゐた。この老女は泣いてしまつた。「出過ぎましては御不興を蒙るのではないかと、我慢もしてみるのでございませうがね、何でございませう、悲しい昔のお話を、どんな折に、お話し申上げて、たとへその一端でも、お傳へ申上げたいものだ、長年の間佛様にお詣りする時にはきつと、折の來るのを一緒にお願ひ申して來ましたその御利益でせうか、かうも嬉しい折が参つたのでございませうのに、まだ申し出しもしない中から涙が目につばい

に溜つて心が暗みまして、申上げることが出来ませぬ」と震へる様子は、ほんたうに心から悲しいらしい。總て、齡を取つた人は、涙もろいものであることは見たり聞いたりして知つていらつしやるけれど、こんなにまで深く思詰めてゐるのが、いぶかしくなられて、「此處へかうしてお邪魔に上ることは、幾度ともなく度重なつたが、貴女のやうな心の深い方にはお目にかかれなないので、だから露つばい道の途中で、ただ一人露だやら涙だやらでびつしより濡れたものでした。嬉しい折ですのに、言残したりなどは決してなさらないで下さいよ」とおつしやると、「こんないい折は二度とはないでございませう。よしあつたといたしましても、今夜の中も當てにならない老人の命なんか、頼むのがそもそも間違つてゐませうよ。ですからせめて、かういふ古い御縁故のものがこの世に生きてゐたといふことだけでも、知つておいて頂きませう。女三の宮にお事へしてゐた小侍従（女三の宮の乳母の娘）が、世を去つてしまひましたと、誰からとはなく聞きました。昔仲好しに思つてゐました小侍従などと同じやうな朋輩が、大概死んでしまひまして私達の世ももうお終ひといふ時になつて、遠い國（筑紫）から舞ひ戻つて来て、この五六年の間、私は此處にかうして御奉公してゐます。がかう申したところで何のことやらさつぱり御存じではないこととございませうよ。が、今藤大納言と申し上げてゐる方のお兄上の、衛門の督様でお亡くなりになつたのが、何かの機會かなんかに、あの柏木様のことであると言つてお聞き傳へになつたことがございませう。お亡くなり

になつてから、どれだけの年月も経つてゐないやうな氣持ばかりがいたします。あの時悲しかつたことも、まだ涙で袖が乾く間がない昨日今日のこのやうに思はれますのに、指を折つて數へてみますと、もう二十年にもなりまして、こんなにすつかり大人らしくお成りになつたお齡のことも、まるで夢のやうでございませう。その故權大納言様（柏木）の御乳母でありましたのが、辨の母でございませう。さういふお關係で私は朝夕親しく權大納言様にお事へいたしてゐましたが、人のお仲間入りも出来ないつまらぬ自分ではございませうが、人には内證で、御思案に餘つたやうなことを、折折お洩らし下さいまして、御病ひが重もつて今は御臨終となられた時でございませう、呼びつけになつて、少しお遺言になつたことがありましたが、その中にはお耳にお入れ下さつていいことが一つございませうが、いえこれだけ申上げましたが、若し残りが聞きたくお思ひになるお心がおありでしたら、どうか又の時ゆつくり全部聞いて下さいませう。若い皆さん方も、見苦しく、出しやばつてゐると、さつきから肩をつつきあつていらつしやるやうだけれどかういふ仔細があつてみれば道理でせう」と言つて、流石にあたりを憚つて口を噤んでしまつた。奇怪な夢物語りをするかのやうに、また巫女のやうな者が神がかりの状態になつて怪しく問はず語りをするかのやうに、中將の君は辨の話を物珍しく思はれるけれど、長い間づつと一人悲しく不審に思つて來られたことの筋道をお聞かせするので、非常に心は引かれになるけれど、まつたくのところ人目も多いし、それに

きなり昔話に關はつて、夜を明かしてしまふのも、氣がきかないやうだから、「それだけの話では一寸見當がつかかねるけれど、昔のことだとお聞きするだけでも懐しく思はれる。だからきつとこの残りを聞かせて下さい。今にも霧が晴れて行つたらさぞ不體裁だと思はれる私のをかしな恰好を、姫君達から面目なく見咎められてしまひさうな風ですから、もう少し長居させてゐて頂きたいんだけど、残念です」とおつしやつて立上られると、例の宮の籠つていらつしやる寺の鐘の音が、折柄かすかに響いてゐて、霧が濃く厚く立ちなびいてゐる對への峰に、幾重にも幾重にも重なりあつてゐる深い雲が、宮へ走せる思ひを遠くへ断ち隔てしまつて心細く思はれるにつけ、一層この姫君達のお心の中が氣の毒に思はれ、どんな歎きを心に留めていらつしやるだらう、さぞさまな歎きを心にしつくしていらつしやるだらう、こんなにまで内氣でをられるのも別に不思議はないことだ、などと中將の君はお思ひになる。

あさぼらけ家路もみえずたづねこしま木のを山はきりこめてけり

この明け方、家へ歸らうにもまだはつきりと歸り路が見分けられませんが、はるばる尋ねて来た櫃の尾山は尋ねて来たかひなく霧に深く立て置かれてゐます。「あさぼらけ家路もみえず……」はるばると尋ねて来た宮にはお目にかかれず、歸らうにも姫君たちに心を引かれる——の意が背後にある。櫃

の尾山「宇治の宮處。宮の籠つてゐられる阿闍梨の寺を暗示してゐる。

ああ心細いことでことですよ」と、行きかけて戻つて来て休息していらつしやる姿を、かういふ中將の君の御姿は目の肥えてゐる都の人でさへ、やはり類のない氣高さであるとお感じ申すのに、まして此處の女房達がさう思ふのはあたりまいのことだ。女房達が御返歌をお傳へにくさうにきまり悪がつてゐるから、例の控へめの聲で姉君が、

雲のゐる峰のかけ路を秋ぎりのいとどへだつるころにもあるかな

常住の雲が立ち置めてゐる峰の懸路を、深くたなびいてゐる秋の霧が、遠く險しく押隔ててゐる夜明け方でございます。(今は丁度家路の困難な時である、と言つて、中將の君を引止めた心が背後にある。)

それとなくお歎きになつた様子は、心が深くいたはしい。この山莊は何ひとつ注意を引く眺めとてない處であるが、が事實同情を寄せることが少なからずあるけれども、明るくなつて來ると、流石に直接顔を見られのが恥かしい氣がして、「よく話が出来なかつたので、承ることも申上げることもし澤山残つてゐますがそれは、もう少し親しくなつてから、お怨み申しませう。と言ひますのは、こんなに私を世間一般の人と同様におもてなしになるので、案外御分別がなかつたなあと、不服なん

ですよ」とおつしやつて、宿直の者がお座席を設けた西面の廂の間にお出でになつて其處で中將の君はあたりの風景を御覽になる。「網代は人が騒いでゐるやうだね。だが氷魚も寄りつかぬらしい。さつぱり氣勢があつてゐないやうだね」と、御供の者達がよく事情を知つてゐて言ふ。みすばらしい舟に刈つた柴を積んで、自分自分思ひ思ひの職業のために、行來する人人が、頼みがひのない水の上に浮んでゐるのを見てゐると、思へば誰一人例外のないこの世の中の無常である。自分は頼みがひのない水の上などに浮んでゐない。金殿玉樓に安らかな身の上だと思つていい世の中であらうかと、中將の君は思つひつづけになる。硯を取り寄せて向うの姫君に申上げになる。

はし姫の心をくみてたかせさすさをのしづくに袖ぞぬれぬる

淋しい宇治橋に淋しく住んでゐられる橋姫の神の心を察しながら高瀬にさなす船頭の私は、棹のしづくで袖が濡れると共に、涙でも袖が濡れてしまつた。(この歌明らかになされてゐるだけの橋姫の傳説では解釋が徹底しない。中將が船頭になつての歌。言ふまでもなく橋姫を姫君達。船頭を中將とする心が背後にある。「橋姫」宇治橋の神。愛(はし)姫にも通はせてある。「心なくみて」水の縁で汲みてといふ。)

同じ景色を眺めて歎いていらつしやるでせう」と記して、宿直の者に持たせになつた。寒さうに鳥肌立つた顔をして持つて行く。姉君の御返歌、紙の香なんかはつきりしないやうなのは氣が引けるやうだけれども、時を考へなければ、こんな時は早いのが禮儀であらう、と思はれて、さしかへる宇治の川をさあさ夕の雫や袖をくたしはつらん

淋しい宇治川の兩岸の間を毎日毎行來してゐる宇治川の渡守よ、朝夕の棹の雫が、それに自分をわびて泣く涙が、袖を濡らして腐らしてしまふことであらう。(川をさを姉君自身の身に引きくらべてゐるのが背後の意になつてゐる。「身さへうきて」さす棹の雫にぬるる物故に身さへうきてもおもほきるかな「細流」)

その身までも憂く水の上に浮いて」と、大變心深くお書きになつた。ありのままに難なくお詠みになつたと、心を引かれになつたけれども、「御車を持つて参りました」と、人人が騒ぎ立てて申上げるので、例の宿直の者一人だけを呼寄せて、「お歸りになる時分に、きつと伺はう」などとおつしやる。濡れたお着物なんかは、脱いで皆この者の肩にお掛けになつて、取りにおつかはしになつたお直衣に着換へなすつた。

中將の君はお歸りになつてからも老女の物語が、氣になつて時時思出しになる。想像してゐた

よりはもつとづつと立派で、大様で心を引いた姫君達のお様子など、目先から離れず、やはり出家は出来ない執着の多いこの世であつたと、お氣弱く頷かれる。御手紙をお上げになる。戀文めくともなく、白い色紙の厚ぼつたいのに、筆の癖を直してその中から書きよささうなのを選つて、畢つぎも見苦しくなく書かれる。「ぶしつけな振舞ひではないかと、無理に我慢しまして、遺憾に思ふことが多いのも堪へ難いことです。一寸申上げておいたやうに、これからはお簾の前にお邪魔することも、心易く思つて許して下つていいと思ひます。お父君の御山籠りが終へるまでの日數をも承つておきまして、あの鬱陶しかつた霧のやうにとやかく思迷つてゐる私の心も晴らしたいと思つてゐます」などと、さう思つた通りをすらすらとお書きになる。お使者は左近の將監といふ者で、「あの婆さんを見附けて、この手紙を渡してくれ」とおつしやる。そして宿直の者が寒さうにして行來してくれたことなんかを、氣の毒に思はれて、大きな檜破子ひわこにつめた御馳走などを、澤山こしらへてお持たせになつた。翌る日、例の御寺へも物を上げられた。寺に籠つて修業してゐる僧達も、この頃中の嵐では、心細い限りで困難な極みであらうが兎に角宮も七日のお念佛の間のお布施はお上げになるであらうと、氣を利かして、絹綿ねんわたなど御贈物は多かつた。丁度それが御參籠が終つて山をお下りにならうとする朝のことであつたので、宮は修業の人達に、綿、絹、袈裟、衣など、總て一揃ひづつ、寺にゐる僧全部につかはされることが出來た。山莊では例の宿直の者が、あのお

脱ぎ棄てになつた、なまめかしくて見事なおん狩衣おんかりなど、世の常のものではない白い綾織のお着物が、柔く言ひやうのない匂ひを立てるのを頂戴して着て、からだの方も亦一緒に頂戴しないものだから、自分には不似合な袖のかをりを、會ふ人毎に不思議がられ褒められるので、だから頂戴してかへつて氣苦勞であつた。思ふままに氣樂に人前へ出ることも出來ず、恐ろしいと思ふほど人が喫驚する匂ひを、どうかして無くしたいものだと思つても、何分おろそかには出來ない方のお移り香なので、まさか洗濯することも出來ないのは、餘りと言へば餘りに氣の毒であつたやうだ。中將の君は、姉君のお返事が見にくい處など少しもなく、ひどく子供つばいのを、おくゆかしく御覽になる。宮へも「かういふふうに御手紙がありました」などと、女房達がお話して、それを御覽に入れると、「そんなに取上げて言ふやうなことか、色戀いろこざたにして返事を上げられたりしたら、かへつて笑止に思はれよう。知つてる通り、普通の若い人とは違つた御性質のやうだから、私が居なくなつた後あとも姫達のことはどうかなどと、一言ひとことそれとなく願つたから、さういふ意味で念頭におかれたのだらう」などとおつしやつた。そして御自身も、いろいろのお見舞ひ品が、山寺の部屋に遣入り切らなかつたお禮などをお書きになつたから、中將の君も伺はうと心が動いて、それにつけては先づ三の宮みや（匂宮）が日頃、このやうに奥まつた處に住んでゐる女で、會つてみると案に相異して美しいといふ女こそ風情があるだらう、嗚呼そんなのがゐてくれたらばいいになあと、ゐてくれ

たらばごとにさへおつしやるやうな熱の上げ方だから、大いに吹聴して、ひと泡おふかせ申さうと思はれて、静かな夕方に掛けられた。例によつて、いろいろのお話をしあはれるついでに、宇治の宮のことを話し出して、あの明け方の有様などを、精しくお話しなされると、宮は心深く興味を覚えられた。そらお出でなすつたと、御様子を伺つて、強く心が動くやうに中將の君は力をこめて話しつづけられる。だがその来た返事は、どうして見せて下さらなかつた。私だつたらな」と怨まれる。「さうでせう。随分いろいろ御覽になるらしいその切れつばしさへ、見せて下さらないぢやないですか。あの姫君達は、こんなにひどく埋もれてしまつてる私の身ひとつに包み隠して、それで無事ことがすみさうでもありませんから、きつとお對面おさせしようと思つてゐるのですが、どうしてあんな處へ尋ねてお出でになりませう。軽い身分の者こそ、惚れたかつたら随分思ふままに惚れられる世の中でございますね。人目を避けて澤山ゐるやうですな。さういふ方面の女で見どころがあると思はれる、淋しさうなのが人に知られないでゐる住ひは、山里らしい隅つこの地などに、自然あるやうです。今お話してゐるのは、父君といふのがひどく世間を嫌ふ聖風の人で、野暮つたいだらうと、長い間さう思つて輕蔑してゐまして、噂が出てさうです耳さへ借さなかつたものです。霧を通した幽かな月影で盗み見たあの顔がこん度見て見劣りしなかつたら、必ず十分な器量でせう。起居容姿、まさにあのくらゐであるのを理想的であると思つていいでせうね」などとお話しに

なる。三の宮は、終ひには、ほんたうに羨ましくなり、大概の女には心を動かされさうもない人が、こんなにまで深く思ひ込んでゐるのは、假初ごとではあるまいと、一方ならずそぞろに姫君達を慕はしく思はれるやうになられた。「尙一層しつかり様子を御覽なさい」と中將の君を勵まされて、高い身分の自分が心のままに振舞へない仰仰しさを厭はしいとお考へになるまでいらいらなざるので、その宮のお胸中が可笑しくて、「いえね、結局はつまらないことですよ。かりそめにもこの世の中に心を留めまいと、思ひましたわけのある身で、その場限のとりとめのないことは差控へたうございませうのに、遂げられさうもないはかない邪念が燃え出したら、すつかり事志と違つてしまふことが出體しますからね」と、申上げられると、「そら、ああ仰山な。何時もの大見得の聖言葉、末が見届けたいものだ」とおつしやつてお笑ひになる。中將の君は心の中では、あの老女がおぼろげに洩らしたその方のことなどが、それは長い間疑惑として胸にあつたことだけに、老女の言葉で非常に大きな刺戟を受けて、悲しく思はれるので、風情があると見ることも、難の打ち處がないと聞くことも、さうした女のことなどちつとも心に留まらなかつた。

十月に這つて、五六日頃に、宇治へ伺はれた。「丁度網代の時ですからこんどはあれを御覽になるといいでせう」と、申上げる者達があるけれども、「どうして、その蟬蛸と命のはかなさを争ふ假の世の身であることを知つてゐる自分であつて、網代なんかへ近寄らう」とおつしやつて、遊びのこと

は省略になつて、身輕に網代車あじぐるまに乗られて、扮装いせたちも練の直衣なほしに指貫袴(二〇)を新しく拵へられて、強ひてその質素なものを着用になつた。宮は心待ちにしてゐられたので喜んで迎へて、宇治の山莊に因んだ御褒應を、丁寧になされる。日が暮れると大殿油おほやぶのそばで、前前に御不審のまま讀みさしにしておかれた經文なんかの教への深いところなどを問題にされ、阿闍梨も山から呼下ろしになつて、その義理などを講じさせになる。さうかうして一同まどろみもせずにいる。と、河風が荒荒しく吹きまくるのに交つて、木の葉の散り亂れる音、水の響きなんか、趣きなどといふものを通り越して、怖ろしい心細い宇治の山里の様である。明け方近くなつたらうと思ふ時分に、何時かのしののめのことと思出されて、それで琴の音の情趣に富んでゐるといふ話のきつかけを見付け出して、「先夜霧に道を迷はされながらお邪魔に上りましたその曉に、大變風情のある樂器の音を、それもたつたひと聲だけ拜聴しまして、耳に残つたのが、ひと聲だつたためにかへつて不思議なくらゐる心に残り、しよつちゆう思浮べられます」などとお話になる。「いや世の中の風流をすつかり断念してしまつてからといふものは、昔習ひ覺えましたことなんか綺麗に忘れてしまひましたよ」と宮はおつしやつたが、人を呼んで琴を運ばせて、「全然柄ではなくなつてしまつたよ。」誰か先に弾いて行つてくれる人について行つたら、そしたら思出されて来るだらう」とおつしやつて、琵琶をも取り寄せて、宮が中將にお進めになる。中將の君取つて弾じになる。が、「とんと蔭でお聞きしてゐたと同じ

ものを弾いてるとは、思はれませんよ。あの時あんないい音がしたのはお琵琶が上等なせみぢやないかとさう思ひましたがね」とおつしやつて、十分くつろいでお弾きにならない。「いや、随分お人が悪い。そんなにお耳に留まるほどの藝なんか、どこから私どもまで傳はつて来よう。断然なことです」とおつしやつて、琴を鳴らしなかつたが、その音は哀調深く人業ひとわざとは思へないくらゐ牙え反つてゐる。半分は、峰の上に狂ふ松風が手傳つてゐるのであらうか。が宮はわざと不確ふたしさに覺束きやくながられて、名曲一曲ほどで止めになつた。「このあたりに、正式に習つたのではなくて、時時かすかに聞える箏この音、あれはいくら分つてゐるんぢやないかと聞く時がありますが、氣をつけて聞いてみたことなんかなくなつてから、随分久しくなりましたよ。思ひ思ひに、自分自分が弾いてるやうだが、多分河の浪音ばかりが調子を合はせてゐるのだらう。勿論ほんの少し用に立たせるばかりの拍子なんかさへ、出来てゐないとさう思ひますがね」とおつしやつて、「弾きなさい」と向うへ言はれるが、「あの明け方ちつとも氣がつかずに獨り遊びをしてゐたのを、お聞きになつたらしいのさへあるのに、いえ、中將の君のお耳には、随分とんちんかんだらう」と部屋に引き籠つたまま、二人とも御承知にならない。三度四度お進めになるけれども、あれこれと御辭退になつて弾かずじまひにされたから、中將の君は大變残念に思はれる。それにつけても宮は、こんなに見苦しく世間離れがして、日を過す姫君達の様子などが、密に考へてゐたよりもつとつとと甚しいのなど

を、恥かしく思はれた。「職につかせるなどはもつての他、世間にさへ何知らせようと、さう思つて育てて日を送つて来たが、齡を取つて今日明日ともわからない私の命が、今は残りどれだけでもないのと思ふにつけ、世は棄ててゐるとはいふものの、流石に行末の長い姫達が、さぞ零落してさまよひ歩くだらうと、このことこればかりが、まつたくのところこの世をおいとましようと思つてゐる今はの際の振棄てられない執着なんですよ」と、お話しになると、中將の君は心から氣の毒に宮のお顔を御覽になる。「特別の御後見だとか、夫だとかいふ者でございませんでも、心安く思つて下さるやうにとさう思つてゐます。少しでも命があります間は、私がかういふ風に申し上げますことはただの一言も、違へ申さないでございませう」などとおつしやると、「非常に有難いことだ」と宮はしみじみと言はれる。

さてその明け方、宮がお勧めをなさつてゐる間に、あの老女を呼寄せてお會ひになつた。老女は姉君の御後見として事へてゐられる。辨の君と言つた。齡は六十に少し足らぬくらゐになつてゐるが、上品なおくゆかしい素振りをして、ものなんか申し上げた。故權大納言の君が、来る年も来る年も人を慕ひつづけて、たうとう病氣になつて、擧句の果ては、他界されてしまつた有様をお聞かせ申出して、止め度なく泣く。まことに、よし餘處の人の上のこととして聞いてさへ悲しだらうと思はれるこの古い出來事を、まして長い年月の間、捕へやうがなくなつて、懐しく、どうしたこと

の始めからかういふことになつたのだらうと、佛にも、ことの始終をはつきりお知らせ下さいと祈願をこめて来たのであつた。その効験でか、こんなにも夢のやうに悲しい昔の出來事を、思ひもよらぬ手筈から聞き出したのかも知れないと、中將の君はこぼれ落ちる涙を止めることが出來なかつた。「だが、かうしてその古い時の事情を知つてゐる人が残つていらつしやるのを、不思議にも面目なくも思ふんだが、貴女と同じ理由でやはりこんなに言ひ傳へることが出來る人達が他にもあるでせう。長い年月の間に渡つて聞きたいと思つてゐても出來なかつたのにね」とおつしやると「小侍従と辨とをのいては、他に知る人はございませぬ。一言さへ、また、別の人に聞かせませぬ。こんなにつまらない、人間らしくもない身分の者でございませぬけれども、夜盡大納言のおそばに從つてをりましたから、自然女三の宮様との間の御様子も知り初め申しましたが、お心ひとつに堪へかねてお慕ひになるさうした折折、小侍従と辨とのただ二人の中だけに、まれえにお手紙のお使ひがございました。立入り過ぎますのも何でございませぬから、精しくは申し上げませぬ。御臨終になられまして、少しお言ひ遣しになつたことがございましたが、かうした賤しい身分の者には恐れ多くて、心配に思ひまして日を送りつづけてまゐり、どうしてまあお耳にお入れしようかと、御覽の通りの身で、思ひにまかせぬそのお詣りの折にも、それを案じ申しましたが、佛はこの世においでになつたと、心に深く知りました。お目にかけてねばならないものもございませぬ。今となつてはど

うなるものか、いつそ焼き棄て申さう、かう齡を取つて命が且夕に迫つてゐる自分であつて、後にお残し申したら世間に落ち散るやうなこともあらうと、非常に氣がかりに思ひましたが、こちらの宮のお住ひにも、時時お運びになる御様子なのを、見掛けするやうになりましたから、いくらか先が明るくなり、どうかこんな折もと佛に祈願をこめする力が湧いて來たのでございました。どう考へましてもこれは、前世からの宿縁でございませう」と泣きながらこまかに、中將の君の生れた時のことも、よく覚えてゐて申し上げる。「故大納言様がお亡くなりになつた騒ぎに母でございました人が、間もなく病氣になつて、それからどれほど経たないで世を去つてしまひましたから、私は深く思ひに沈みまして、喪服も主人の喪と母の喪と二つの喪を重ねる意味の上で着て、悲しさを歎いてをりました頃に、年來よくない男で懸想してゐましたが、私を欺いて、西の方の海の果てまで連れて行きましたから、京都のことまで音信不通になつてしまひ、とかくしてその男も其處で死にまして後、十年餘り過ぎて、その時に、まるつきり知らぬ世界へ來る心地がして、上京してまゐりましたが、丁度この宮が父方の親類にあたつてゐまして、子供の時分から參殿しつづけて來た縁がございましたので、いえ今ではかう齡も取りまして世の中の人達に交るやうな身ではございませぬけれど、だが冷泉院の女御様（柏木の妹）、そちら様なんか、昔親しくお噂に聞いてゐました處で、お頼りするすぢでございましたが、でも何となくばつが悪うございまして、參上申す

ことが出來ませんでしたして、さういふわけでこの山蔭の朽木になつたんでございませう。昔若い盛りでありました人達が、大概なくなつてしまひました古久しい今の時勢までも、澤山の人達に死に後れてをりますこの命を、情けなく思ひまして、さうしてやつぱりこの世の流轉をつづけてをります」などと申上げてゐる中に、何時かもうさうであつたやうに夜がすつかり明け放れた。「よし。ではこの昔話は話し盡すことは出來ないやうだ。また人に聞かれぬ安心な處で話して貰はう。侍従と言つた者は、ぼんやり記憶してゐるのでは、五つか六つの時分であつたか知ら、急に胸の病氣にかかつて死んだと聞いてゐる。いやかうして會ふことが出來なかつたら、私も父を知らない罪の重い自分で、生涯を送らなければならなかつたよ」などとおつしやる。辨は細く捲き重ねてある反古などを、取出して來て差上げた。「若君の前で焼き棄てて下さい。私はもう生きられる様子もなくなつてしまつたと、おつしやつて、この手紙を集めて下さいましたから、小侍従にこんど會ふ機會に、小侍従の手から確にお傳へ致さうと思ひましたのを、間もなく一人遠く旅立つてしまひましたのは、私といたしましてはこの上なく悲しいことに歎かれます」と申上げる。何といふことなしに、中將の君はその袋をお隠しになつた。そしてかういふ老人は、問はず語りに、不思議なことの例にかうしたことを言出すのではなからうかと、不安にお考へになつたけれど、繰り返し繰り返し他言をせぬことを誓つたので、さうでもあらうかと、だがやはりまた深く御心配になる。宮はお病

強飯などをお進めになる。昨日は休日であつたが、今日は禁中のお物忌も済んだらう。それに院（冷泉院）の女一の宮様が御病氣でいらつしやるお見舞ひに、是非上らなければならぬから、あれだやらこれだやら隙がないんですが、又この忙しい時を過ぎて、山の紅葉が散らぬ先に伺ひませうと仔細を中將の君はお話しになる。「こんなに時時お立ち寄り下さる貴方の御威光で、山の蔭も少し明るくなつたやうな氣がしますよ」などと、宮は喜んで申される。

中將の君がお歸りになつて、先づその袋を御覽になると、唐の浮線綾を縫つてこさへて、上といふ字がそのうへに書いてある。細い組紐で口の方をゆはへ、かの柏木のおん名で封がしてある。開けるのも怖ろしく思はれる。稀に出された御手紙の返事が、いろいろの紙に書かれて、五つ六つ這入つてゐる。見てお行きになると、さては、あのお手紙で、病氣は重く命も終り近くになつたので、二度と手紙を差上げることは難しくなつたが、戀しく思ふことは一層つた。おかたちも今は尊く變つておいででせうが、などとさまさまの悲しいことを、陸奥紙五六枚に、ぼつたりぼつたり奇怪な鳥の足跡のやうに書いて、

めのまへにこの世をそむく君よりもよそにわかるる
たまぞかなしき

この世の執着を目前に斷つて出家してゐられる貴女は悲しいであらうが、それよりも、貴女をこの世に残して餘處へ別れて行く私の魂はこれは一層悲しいのだ。「めのまへにこの世をそむく君よりも……」聲をだにきかでわかるる玉よりもなき床にねん君ぞ悲しき（古今）

と記しましたその端に、「嬉しく承ります。この世に萌え出した二葉のことも、六條院の君のおん子として不自由なく成人することを思ふと氣がかりに考へますることはいけません。

いのちあらばそれともみまし人しれず岩ねにとめし

松のおひすゑ

命があるならばそれがそれであると見ることが出来ようになあ、人には内證で岩の上に植ゑた松が成長する行く末を。（岩根、女三の宮。松、薫。が直接にはそれを言はない。）

まるで書きさしにしたやうに、極めてしどろもどろに書いてあつて、「侍従の君に」と表に書きつけてあつた。紙魚といふ虫の住ひになつて、古びた蠟の匂ひをただよはしてゐるけれども、跡は消えないで、今書いたばかりであるそれにも違はない生々とした言葉が、こまごまとはつきりしてゐるのを御覽になるに、まったく世に散佚したならばと、不安であり、父母の上が何となく氣の毒に思はれるのである。こんなことがまたと世にあらうかと、心ひとつにそれからそれへと止め度なく思ひを追はれて、參内しようと思ひになつても、お出掛けにならない。とかくして母宮のお前に參

られると、宮は極めて無心のさまで、若若しい御様子をなさつて、經を讀んでいらつしやるが、中将の君を御覽になると恥かしさうになすつて顔をお隠しになつた。どうしてすつかり知つてしまつたといふことをお氣付きにならうなどと、胸の奥深く、中将の君はいろいろと思ひにふけてつてゐられた。

註

- 一、文字の旁を示し篇をつけさせる遊び
- 二、俗形のまま佛門に歸依してゐる男
- 三、音楽の調子の名
- 四、扇で月を招き上げた故事、未詳
- 五、還城榮陵王をあやぶめんとて、日のくるるに撥して、日を午にかきかへすといへり、(河海抄)
- 六、琵琶の撥をなさめる穴を隱月といふ
- 七、思ひやる心ばかりはさばらじを何へだつらむ峰の白雲(後撰集)
- 八、檜物造りの辨當入れ

九、綱代で捕れる氷魚に洒落れる

一〇、「かとり」は堅織。平絹の直衣。

一一、ことの音に峰の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけん(河海)

一二、浮織の綾織物

一三、歌により松の二葉を言つたものであることが分る、稚兒をさす、

推

木

二月の二十日の頃に、兵部卿の宮は初瀬にお詣りになる。かねてからのお宿願であつたけれども、御出立の御決心にもならないで年月が経つたのであるが、宇治のあたりに中宿をなさることに心を引かれになつて、大部分はそのお考へになられたものであらう。憂いと歎く人もあつたこの山里の名を、無條件に親しくお思ひになる原因もそれを糺せばとりとめのないことではないか。上達部は随分澤山お供を申上げてゐられる。殿上人などに至つては改めて言ふまでもなく、後に残つてゐる人としては少くその大半がお供を申上げてゐた。六條院の君から傳はつて、右の大臣(夕霧)が領されてゐる處は、川の向ふ側に、非常に廣く風致もよくつてあつたが、大臣は其處に中宿の設けをととのへになつた。大臣も、御歸途のお出迎へにお出掛けにならうとお考へになつてゐるが、突然のおん物忌が生じて、慎重にお家籠られるやうに陰陽師が申上げたから、参ることが出来ないう旨の詫びを申された。宮は何となく心面白くなく思はれたが、宰相の中將薫の君が、この日のお出迎へに参りあはされたので、反つてこの方が氣樂で、あの八の宮御一家の様子も傳へてくれるであらうと御機嫌が直つた。大臣を、心安くお會ひになりたくて、煙たいものに日頃から思つていらつしやつた。大臣の御子息の方は、右大辨、侍従の宰相、權中將、頭の少將、藏人の兵衛の佐など、一同お供申上げてゐられる。帝もお后も格別に御寵愛になつてゐられる宮であるから、一般のお氣受けもこの上なくよく、まして御縁故の深い六條院の君の御一門では、大臣夕霧の

君を始めとして身分の低い人達に至るまでも、皆内内での主君としておろそかにしないで事へ申してゐられる。處にふさはしいお設備などを、心をこめてととのへて、碁、雙六、彈碁の盤、それからそれに類似の遊び動具などを取出して、一行の方は思ひ思ひに慰み暮された。宮は、なまつたことのないお歩行に、疲労を覚えられて、この宿で一晩ゆつくり手足を伸ばさうとお考へが深かつたから、ひと先づ休息になつて、夕方、お琴などを取寄せになつてお遊びになる。前にも言ふやうにかういふ風に浮世離れのしてゐる處では、河の水音まで聲援して、樂器の音が一層よく澄むやうな氣がするので、あの聖の宮も、何分そのお住ひも舟で直ぐ渡られるほどの處にあるのだから、追風に誘はれて來る響きを聞いていらつしやると、過去の日のことが思出されて、「笛をすばらしく上手に吹通してゐるではないか。誰だらう。亡くなられた六條院の御笛の音を聞いた覚えでは、如何にも風情深さうに情のこもつた音に吹かれたものだがな。この、澄み高まつて、ものものしい風が交つてゐるのは、致仕の大臣(元の頭中將)のお孫の笛の音に、あれに似てるな」などと、獨言を言つていらつしやる。随分久しくなつたものだな。あつた遊びなんかもしないで、生きてるとは言へない幕しをして過ごして來た年月が、思ひ棄てたこの世のこととはいへ、流石に長い間のことに指折られるが、指を折つてみたとかかひがないことだなどとひとりごとが出るにつけても、姫君達の今のお有様が惜しまれ、こんな山懐におし籠めてこのまま終らせたくはないものだ、思ひつづけ

られる。中將の君が、同じ親しくしてゐるものなら姫の婿君にしたいやうに思はれる方だけれども、何分あした佛道三昧の方でかう自分が考へてるといふことなど多分心に留めないだらう。況して當世風のさぞ輕薄だらうと察せられる人などを、どうして姫のそれになんか、などとあも思ひかうも思ひして、何をなさるでもなくあたりの景色を眺めていらつしやるお住ひは、ひとつ宇活の山里であつてもこの春の夜がなかなか明かしくいのに、こちら思ひのままに遊びに耽つていらつしやる旅の宿の方では、酔つて陶然としてゐる中にいやに早く明けてしまつたやうな氣がして、匂の宮は、まだ十分歡を盡したと言へないのに歸らなければならぬことを歎いてゐられる。遠くまで霞がたなびいてゐる朝の空には、散る櫻があるかと思へば今咲き初める櫻などがあつて、それらがいろいろ見渡される中で、河岸の柳の若枝が起上つたり横に倒れたりして風に靡びてゐる影が水に映つてゐるのなどが、これが又馬鹿にはならず心を捕へるのを、かうした眺めなど殆んど御覽になつたことのない宮は、随分珍しくつて見棄て去つてしまふことが出来にくいと思ひになる。中將の君は、かうしたい機会を無駄に過ぎさないであの八の宮の住ひに上りたいものだと思はれるけれども、澤山の人が見てゐる前を通つて、自分一人だけが漕出させて行く渡船のことが、少し輕率に思はれて、躊躇していらつしやると、向ふからお手紙がある。

山風に霞ふきとくこゑはあれど隔ててみゆるをちの

しら波

そよいで来る山風に、お互の間に深く立ちほだかつてゐるその霞を吹きほぐす貴方の親しい笛の音が、託されて来るけれども、向うの河の上に亂れてゐる白波が、やはり雙方の間を隔ててゐるやうに思はれる。(「ふく」は風と笛に懸る。)

と平假名で非常に上手に書かれた。匂の宮は自分が心に思つてゐるあたりからの消息であらうとお推量でその歌を御覽になつたから、大變心を動かされて、「このお返しは僕がしよう」とおつしやつて、

遠近の汀の波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の河風

其處、此處の汀の波が雙方の間を隔ててゐるが、尙一層そちらからこちらへ止まずに吹通つて来いよ、宇治の河風よ。(「遠近の汀の波はへだつとも……」上三句は贈歌の意をそのまま受けてゐる。文通をしてもつと親しくして下さいの意が背後にある。)

中將の君はお出でになられる。遊びに耽つてゐる公達を誘つて、舟を進められる間、酣醉樂の曲を演奏して行かれると、河の上を覗込むやうに差出てゐる廊の上から、汀へ渡し下ろしてある橋の趣

向など、さうした趣向としては趣きが深く、おくゆかしい山莊なので、一同はそれを頭において舟から下りられる。お住ひの中に這入られると此處は又外とはさまが變つて、山里らしい網代屏風など、殊更に質素にしてあつて、雅致のある部屋の飾付けを、かうして客を迎へるやうなことにものならうと思つて掃除をし、掃除を丁寧に入念に入れてなさつてゐた。昔の古い樂器など、世に二つとは傳はつてゐない立派な絃樂器などが、さりげなく置かれてあるのを、人人はつきつきに彈出されて、はては一越調の手心で、櫻人の曲を演奏される。主人八の宮の名高いお琴を、かうした機會にと人人は思はれたけれども、宮は筆の琴を、氣もくばらないで折折合奏に合せになつてゐる。が耳馴れないせゐであらうか、その弾き方を大變深みがあつて風情がると、若い人達はしみじみと思つた。八の宮は處にふさはしい饗應を、心をこめてなさつて、それに世間で想像してゐたよりははづつと、帝のお孫の端にも加はつてゐるさうに思はれる人品の賤しくない人達が澤山、やはり帝の末で四位の位にある齡を取つた人などがかうして大勢の客が寄る折でもあつたらと、前前から宮を氣の毒に思ひ申してゐたのでもあらう、さういふ人達の全部が集り合つて、瓶子を取つて酌をする婦人達もむさくるしくはなく、さうした素性の人らしく昔風に起居して、よしありげにもてなされた。客の方達の中には、姫君達が住まつていらつしやる御様子想像しながら、心を碎く方もあらう。まして匂の宮は、氣輕に振舞へる身分ではない御自分を、日頃窮屈に思つていらつしやるのであるが、

せめてこんな折だけなりとと、堪へかねて、見事に咲いた櫻の枝を折つてそれに歌を添へられて、御供に従つてゐる殿上童の可愛らしいのに持たせて、差上げられた。

山ざくらにほふあたりに尋ねきておなじかざしををりてける哉

山ざくらが日に咲き輝いてゐる貴女のお住ひに遠く尋ねて來まして、貴女が頭にかざしていらつしやると同じ櫻の花の挿頭を折りましたよ。(我宿とたのむ吉野に君しいらばおなじかざしをさしこそばせめ(河海))

野が親しく思はれ昨夜はひと晩此處に泊りました」とあつたやうである。御返歌は、私達の手際でどうして差上げなど出來ようと、御覽に入れにくくとやかく思迷はれが、「かういふ場合のことを勿體でもつけてるやうにわざとらしく苦吟して、時が経つといふのも、かへつて可愛げがないことである」と世間では申してをりましたよ」などと、齡を取つた女房達が申上げるので、姉君は中の君にお返歌をおさせになる。

かざしをる花のたよりに山かつのかきねを過ぎぬ春のたび人

櫻の花を挿頭かぶしに折るついでに山家住ひの賤しい者の垣根の前を、春の旅人が通つて行つた。その春の旅人よ。(山がつかきければ、中の君の家の垣根。春の旅人は匂の宮。ほんの挿頭を折るついでに家の前を通つて下さつたばかりではありませんか。この意が背後にある。)

野を分けてさうして旅人は通つて行つた。(五)がそれは今も言つたやうなわけから山家住ひの賤しい者者に心があつてなどでは無論ない」と、大變巧者に、可愛らしく書きになつた。まつたく宇治の川風もあちらとこちらと雙方の心を別け隔てしないやうに吹通ふかよひ、その川風が吹通ふやうに雙方の者が心持を相通はせてゐる、さまざまの樂器の音を、一同は興味深く鳴らして遊ばれる。お迎へに藤大納言が、勅命を持つてお出でになつた。人人は大勢ひとかたまりに集合つて、急いで先を争つて歸りになる。若い方かた方は、姫君達のことがか心にかかつて始終しじゆう後をふりかへつてばかりをられた。匂の宮は匂の宮でまたいい機會を捕へて伺はうと思はれる。花の盛りのこととて、四方しほうにたなびいてゐる霞にも眺めて心を引かれるだけの趣きがあるので漢詩も和歌も抒情詩など澤山詠み棄てられたけれども、面倒だから穿鑿せんさくもしない。

慌しくて、十分に心の中を傳へることが出来ないで終つたのを、匂の宮は非常に残念に思はれて、手引きがなくても勝手にお手紙は常に差上げてゐられた。八の宮も、「早く御返事をしなさい。が殊更らしく戀愛沙汰にして應對してはいけない。そんなことをすればかへつて無益な心配の種に

なるでせう。評判な色事好きのお方かただから、こんな姫達がをると聞きなさつての上での、ぐつと羽根を伸ばしての、心にもない慰みだらう」と、お進めになる折折に、中の君がお返事を差上げになる。姉君は、かうした浮いたことには、戯談はげだんにもお近づきにならない深いお心である。宮は何時いづといふことはなく何時でも心細いやうな御様子をなさつてゐて、所在のない春の日を、非常に暮しにくいものに思はれて、春の日のあたりの景色を眺めていらつしやる。益益娘盛りになつて來られる姫君達の御容姿などが、いやが上にも立派になり、この上なく美しいのも、かへつて苦痛で、いつそ不器量でいらつしやつたら、かうして山里やまの中で埋もれさせることを、いたましく惜しく思ふ、さうした歎きはいくらか少いであらうなどと、朝となく夜となく思惑おもひまどつてゐられる。姉君は二十五、中の君は二十三になられた。後から思合せると今年には深く注意なさらなければならぬ年であつた。何事も心細く思はれて、佛へのお事へを常より精を出してなさる。この世に執着を持つていらつしやらないので、この世を旅立つことを急ぐことばかり考へていらつしやるから、極樂淨土へまゐられるであらうが、ただひとつ姫君達のおん事などが不便ふびんで、道心はこの上なくお堅固であるけれども、その時が來たらきつと、今は諦めようとなさるお心が動搖するであらうと、おそばにお事へしてゐる者達もお推量申すのであるが、宮であつてみれば、理想としてゐるやうなのではなくつても、世間並みでそれに評判も悪いほどではなく、まあこれぐらゐならと我慢が

出来る程度の身分の人で、ほんたうにお世話しようと、心をお寄せする者があつたなら、気がつかぬ風をして黙認しよう。どちらでも一人世に生活を立てて行く上での心頼みを持つたら、それを片のたより場處に思つてそれでまあ満足しておくであらうに、それほどまで深い心を持つて尋ねてまゐる人もない、とかう思つていらつしやる。時たま何といふこともない事ので、戀をしかけなどする人たちが、まだ極めて若い人が氣慰みに、神佛へ参拜の中やどりだとか、近處を往來する折だとかの戯談ごとに、言ひ寄つて、宮とは言つても簡略なお住ひの中にわびしくあたりの景色を眺めて暮していらつしやるさまなどを推量して、見下し顔にふるまふが、あさましくて、それにはいい加減の返事をさへ、書かせにならない。匂の宮は、やはり見ないではおくまいと思はれるお心がかりそめではなかつた。さういふ宿縁でおありだつたのであらうか。

中將の君は、その秋中納言になられた。一層高く陞進なさる位階のことを思はれるにつけても、感慨にふけられることが多かつた。どんな事情であらうかと、氣も心もふさいで思案して來られた長年の間よりは、實の父が分り仔細が分つた今日の方がより以上に苦しく、そして亡くなられた柏木が過ごしになつた昔の御様子が察せられるので、父在世の折の罪業が軽くおなりになるやうに、佛に事へようと思つていらつしやる。又あの老女を氣の毒だと心の中で思つていらつしやつて、人目につくやうな風にはない、あれこれことに紛らはして、氣にかけて見舞はれる。宇治へ伺つて

から長い時が経つたのを、思出してお邪魔に上られた。七月の時分のことであつた。京都にはまだ秋のけはひは訪れないのに、音羽の山のほとりには、風の音が冷たく澄んで、槇の山の裾あたりも最早や薄く染まつて、復た尋ねて來たのが、楽しく珍しく思はれるさへあるに、宮は況して、常よりも喜んで迎へられて、こん度は心細さうな話を、極めて多くお話しになる。「死んだ後で、この姫達を用いついで折にでも、それも迷惑にならない時に尋ねて、親しい仲間の中へ入れてやつて下さい」など顔を見まもつて眞面目に申されると、「たとへひと言でも既に承つておきましたから、決して忘れまするやうなことはございません。世の中に執着を持つまいと、萬事手控へに致してゐます自分で、直ぐにも出家になりたいと思つてゐます私のことですから何事も頼りにならなささうな短い行末でございませけれども、出家をした後でも生きて人に立交つてをります間は、變らない志を御覽に入れようと言ふ、思つてをりますしなどと申されると、非常に嬉しいと思はれた。折柄深夜の月が明るく照出して、その月が既に山の端近くへ傾きかかつてゐるやうな氣がするのであるが、この時念佛誦教をしんみりと淋しくなまつて、昔ばなしをされる。此頃はどうかつたらう。宮中などの、こんな秋の月の夜のことだが、おん前の音楽のお催しの折に伺候しあはせたことがあつた中で、それぞれその方の達人と思はれる者全部がござつて大勢で合奏した演奏など、ものものしいのを聞いたことがあつたが、そんなのよりは、由緒ある人だと取沙汰されてる女御更

衣のお局達が、お互にうはべだけの友情を交はしあつてさうしたのが、めいめい心の中では負けるものかと思ひ、夜更けの人のけはひが静まつた時に、なやましく弾き鳴らし、そんな時かすかに洩れ出る琴などの音なんかの方に、面白く聞かれるのが多かつたがなあ。いえ萬事、女は慰みごとの手引きにしたらいいんで、とりとめのないものではあるが、が人の心を動かす因だらう。だから罪が深いのだらう。子を思ふ親の心の闇を思ひやつてみても、男の子はそんなには親の心を亂さないだらう。女の方は出世と言つたところで限度があつて、一概に、つまらないものだと思限つて終ふにしたところで、やつぱり随分心配だらう」などと、世間話にして宮がおつしやるが、どうしてさう思はないことがあらうとお考へになるお心が、心苦しくお察しされるのである。「一切、ほんたうに、前前申しましたやうに執着を棄てましたせうか、私自身のことではまつたくもつて深くその心を學んでる藝はございませんが、實際かなりそのことだけれど、音楽を楽しむ喜びが、これだけが思切ることが出来ないことでした。立派に聖の心を體得してた迦葉も、だからか、立つて舞つたのでございませう」などと申して、しつこく、何時かの霧の夜一こゑ聞いたお琴の音を、たつて所望されるので、親しくなる起縁になるかも知れないと思はれるのであらうか、御自分で向うへ遣入つて行かれて、たつてお進めなさる。箏の琴を、それを極めて低い音で弾鳴らして止めなされた。すつかげ人のけはひも絶えてしまつて、あはれの深い空の様子、あたりのさまであるので、

態とらしくなくお弾きになる琴の音が胸に沁入つて、深い興趣が湧くのであるが、くつろいでは決して合奏などなさりはしない。「ひとりでにこんな鳴(馴)らし出したこの後は、若い者同志におまかせしよう」とおつしやつて、宮は佛のお前へ這入つて行かれた。

我なくて草のいほりはあれぬともこの一ことはかれ
じとぞ思ふ

私が世を去つて私達の粗末な草の庵は荒果ててしまつても、この一琴、今の姫の琴の一曲は忘去つてしまはれはしないだらうと、さう思ふ。同時に、貴方が姫の上に誓はれた一言は、むなしくなつてしまひはしないだらうと、さう思ふ。「かれじ」は草の縁。

かうして貴方とお目にかかることもこん度が多分終りであらうと、心細く思はれるんで、辛抱が出来かね、固つ苦しい愚痴が随分多かつたなあ」とおつしやつて、お泣きになる。客、

いかならん世にかかれせんながきよのちぎりむすべ
るくさのいほりは

永劫の縁を誓つたこの草の庵が、永劫の縁を以て結んだこの草の庵が、何時の世に荒果てやう。どんな世が来ても決して荒果てはしない。「結ぶ」をちぎり、を結ぶと庵を結ぶとにかける。枯れせんば、草の縁。

天覽の相撲など、いろいろの公事で混雜してゐる時が過ぎてから上りませうなどと申される。中納言の君は姫君達のいらつしやる方で、あの間は語りをした老女を呼出して、あの時の後がまだ澤山残つてゐる話などをおさせになる。入り際の月が餘す處なく差込んで、簾を透いて見える物の影がなまめかしく窺はれるので、姫君達も奥深くへ退つていらつしやる。よく世にあることのやうに色事めいてはゐらず、深い心で落着いて話を申上げていらつしやるから、それ相應のお返事など致される。三の宮は随分戀しく思はれたものだがなあ。中納言の君は心の中で思出しながら、私の心は、私の心のことだが、やつぱり人とは違つてよ。あれほど八の宮がお心から許されたことが、そんなに急がれないよ。だと言つて、離れてしまつて、近寄るなど二度とないことだらうとは流石に思はない。かういふ風に言葉を交はしあひ、季節季節の花だとか紅葉だとかにつけて、悲しさをも愛をも通はせるに、十分な態度を取つてゐて下さる姉君だつたら、それで満足だ。が縁がなくて、餘處の者の妻にでもなられるやうだつたら、流石に残念だらうに、などともう自分のものにしたやうな氣がしてゐた。まだ夜が深い時にお歸りになつた。宮が淋しさうにもういくらも生きさうにないやうに思つてをられた御様子も、思出されて、忙しい時を過ぎたら伺はうと思つてをられる。兵部卿の宮も、この秋頃に紅葉を見にお出掛けしようと、それに恰好な機を思ひめぐらされる。お手紙はしよつちゆう差上げていらつしやる。中の君の方では眞面目に考へてしていらつ

しやるのだらうとは思ひつきになつてゐないから、別に心づかひもせず、とりとめのないことにあしらつていらつしやつて、折折文通しあはれる。

秋が深くなつて行くに隨つて、八の宮はひどく心細く思はれたから、例の阿闍梨の靜かな寺で、念佛を心動かされることなく一向きにしようと思ひになつて、姫君達にもそれをお話しになる。「この世のならひとして、死別を遁れることは出来ないことなんだけれど、何處かに氣晴らしをする處があつて、初めてその悲しみを無くするものだらう。別からだを預ける人もなく、淋しさうなお様子の貴女がたを、棄ててしまふのがひどく悲しいことだ。だけど、これしきのことには邪魔立てされて、長い未來の世の間の中でまで迷暮すといふのは無益なことだよ。それに、かうして生きてお目にかかつてる時でさへ、棄ててゐる世だと思ふのに、この世を去つた後のことなんか兎や角言ふべきではないけれど、私も一人のためではない、亡くなられた母上のお面目にかけて、輕しい振舞ひをなさいますな。はつきりしたよるべでないのにその人の言葉に乗つて、又元のこの山里を戀慕ふやうなことをなさるな。ただかう、人とは違つた、前世からの因縁が人とは襟の變つた自分であると思ひになつて、この山莊で一生を終らうと覺悟なさい。一心に思詰めたなら、何といふこともなく過ぎるのが普通の年月なんだ。まして女は、それにふさはしい處に辛抱して、籠つて、聞くも不慙な餘處の非難を蒙らないやうに氣をつけなさるのがいいだらう」などとおつしやる。

いづれにしたところが姫君達は身の行末のことまでは、お考及びにはならず、ただ、先立ちなさつたなら、どうして、世に片時も生長らへてをられやうと、これだけを思つてゐられるところへ、こんな心細いことのお暗示の言葉があつたので、あれかれと言ひやうのないお心惑をされるのであつた。宮は心の中でこそ思棄ててをられるだらうけれども、朝となく夜となくお側近く常にお招きになつてゐて、急に別れらるといふのは、ひどく苦しいことではないけれども、さぞ心残りであらうとお考へになる御様子であつた。明日お山入りをなさうとしてゐられる日は、常のやうではなく佇んだり歩いたりなさつてあちらこちらを御覧になる。極めて漠然と、假の世の宿として過ごしになつたお住ひのさまを、私が世を去つた後でどうして、若い姫達が此處に我慢して籠つて日を送られるだらうと御覧になつて、涙ぐみながら、念佛をとなへてゐる様子が大變美しく見受けられる。相當の年輩になつてゐると思はれる者達は呼出されて、「私が安心出来るやうに事へてくれ。何事につけても、生れが軽く、世で取沙汰もされないやうな身分の者は、子孫が落ちぶれることも普通のことで、目立たないだらう。私達のやうな身分の者になると、人は何とも思はないだらうけれども、零落を無念に思ひながら世にさまよふ前世からの因縁が上天に對しておそれ多く、身が不愍に歎かれることがまゝあるだらう。淋しく心細い世を送るといふのは、あたりまいのことだ。生れた家の地位、家風のままに振舞つて行つたら、それが外聞きにも、自分達の氣持にも、間違ひが

なく思はれるだらう。盛大に世間の一流と肩を並べようとも考へても、その願ひに叶はない世なんだから、決して輕輕しく、疎遠にしてゐる處へすがりなさるな」などとおつしやる。まだ明け方の中に、出掛けようといふので、姫君達の方へいらつしやつて、「私が世を去つた後で心細がつてはじめ決して歎きななさるな。心を樂しませて遊びなんかしなさい。何事も思ふにまかせぬ世だのに、決して思詰めなさるな」などとおつしやつて、後をふりかへりふりかへりして出てゆかれた。お二人は非常に心細くいろいろ思續けられて、起きてゐる時も床についてからも話合ひながら、「どちらでも一人がなくなつたら、どうして日を送つて行かう。今將來の良人も定まつてゐないこの世の中で、若し別れ別れになるやうなことにでもあつたら」などと、泣いたり笑つたりして、戯談ことも眞面目ことも、ひとつ心で慰合つて過してゐられる。かのお勤めになつてゐる念佛三昧が今日は終へるであらうか、何時であらうかとお歸りの時をお待ちしていらつしやる夕方に、人が来て、「今朝からぐあひが悪くつてそれで歸ることが出来ぬ。風邪かと思つて、あれこれ手當てをしてゐる状態だ。それにつけても、こん度は特にもう會はれないやうに思はれるよ」と宮の言葉をお傳へ申した。姫君達はびつくりなすつて、どうしたわけからかと思悲んで、お着物など綿を厚く入れたのを急いで作らせになつて、差上げなどなさる。二三日の間は下りて來られない。どうですどうですと姫君達は使ひを差上げられるけれども、「殊に重たいといふわけではない。何處といふこともなく苦しいと言

つた風だ。少しでもよくなつたら、今に我慢して歸らう」などと、簡単に言葉でお傳へになる。阿闍梨はづつとお附きして看護申上げてゐた。「一寸した御病氣のやうに見えるけれど、御最後でいらつしやいませうか。姫君達の事はどうして御心配になることがあらう。人は皆御宿縁といふものが自分自分違つてゐるから、お心にかかる管のものでもございませぬ」と、一層、この世の執着を断念すべきことを申上げて、「今更決して寺を出なさいませぬ」と諫め申すのであつた。八月二十日の頃のことであつた。空のけはひも一體にも悲しい時分姫君達は、朝夕霧の晴れる間がないと同じやうに朝夕心の晴れる時がなく、御病床の父君を察して歎きながらあたりのさまを眺めていらつしやる。有明けの月がぼつと極めて綺麗に照出して、川の水面もはつきりと澄んだのを、そちらの方の葎を上げさせになつて、眺めていらつしやると、やがて山の鐘の音がかすかに響いて、明けたよと思ひになる頃に、使が来て、「この眞夜中と思はれる時分にお亡くなりになりましたよ」と泣きながら申上げる。忘れる時とはなく、どうであらうかと始終お案じなまつていらつしやつたけれども、いざ御終焉のことをお聞きになると、前後の分別もつかない心地がして、餘りにも悲しいかうしたことに、涙も何處かへ行つて終つたのだらう、ただ茫然としてうつぶしになられた。死別と言つても、目前で、はつきり別れるのが普通のことである。不安が一層つにつて、姫君達が亡くなられた父君を慕ひ歎かれることは當然である。よしそれが如何に短い間のことであつても、父上

におくれ申して世に生きる管のものだなどとは曾て思はれたことがないといふお二人のお氣質であるので、どうして父君におくれよう、おくれるものかとひた泣きに泣かれるけれども、何事も前世からの定めごとなので、何の甲斐もない。阿闍梨は、前前から約束しておかれた通りに、お後のことも何から何までお世話を申上げる。「お亡くなりになつたといふ父上のお姿だけなりと、もう一度拜見しよう」と姫君が切望しておつしやるけれども、「今となつて、どうしてそんなことをしていいでせう。御病中でも、拙僧は宮に、二度とお會ひなさらないやうにお聞かせ申上げたんだから、況して今となつては、お互にお未練を残しにならないやうなお心掛を、學びなさるべきでせう」とただこれだけ申上げる。お亡くなりになるまでの御様子をお尋ねなさるにつけても、阿闍梨の非常に深く悟つた聖心を、憎く酷いと思ひになつた。八の宮の出家のお望みは、昔からお深くあつたけれども、このやうに世話を頼む人がない姫君達のことが見棄てられなくて、生きていらつしやつた間は、朝となく、夜となくそばから離れられなくて、面をお見になられることを、淋しいこの世の慰めにして、思切ることが出来ないで年月をお過ごして來られたが、死別といふことに對しては、先立つて行くお心も残されてお慕ひになるお心も、人の力の及ばぬことであつた。中納言様は、薨去のことをお聞きになつて、ひどくはりあひなく口惜しく、今一度ゆつくり落着いて申上げなければならなかつたことが澤山に残つてゐた心地がして、有爲轉變のこの世のことが、それか

らそれへと思續けられて、とめどなくお泣きになる。「もうこれつ切り會へないかも知れない」などとおつしやつたが、やはり中納言の君の日頃のお考へでも、朝あつて夕べが計られず夕べあつて朝が計られないこの世の無常を、人より一倍も二倍も感じてをられたのだから、さうしたお言葉などは深く耳にも留まらなくて、まさか昨日今日のこととはお思ひにならなかつたのを、とめどなく悲しく思はれる。阿闍梨の處へも、姫君達の處へも御弔問を丁寧ていねいに申される。かうした御弔問なんか、他に申上げる人もないお有様だから、御悲歎の餘り分別を失つてゐるお二人の御心中ごしんちゆうにさへ、年來のお心づかひが、かりそめでなかつたことなどを思當られる。中將の君は、世間普通の場合の死別でさへ、それに出つ喰はすと、この上ない悲しさのやうに一途いちずに思詰めてどの人もあれこれと思迷ふもののやうであるのに、心を慰める處もなささうなお二人としては、どんなお心地がしていらつしやるだらうと、お察しになりながら、いろいろと後の行事ぎぎなどがあることを推量して、阿闍梨の處へも見舞ひを寄せられる。この山莊へも老女達にことよせて、御誦經などのことも、推察してお布施などを差上げられる。

明けないで夜がづつと續いてゐる心地がしてゐる中に、もう九月になつた。野山の秋のけはひが加はつてどうしなくつても淋しいのだが、況して深い悲歎の姫君達であつてみれば、袖を涙で濡らしがらで、ともすれば時雨と競争で落ちて来る木の葉の音も、川の水の響きも、瀧のやうな涙の轟き

も、ひとつ物かと思ふほど途方にくれていらつしやるので、かうした状態ではどうして、限りのあるお命であるとはいへ、しばらくの間も生きながらへてをることが出来ようと、お側に従つてゐる者達は心細く、一生懸命にお慰め申上げて思案に餘つてゐる。この山莊には念佛法要の僧が詰めてゐるが、宮がお居間に當てられてゐた處では、佛をそこに安置してそれを宮のお姿とお見受けしながら、時時お出入りしてゐた人達で、づつとお中陰に籠つて来た人達の全部が、悲しくお勤めをして日を過ごしてゐる。匂の宮からも、たびたび見舞ひを言つて上げられる。が、さうした御返事などは、差上げようなどといふ心地にはおなりにならないので、頼りがないので、中納言にはかうでもなからうに、この私をやつぱり疎んでいらつしやるんだらうと、怨めしく思はれる。紅葉の盛りもみぢの時に、文章なんかをお作りにならうとの心で、お出掛けになられたが、かうして八の宮のお住ひ近處のお散歩は、丁度都合の悪い時分だつたから、遠慮されて残念に思つていらつしやる。お中陰も明けた。泣く涙にも限りがあることだからその涙もあるひは杜絶えてゐるかも知れないとお考へになつて、随分澤山書き續けになつた。

「時雨がちなる夕ふがたに、

をじかなく秋の山里いかならんこ萩が露のかかる夕

暮

殆んど止む間ともなく時雨が降つてゐる夕方に——都の庭にゐる私の袖へ萩の露が涙と一緒にこぼれかかつて来るこんな物悲しい夕暮時、牡鹿が妻を慕つて鳴いてゐる秋の山里の哀れはどんなであらうか。(露は涙の意味をも兼ねる。「かかるは」こぼれかかると斯様なとの兩方に働く懸詞。萩は鹿の妻であり、鹿は花妻、萩を慕つて鳴くといふのが當時の詩的常識。つまりこの一首戀情を告げる意が背後にある。)

この頃中の情趣の深い空のけはひを、さも御存じないやうな顔をなさつてるのも、あまり心がないやうに思はれる。結果てて行く淋しい野も格別あはれに眺められる時です。」などとある。「ほんたうに、まるつきり心無しかのやうに返事を差上げないことが随分幾度にもなつたから、急いで差上げて下さい」などと、中の君を例によつて慇懃して、お書かせ申される。中の君は、今日まで生残つて、硯なんかを側に引寄せて見ようなどと思つたことか、嫌嫌ながら随分の日数を重ねて来たものだと思はれると、また涙がこぼれ出して、物も見えない心地がなさるので、硯を押退けて「やつぱりどうしても書けないやうです。やつとかうして起きてゐられなど出来ずのを、ほんとに、悲しさにも限りがあるからそれだからと思ふんですが、さう思ふのもうらめしくつてつらくつて」と、可憐な様子で泣きうなだれていらつしやるが、それも見た目には非常に心苦しい。夕方時分から京都を立つて来たお使ひが、宵少し過ぎて山荘に着いた。「どうして今から歸つて行かれよう。今夜は

此處へ」と姉君がおつしやつたが、「是非歸つて行きませう」と急きたてるから、氣の毒で、自分だけ立派に落着いていらつしやるわけではないが、中君の愁嘆のさまを見かねになつて、

涙のみきりふたがれる山里はまがきに鹿ぞもろ聲に
なく

父を失つた私達の泣く涙ばかりが、霧が立單めてゐるやうに暗く覆さつてゐるこの山里では、家の垣根で、鹿が、丁度私達姉妹が泣いてゐるやうに聲を揃へて鳴きます。(眼前の霧を揃へて涙の譬喩とする。鹿は然に懸る。)

黒い紙に、夜書かれるので墨繼ぎもしどろもどろであるけれども、お體裁を構へられることもなく、筆にまかせてお書きになつて封にひつくるんで差出された。お使ひは、木幡山の近邊なんか、雨が降出して来さうな空合ひではあるしひどく無氣味さうに見えるけれども、そんな物おちをすまうと思はれる者を選出されたのだらう、氣味悪さうな笹藪の端を、馬を止めて休みもしないで、急いで、ほんの一寸の間に歸参した。わざわざお前に呼出しになつて、大變濡れて来たから褒美を下さつた。前前に御覽なさつたとは違ふ筆跡で、もう少し大人らしく上手で、何となくおくゆかしい筆つきであるのを、どちらの手が姉君でどちらの手が中の君だらうと、下へも置かないでためつすかめつ御覽になつて、急にもお就寝にならないから「待つてると起きておいでになり、また御覽

になる間の長いことと言つたら、どんなにお肝に銘ずることか」と、お付きの女房達は友にささやいて、お憎くみする。眠たいからだらう。翌朝はまだ霧が深い朝の間に、急いで起きて返歌を差上げになる。

朝ぎりにともまどはせるしかのねを大方にやは哀れ
ともきく

朝霧に友を見失つてしまつた鹿が鳴く聲を、ほんのそぞろごとに哀れと聞かうか。(友まどはせるしかしは、父君を失つた姉妹のお二人。この意が背後にある。)

聲を揃へてなくとおつしやるが聲を揃へてなくことは私も決して負けないでせう」とあるけれども、あまり心ありげに振舞ふのことが面倒である。父君お一人のお蔭にかくれてゐるのを力として、何事も心配なしで過ごして来たのだ。心にもなく生長らへて、思ひも寄らないはずみが露ほどでもあつたら、氣掛りでならなさうに思ひを残してゆかれたやうだつた、父君のその御靈魂にまで疵をおつけしやしないだらうかと、總てが非常に勿體なく怖ろしくて、姫君達は返事を差上げられない。が姫君達もこの句の宮などを、輕薄な世間一般の人達のやうには御推察にならない。何氣なく走書きなさるお筆づかひ文章にしても、情趣の深いさまに艶麗さを出されるなさり方を、男の手紙など他に澤山も御存じないのだが、これこそ見事といふんだらうと感心して御覽になつて

ゐられるするが、その由緒に富み風情のある御様子に對つて、同じやうに言葉をお話申上げるのも何分不似合ひな自分達の境遇であつたりするのだからとお考へになつて、何といふこともなくただ、かうした山伏めいた風をして暮さうと思つてをられる。が中納言様へのお返事だけは、あのもの宮よりは眞面目な手紙を下さるから、姫君達の方からもそんなにまれまれではなく、差上げになる。中納言の君はお中陰が明けてから、自分でお出でになつた。

一段と低くなつてゐる東の廂の間に、その粗末な處に居間を移して姫君達はいらつしやるが、中納言の君はその姫君達の側に來られて、老女辯をお呼びになつた。父君の喪に服して闇の中に迷つてゐる心地がいらつしやるお住ひへ、まるで目がくらむやうに、いい香りがあたりに高くあふれて、這入つて來られたから、恥しくて、姫君達は御返事などさへすることが出来にならないから、「こんな風にもてなさないで、お父君のお意向にお従ひしようといふ態度に出て下さるやうであつてこそ、私もお頼みを受けてゐるかひがあるんです。しなしなとした色好の方の身のこなし方を試みたことがありませんから、人に取繼いで貰つてお話しては、言ふ言葉も出て來ません」とおつしやるので、「見苦しく、今日まで生長らへてゐるやうですけれど、思諦めやうのない悲しい夢に迷はされましてして……。心にもなく明るい空を仰ぎますのも憚られまして、端近くまでからだを動かすことが出來ません」と姉君が申されると、「ですとは、實際お心の深いことですよ。が月日

の光線のことですが、御自分から公然と進出られたら、罪もございませう。これでは私も安心のしどころもなく、心苦しいですよ。それにお考へになつてるやうな細いことも、すつかりうち明けて頂きたいものですね」とおつしやつたが、「まつたくもつて、ほんたうに他に類とてはなささうに思はれるお悲しみを、お慰めなされるお心だての並並ではいらつしやらないことが」などと、女房達はその假初でないことを教へ申上げる。姉君のお胸中でも、さうはお言ひになつたものの、やつと心が落着いて、いろいろ中納言の君の御親切がお得心されたから、よしそれが父宮を目當ての御訪問であつたとは言へ、こんなにまで遠い野を踏分けてお出で下さつた深いお心なども、合點されたやうである。少し中納言の君の方へるざり寄りられた。お考へになつてゐること又父宮が固く頼んで行かれたことなどを、極めてこと細くお話しになつて、中納言の君といふ方は世間の男のやうに強く素氣ない様子などはしていらつしやらない方であるから、姫君にとつても嫌で氣が進まないといふことはなかつたが、深くも交際しない餘處の人にかうして口をおききし、何故といふこともなく頼もしさうにしてゐたことなんかがあつた過去の日をしきりに思出されるにつけても、流石に心苦しくて氣恥しかつたから、と言つてさうも言つてをられないので、聞えるか聞えぬかにほんのひと言ほど御返事になるが、そのさまがまつたく悲しさで氣抜けされてゐるやうな様子だから、中納言の君は大變お可哀いさうにお聞きになる。黒い喪中の几帳から洩れる姉君

の姿が、非常にいたいたしさうなので、況して目ごろ姉妹だけで淋しくゐられるさまはどんなだらうと思はれ、それから此處で自分がたびたび隙見をして來たその朝夕などがかなしく懐しく思出されて、

色かはるあさぢをみても墨染めにやつるる袖を思ひ
こそやれ

素枯れて色が變つてゐる淺茅の原を見るにつけても、色の變つた墨染めの喪服に身をやつしていらつしやる貴女がその喪服の袖を、さぞ淺茅の原が露に濡れてゐるやうにしつとりと涙で濡らしていらつていらつしやることだらうと、お察しします。

とひとり語のやうにおつしやると

色かはる袖をば露のやどりにて我身ぞさらに置きど
ころなき

色の變つた喪服の袖を涙の宿にしてゐまして、私の身は益益この世に置き處がありません。」「ばつるるとは」藤衣はつるる絲はわび人の涙の玉のをとぞ成りぬる「古今」

喪服からほつれかかる絲は」と後の方の句は言はず終ひにして、悲しさをこれ以上もうどうしても

堪へることが出来ないといふ様子で奥へ這入つて行かれたのである。引止めなどするやうなお悲しみの程度ではないので、そのまま見過ごしになつて深く氣の毒に思はれる。老女が、とんだお身代りに出てきて、昔のことから今のことまで一切を引つくるめて、さまさまの悲しい話をお聞かせする。不思議な驚歎すべきあのことのいろいろを見た人であつたから、こんなに見苦しく老いおとろへた者ともお見限りになられないで、極めて親しく話合はれる。ごく小かつた時に、六條院にお別れして、ほんたうに悲しいものは無常なこの世だつたんだよと、肝に銘じたから、段段一人前になつて齡を取つて來るに従つて、官位も、世の中の榮譽も何とも思はなくなつてしまつた。ただひとつかうした静かなお住ひなんか、氣に入つてゐるが、こんなにはかないさまにお見受けするやうになつてしまつたので、いよいよ固く、發心の心が湧上つて來ただけでも、氣の毒な状態で生残つてをられる姫君達のこととは、これを足手まどひなんかと申上げては、恩着せがましいやうだけれども、目をつぶつて生長らへて、宮とのあのお約束を間違ひなく、遂行したいんですよ。だが、思ひも寄らない父君のお昔話を貴女から聞いてから、一層深く、世の中に生残らうとは思はなくなつたのだらうか」と、泣きながらおつしやると、況してこの老女は烈しく泣いて、お返事をすることも出来ない。中納言の君の御様子などがふかたなき柏木様ではないかと思はれるさへあるに、長年の間忘れてゐた柏木様の昔のおん事まで思出されて來て、何を申上げようにも申上げやうがな

く、涙に泣濡れてゐた。この辨といふ人は、あの大納言柏木のお乳母の子であつて、父親は此處の姫君達の母君の母方の叔父にあたる人、左中辨の役で死んだ人の子であつた。長年の間遠い國をあこがれ歩いて、姫君達の母君が亡くなられてから、その時分にはあの柏木様のお身内には疎遠になつてゐるのであつて、此處の宮が尋出して引取つてをらせておいでになるのであつた。人柄もそれほど品があるといふでもない。宮仕へをしなければならぬけれども、心が浅くない者だと宮も見抜かれて、姫君達の御後見みたいの人にせられたのであつた。あの昔の柏木様のこととは、年來朝となく夜となくお目にかかつて來て、何ひとつ心をおくことなくお親しみしてゐる姫君達にも、つひひと言口走つてお話しすることもなく、隠込んでゐたけれども、中納言の君の側から言へば、老人の間はず語りといふことは、元より普通のことだから、何處へも彼處へも輕輕しく吹聴はしないまでも、あの如何にも恥しきやうな様子をしていらつしやる姫君達のお胸中には、きつとそのお様子から推しても聞秘めていらつしやるに違ひないと、推量されるので、辨のことが憎らしくも思はれ亡父らのことが氣の毒にも思はれるのであるが、これがやはり姫君達に疎疎しくは出来まいと、考へ及ばれる刺戟のひとつになりさうである。宮がなくなるなられた今となつては此處で泊つて行くのも何となくはしたない心地がするので、お歸りになるにつけても、あるひはこれが最後の」などと曾てのお別れの時おつしやつたが、どうして、そんなことがあらうと又の日の對面を當てにして二度と

お目に掛らなくなつてしまつたのだらう。秋が變りでもしてゐることか、それもその日からいくらの日數も経たない間に、お出でになつた處も分らない。とお歎きになる。頼み少ないことではないか。格別あの世間の人がするやうなお設備お裝飾もせず、極めて質素にしていらつしやつたやうだが、でも塵ひとつないやうに綺麗に掃除をし、其處此處趣き深く心をつかつていらつしやつたこのお住ひも、僧達が出たり這入つたりし、あちらこちら場處を違へて、お念佛お誦經の動具などが置いてあるさまは變つてゐない様子だけれども、佛像はみんなあの阿闍梨の寺へお移ししようとするんだと話してゐるのをお聞きになるにつけても、かうした袈裟衣けさぎぬの風體の僧達さへ一人残らずゐなくなつてしまふ時、後に残つて悲しまれる姫君達のいろいろの心持はどんなであらうとその心持を酌んで上げなさつて、それにつけても非常に氣の毒に思ひつづけになる。「すつかり暮れてしまひました」とお供の者が申上げるので、夕方の景色を半分眺めにして立上がられると、雁が鳴いて飛んで行く。

秋ぎりのはれぬ雲るにいとどしくこの世をかりといひ
ひしらすらん

私の愁ひが晴れないやうに秋霧が晴れない空をしきりに鳴いて渡つて行く雁は、この世が假の世であ

ると深く知らせてくれるのであらう。

匂の宮にお目にかかられる時は、中納言の君は何時も先づこの姫君達のことを話題になさる。八の宮が亡くなられた今はそれにしても氣兼ねがいらないうと思はれて、匂の宮は熱心に手紙を出してゐられた。が父君の亡くなられた今ではさうしたたわいのないお返事も、何となくお出しにくく憚られることに、姫君達は思はれた。世間に随分烈しく色ごとを好まれるといふお評判が擴がつてゐて、粹な艶つばい御様子にお推察されるのに、若しお返事を差上げたら、かうして深く山蔭に引つ込んでゐる荒屋あはらやから差上げた筆蹟が、あの宮にとつてはどんなに野暮つたらしく古くさいだらうと、氣後れなさるのであつた。それにしても、ちつとも興がなくつても送つて行かれるのが月日ですわね。こんな頼みにならなかつたこの世なのに、昨日今日のことには思はないで、ただ世間普通の漠然とした無常ばかりを、毎日のこととして聞いたり見たりしてたから、自分にしても人にしてはもどちが早く死んでどちらが生残るといふほどそれ程長く生きるだらうかと、思つてゐましたよ。送つて來た目をいろいろ思出してもどうと言つて樂しさうな世でもなかつたけれど、ただ朝となく夜となくのんびりとあたりを眺めて暮して、怖ろしいとか遠慮とかいふことがなくつて經つて來たのに、風の音まで荒つぽく、常見掛けたことのない人達が連立つて來て、氣取つた聲で話して、第一びつくりして、おつかなく淋しく思ふことまで餘分にふえたのが、ひどく我慢がしにく

いことね」と、二人が話し合ひながら、涙を乾かす時とてもなく過ぎしなるに、年も暮れた。

雪だの霰だのが降りしきる時分は、何處へ行つても風の音は荒荒しく吹けれども、姫君達は今初めて思詰めて道入つて来て始められる山家住ひの心持がなさる。女房達などが、「ああ年が代らうとする。こんな心細く悲しいんだから、どうかさりと改まつた春が迎へたいものだなあ」と希望を棄てないで言ふが、難しいことだとお聞きになる。向うの山へ、時時お念佛にお籠りになつたからこそ、山の人達もこちらへお通ひしたのだ。阿闍梨も、如何と、ごくたまにお伺ひの手紙を寄せるが、今日となつては何のために時時お尋ねなどして来よう。すつかり人の姿が絶えて終つたのも、當りまいのことだとは思ひながら、非常に悲しいことである。どうとも思はなかつた山里の人も、父君がおいでにならなくなつてから、まれまれにお立寄りするのは、心嬉しく思はれる。この頃のことなので、薪木や木の實を拾つて上る樵夫達もあつた。阿闍梨の寺から、炭なんかのやうな物を献上するといふので、「長年の間續けてまゐりました宮へのお進物が、亡くなられたからと言つて止めになりますのが、もの淋しいのでそれで」と申上げた。きつと、冬籠りをする山の寒い風を防ぐ綿入れなんかをお贈りになつたのを、思出して姫君達はそれを與へられた。僧達と子供達が向うの山を登つて寺へ歸つて行くのが、見えたり見えなかつたりして、その邊一帶に非常に雪が深いのを、姫君達は泣きながら縁側まで出て見送りになる。「お髪なんかを下しなすつても、その姿ま

ま御存命だつたら、かうして通つて来る者も、自然多かつたらう。お出家でいらつしやることが、どんなに悲しく心細くつても、お目にかかることがまるつきりなくなつてしまひはすまい」などとお二人は話し合はれる。

君なくて岩のかけみち絶えしより松の雪をもなにと

かはみる

父君が世を去られて山寺への岩の懸路の往き來が杜絶えてしまつてからは、その懸路の松にかかる雪を、父君を待つて趣き深く見たその松の雪を、どうして同じやうに趣き深く見よう。(松の雪、待つといふ文字に通ふその松の雪の意。)

中の宮、

おく山の松葉につもるゆきとだにきえにし人をおも

はましかば

せめてあの奥山の松の葉に積る雪、消えても亦積るあの奥山の松の葉の雪と、世を去られた父君が思ひたいものだ。(この歌、姉君の歌の下の句を受けてゐる。「きえにし」死をいふ雪の縁語。)

ああうらやましく山の松の雪は積つてゐる上へまた降積つてゐるよ。

中納言の君は、新年になつてはさうおいそれとはお尋ねすることが出来なからうと思はれて、年の内においてになつた。雪も残す處なく一面に降積つてゐるので、一寸した人でさへ来なくなつたのに、並並でないお身の上であつて、気軽に尋ねて來られたその志が、上つつらな通り一遍のものでないことがよく分つたから、姫君達は常よりは心を入れて、お座席なんか取りつくろひになる。喪中でつかつてゐる黒いのではないお火桶が、諸道具の奥に仕舞ひ込んであるのを取出して、塵を拂ひなんかしながら、侍女達は、宮喜んで迎へられた御様子なんかを、お追慕して話出す。姉君は會はれることを、極端に遠慮したく思はれたけれども、それでは餘り心にかけないやうに中納言の君が思ひなざるから、どうしようかとお考へになつた上でお話相手になれる。うち解けるといふのではないが、前前よりはいくらか言葉多く話なんかされるその様子が、大變美しく恥しさうである。かうした交渉だけでは、済まして終ふことが出来まいと思ふやうになられたといふのも、随分現金な中納言の君の心ではないか。やはり移り變つて行く世であり人の心であつたよと、中納言の君は感慨に耽つてゐられた。「匂の宮がひどく手厳しく恨まれることがありますよ。あの悲しかったお遺言をお聞きしておいた時のことなんか、何かのついでに若しかしたらお洩らしたんだらうか、それともあのいやに物分りのいい持前へのお眼識でお推量になるんだらうか、この私にね、どうとも貴方の了見のままに御話しが願へるだらうと期待してゐるんだが、依然として水臭いお様子

をしていらつしやるのは、きつと貴方が打毀しを申上げてゐるんだよ、とかう、時時怨み言を言はれるんで、以ての外のこととは思ひますが、でもこの宇治への橋渡しそんなに強く押問答をしてまでお斷りが出来かねるのに、何故、もつと宮の心のやうに交際して上げなさないんでせう。御好色のやうに世間はお噂してゐるやうだが、心の底は非常に深くいらつしやる宮です。それをさうお噂するのは、戯談なんかおつしやる邊の、尻軽で、直ぐにでも首を縦に振るのなんかを、珍しくもない者に見くびられるからだらうと聞くことがあります。何事につけても自然のままに従つて、我を張ることをしない、鷹揚な女、一切世間のしてくる通りになつて、さうあるのもかうあるのも皆當りまいのことだとしてしまつて、よしいくらか意見と入れない點があつても、どうする事が出来るものか前世からの因縁だよとかなんかと、さう萬事諦めてしまふらしいから、少少浮氣な男と連添つてもかへつて長い愛を繼ぎ合ふ例になるやうな事があるんだが、と言つてさうした女であつても一端その美しい心が崩壊し出したとなつたら、瀧田川の濁り水のやうな濁つた名を世間に流して、何と言つても今更仕方がない切角の縁もお終ひになつてしまふやうな例なんかも、一般によくあることです。話が戻りますが、すつかり御執心らしい匂の宮のお氣持をむかへて、お考へに逆ふことが多かつたり、なさらないのを、それをさう簡単に、愛情が變るやうな事なんか、決してなさらない御様子ですよ。人がお知りしてない事を、可成り精しくお知りしてゐてまあお話したんだが、若

し良縁だと思はれて、宮のお心に従はうかとお決心になつたら、その媒介は、きつと力の及ぶ限りお盡しませう。いやお竹棒のていたらく、しどろもどろの足取りで甚だ恐縮です」と、非常に眞面目に話續けられると、無論自分自身のことなどは少しも思及びにならないで、世間の人の親みたいになつて中の君のために返事をしようと、いろいろとお思案になるけれども、言はうと思ふ言葉もないやうな気がして、「なんとお返事をしましたら、お心に掛けてゐて下さるお様子でいろいろおつしやつて下さるものだから、かへつて申上げることも分りませんでして」と、お笑ひになるのが、おつとりしてゐるので、そのさまが風情をもつて聞える。「いえ必ずしも貴女御自身の事としてお聞きにならないことも思ひません。その邊のことは、この雪を踏分けてはるばるやつて來た私の心のあるところを、お見分け下さるらしいお姉上として分別だけでも、判斷なすつて下さいよ。匂の宮のお狙ひは、あの方であつた方であつたもので、時折手紙でおつしやる様子もあつたやうですが、いやもう、それもどなた宛にあつたものやら人のお知り出來ないことです。お返事なんかは、どなたが書いて上げになるんですか」とお尋ねになると、よくまあ戯談にもお返事を差上げなかつたものだ、どうといふほどの文通ではないけれども、かうおつしやるにつけても、若し私が差上げてゐたならどんなに恥しく胸がひつくりかへるであらうと思はれて、姉君は答へをすることがお出來にならない。

雪ふかき山のかけはし君ならで又ふみかよふ跡をみぬ哉

雪が深く降積つてゐるこの山の懸橋は貴方でなくつては他に踏通ふ足跡をつけなざる人がないと同じやうに、貴方をおいては、他に手紙の遺取りをした人はございませぬよ。

と書いてお出しになると「お辯解がかへつて気がおかれさうです」とおつしやつて、

つららとちこまふみしだく山河を知るべしがてらま

づやわたらん

氷が閉籠めてゐて馬が脚を踏亂す山の河を人の案内をしながら先づ私が先へ渡らう。(匂の宮を中の君に手引きしながら、先づ私が先に姉君の意を得よう、の意が背後にある。)

かうして渡つて來るとほら、私の影まではつきり氷の上に見えてゐるよ。淺薄なものではございませぬまい」と申上げられると、急に何となく迎山になつて、姉君はわざとお答にならない。際立つて、極めて近寄りにくい凜とした風にはお見えにならないけれども、現代風の若い女達のやうに仇つばくも振舞はないで、何處と言つては少しも難の打ち處がなく非常にのびのびしていらつしやる氣質らしく、中納言の君はお推量になる。姉君のお様子である。かうはどうしてもありたいものだ。日頃自分が頭に畫いてゐる理想の女と違つてゐない心地がしていらつしやる。ことに觸れ折につけて

言寄られるが、何時も気が付かないやうな風に應對なさるので、氣恥しくて、中納言の君は昔話なんかを、熱心にお話しになる。「暮れてしまつたら、雪がすつかり空をまつ暗に塞いでしまひさうでございませう」と、お供の者達が大袈裟に言ふと、お歸りにならうとして、「毎日鬱陶しくあたりが眺められるお住ひの御様子ぢやありませんか。私の京都の家といふのは山の中の村のやうにひどく静かな處で、人も行來しない處にあるんですが、若し移らうと思つて下さつたら、どんなに嬉しいでせう」などとおつしやるのを、結構この上なく思はれることだなあと、小耳に挟んで、頬笑む女房達があるが、中の君は、随分見苦しいことだ、どうしてそんなことが出来ようと中納言の君を几帳越しに見ながら聞いていらつしやる。お菓子や體よく見つくるつて差上げ、お供の者達にも、酒の肴なんか見苦しくない程度にして、土器を出させになつた。あの中納言の君から拜領の着物のお移り香でもつて騒がれた宿直人は、下世話に鬘鬘とやら言ふ面つきで、寄付き場がないやうにしよんばりしてゐる。頼りのないお介添へだよと御覽になつて、お呼び出しになつた。「どうして。おいでにならなくなつてから、淋しいだらう」などと尋ねになる。顔をしかめながら、氣が弱さうに泣く。「この世の中に力とする縁故もございませぬからだで、お一人のお蔭を蒙つて、三十年の餘を遂つてまゐりましたから、今日となつてはなほさら、山ん中や野つ原へ引つ込みませうにも、どの木の蔭を頼むことが出来ませう」と申上げて、益益ぶざまに見える顔である。宮がおいでになつた處を

お開けになると、埃が大變に積もつて、ただ佛ばかりが、花の飾りもあつたままに喰匂つて、おいでになつて、宮が生前其處でお勤めをなさつたと思はれるお床なんかは取除けて、後が取片附けてある。若し出家の宿願それを遂げたならばと宮に固いお約束をしたことを思出して、

たちよらんかけとたのみし椎が本むなしき床になり
けるかな

敬へを受けに立寄る蔭であるとして頼みにしてゐた椎の本へ来てみると、優婆塞は世を去つて、お座席の床が主人のゐないむなししい床になつてしまつてゐるよ。(うばそくが行ふ山の椎が本あなそばそはしとこにしあられど(六帖)を本歌としてゐる。優婆塞は宮をさす。)

とおつしやつて、柱に寄りかかつていらつしやるのを、若い女房達は覗見をしてお見とれしてゐる。日が暮れたからお供の者が、近くの處處方々で、中納言の君の莊園なんかのお世話をしてゐる者達の處へ、お秣を取りに使ひをやつた。中納言の君も御見知りがないのに、田舎くさい者達が、迎山にぞろぞろ連立つて來たので、ひどく無様な仕儀だなあと御覽になつたが、このお住ひへ來てゐることを老女辨にかこつけになつた。そして平常もかういふ風にお事へするやうに、その世話人達にお言置きになつてお住ひを出られた。

年が代つたから、空の様子が明るく長閑で、川の汀の水がづつと一面に解けてしまつたのにつけても、父君に先立たれてからこんななまで生長らへたといふのは不思議なことであるよと、あたりを御覽になる。阿闍梨の寺から、「雪の消えの處で摘んだのでございます」と言つて、澤の芹、蜂の蕨なんかを差上げた。精進のお膳にお上せする。「かういふ處では、かうした草や木の食べ物の移りかはるにつれて、行つたり來たりする月日のさまが知られるのが面白い」などと、女房達が言ふのを、何が面白いだらうと姫君達は聞かれる。

君がをる峰のわらびとみましかばしられやせましは
るのしるしも(姉君)

この蕨を父君が籠つてゐられる峰の蕨だと見ることが出来たら、初めて知ることが出来ようよ、春が來たそのけはひも。

雪ふかきみぎはのこぜり誰がためにつみかはやさん
おやなしにして(中君)

雪が深く積もつてゐる川の汀の芽出しの芹を、誰のために摘んで喜ばうよ、こんな、摘んだら差上げて喜んで貰はうと思ふ親もない状態で。(小芹は子芹に通はせ親と對照させてゐる。)

などと、お二人はとりとめのないことを話合ひながら日を明かしたり暮したりしてゐられる。中納

言の君からも匂の宮からも、時をおかないでお便りを差上げられる。その間の事情が明らかでないのは、繁雜で取立てて言ふほどでもないことが多いやうだから、例によつてこの物語は書渡らしたのでらう。花盛りの頃、宮はあの挿頭の一件を思出されて、それにその折宮に隨行して見聞きされた公達も、「素晴らしく氣が利いたあの姫君達のお住ひを、あれからもうさつぱり見ないね」などと、いろいろの風情を口口に言はれるので、姫君達を非常に懐しく思はれた。

つてにみし宿の櫻をこの春は霞へだてず折りてかざ
さん

よそながらはがゆい思ひで見たお住ひの櫻を、今年の春は霞を中へおかないで折つて挿頭に挿さう。
(櫻は中の君をさす。)

とすつかりその氣になつておつしやつた。そんなことがあつていいものかと中の君はそのお便りを御覽なさりながら、でも随分退屈であるので、やさしいことをおつしやる見捨て去れないお手紙の、奥の心は兎も角として上べのお心だけは打消してしまふまいと思ひになつて、

いづくとか尋ねてをらん墨染めに霞こめたる宿の櫻
を

折るとおつしやるが何處とそれを尋ねあてて折られるであらう、父君の喪で黒く霞が包み深く愁ひが

覆ほつてゐるこの住ひの櫻を。(櫻は中君自分を匂はず。そんな浮氣どころではありません、といふのが背後の意。)

やはりこんなにつつ放して應對なさる、すげないお様子が見えたから、匂の宮はほんたうにつらいと思ひつけられる。御思案に餘まられては、ただ一人中納言の君を、あうとかかうとか責めてその頼みがひのないことを恨まれると、中納言の君は愉快だと思ひながら、大きく呑込んだ世話役顔でお返事なさつて、匂の宮の浮氣らしいお考へ方を、見破るその折折に、「どうしてこんなことではお骨折りか」などとおつしやるので、宮もお氣がつかれるのであらう、「氣に入つたのを、まだ見付けぬからだよ」とおつしやる。右の大臣の六の君をお心に留められないことを、何となく怨めしいこととやうに大臣も思つていらつしやつた。だが匂の宮は、「何分いと同志で興味が薄い仲である上へ、大臣が、迎山で面倒で、蔭でするどんな一寸したことをも多分見逃されだらうと思ふのがやり切れなくつてね」と、内内おつしやつて考込んでいらつしやる。この年三條の宮が焼けて、中納言の君の御生母入道の宮も六條の院にお移りになつたので、中納言の君も何かともの騒がしいのに取紛れて、宇治の邊を随分長い間お尋ね申されぬ。眞面目である中納言のお心は、これは又匂の宮とは大變違つてをられたから、頗るのんびりと、自分のものと胸の中では信じてゐながら、姉君の心がくつろがれない間は、戯談めいたはしたない眞似には出まいとづつと思ひつづけて、宮の昔

の御依頼を忘れない自分の心をとくと御觀察下さいと思ひになつてゐる。この年の夏は、常より暑さを人人が苦しがつたが、川邊は涼しいだらうよと思出されて、中納言の君は俄に宇治へ伺はれた。

朝涼しい中に家を出られたから、宇治のお住ひに着かれた時には生憎とさし込んで来る日影がまばゆいので、宮がおいでになつた西の廂の間に、宿直の者を呼出しておいでになる。そちらの母屋の佛のお前に、姫君達はおいでになつたが、餘り近い處にはをるまいとして、自分達のお居間の方へ移られるおけはひが、分らないやうになさるのだけれども、自然身動きされる様子が間近に聞えたから、その儘ちつとしてをられなくつて、こちらへ通ふ襖の端の方に、鉤が附けてある處に、穴が開いてゐたのを何時か見ておすきになつたから、襖のこちらに立ててある屏風を引退けて覗きになる。が此處にも襖の向ふ側に添へて几帳が立ててあつたので、ああいまいましいと思つて、引つ返して来る丁度その時、風が簾をひどく吹揚げたらしいので、「まる見えですよ。そのお几帳を押ししてそして」といふ女房があるのである。なさけないとは言ふものの嬉しくて、覗きになると、高き方のも短い方のも、どちらの几帳をも二間の簾に押寄せて、この襖に向つて、開いてゐる向うの襖から、あちらへ通らうといふのであつた。先づ一人が立上つて来て、几帳から覗いて、中納言の君のお供の者達が、あちらこちらへ行違つて、涼みあつてゐるのを見られるのであつた。濃い鈍色の

單衣に、萱草色の袴がよく調和してゐるのが、かうした喪中の装ひをしていらつしやりながらかへつて様が變つてはなやかに見えるのは、着てをられる方の人柄だらう。掛帯を心細さうに掛けて、珠數を袖に隠していらつしやる。極めて脊がすらつとして、さまかたちの様子のいいこの人の、髪は桂の裾に少し足りないぐらうと思はれる程の長さがあつて、先までほんの僅かの亂れもなく、艶艶と澤山で美しさうである。横顔なんか、ああほんたうに可愛いらしさうだとさう見えて、つやつやと輝いて柔らかで大様なさまは、女一の宮もかういふ風でおありであらうと、曾てほんの一寸お見受け申したお姿がこの方いろいろなと比べられて、感慨が深い。續いて又一人がゐるさつて出て来て、「あの襖は、まる見えですよ」と覗き見の方を見て寄こしになる心づかひは、身をすつかりと持していられる様子が見えて、おくゆかしさうに思はれる。顔つき、挿頭のさまなんかは、もう一人の方より今少し上品でなまめかしい様子である。「向ふに屏風が襖にくつつけて立ててございましたよ。さうすばしつこくはお覗きにならないでせう」と、ちつとも氣が付かないで何心なくいふ女房達がある。「隙見でもされたら、どんなに恥しいことだらうね」とおつしやつて、氣がかりさうにゐるさつて這入つて行かれる様子は、氣高く心憎いさまが一層増して見える。黒い袴とかさね、かうした今の一人の方と同じやうな色あひの着物を着ていらつしやるが、この方は人なつつくこく色氣があつて、見てゐる方で、何となくいちらしく切なく思はれる。髪は深いお悲しみで多過ぎ

て煩くないさらつとした程度に落ちたのであらう、先の方が少し細くなつてゐて、下世話に色髪とか言ふらしいそれで、翡翠色に似て如何にも人の心を引きさうで、絲を縫つたやうに美しい。紫の紙に書いた經文を、片手に持つていらつしやる手つきは、あの方より細くて、随分瘦せてゐるらしい。立つてゐられた中の君も、襖の出入口の處にをられて、どうしたのであらう、中納言の君の方を見寄こして笑はれたが、それが極めてあどけなく思はれた。

註

- 一、世を宇治山と詠んだ喜撰法師をいふ。
- 二、中高の盤の兩端に基石を列べ、互に相手の石を弾きあつて遊ぶもの。
- 三、櫻人は雙調ゆみ一越調の心にてとあると諸註が言つてゐる。又櫻人の中には「舟ちぢめよ」とどめよの意の詞があると諸註が言つてゐる。
- 四、春の野に薫つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜にける（赤人）
- 五、引歌不明
- 六、釋迦第一の弟子。音楽を聞いて威儀を忘れて立出たことがある。
- 七、喪中ゆみの「黒い紙」

- 八、ささのくまひのくま川に胸とめてしばし水かへ影をだにみん（古今集）
九、藤衣はつるる絲はわび人の涙の玉のをとぞなりぬる（古今集）
一〇、海士の住む里のしるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん（古今集）
一一、浅香山かげさへみゆる山の井のあさき心はわがおもはななくに（萬葉集）
一二、雲をかけたやうに伸びた鬘。
一三、侘び人のわきて立ちよる木の本はたのむかげなく紅葉ちりけり（古今集）

總
角

數多の年を耳馴れて來られた河風までも、今年の秋はまことにつれなくて、姫君達は物悲しく、故父宮の一周忌の御用意を御準備なさる。大體の定まつた事どもは、中納言殿と阿闍梨とでなされた。此方では、僧達に布施する法服の事、經の飾などの細かな御用意を、人の申上げるに従つてなされるのであるが、それもいかにも抄取らずあはれで、さうした餘所からの御後見がなかつたなら出來さうもなく見えた。中納言は御自身でも伺はれて、今はと喪服をお脱ぎ捨てになる際の御見舞を懇ろに申される。阿闍梨も此方に伺はれた。姫君達は名香の糸（佛に供へる種々の香を紙で包み、五色の糸で結ぶもの）の亂れを結ぶにも、「かくても經ぬる」（古今集、「身を憂しと思ふに消えぬものなれば、かくても經ぬるものにぞありゆる」の「經」を、糸を整理する意の「へ」に懸けたもの）など話合つてゐられる頃なのであつた。糸を結び上げた桶（糸を巻く用具）の、簾の端をとほし、更に几張の綻びを透いて見えるので、中納言は姫君達のされてゐることを承知して、「わが涙をば玉に貫かなむ」（宇多天皇の後の薨去の時、伊勢の詠んだ歌で、上の句は、「より合せてなくなる聲を糸にして」と誦されると、女房どもには、伊勢の御の心もこのやうであつたことだらうと趣深く思ふが、姫君達は、知つた振りに御返事をなさるのも憚られて、「ものとはなしに（糸による物ならなくに別れ路の心細くも思ほゆるかな、貫之）」とか貫之が、此の世の中での別れをさへ、その心細い方に引き懸けていつたものをなどと、いかにも古歌は人の心を述べる便りになるものであるよなどお思ひ

出しになる。中納言は、故宮の爲の願文を作り、經や佛を供養させられる志を書き出された、その筆の序に、

あげまきに長き契を結びこめ同じ所によりも合はなむ

（あなたのなさる總角（名香の糸の結び方の名）結びの中に、私の末長い約束をも結び込めて、その同じ所に寄り合ふやうに、同じ心で寄り合ひたいものですといふので、「結ぶ」、「心」（中心の意）など感詞。）

と畫いて、大君にお見せすると、例のうるさい心を思ふけれど、

貫きあへずもろき涙の玉の緒に長き契をいかゞ結ばむ

（貫き切る間もなく脆くも碎ける涙の玉を貫く玉の緒のやうな命をもつて、長い約束など何うして結ばせうで、「玉の緒」は命に懸けてある。）

と大君の御返しがあつたので、中納言は、「逢はずは何を」（古今集、「片糸をこなたかなたにより懸けて逢はずは何を玉の緒にせむ」で、一つになれなかつたならば、何を慰めとして生きようの意）と怨めしさうに口ずさまれる。

大君は御自身については、このやうに取りとめもなくごまかして、氣恥づかしくならせるので、中納言ははき／＼と言ひ寄ることも出来ず、匂宮の御事の方を本氣に申上げる。「それ程には思つて入らつしやらないことを、さうした事は少しお好きな御性分から、言ひ出したからには負けまいとお心持ではなからうかと思つて、十分に御様子を見上げてをります。全く懸念には及ぶまいと思はれますのに、何だつて此のやうに、一概にかけ離れておしまひになるのでせう。あなたは世の中の有様をお分りならないとは拜しませんのに、ひどく餘所々しくばかりなさいますので、これ程奥底なくお頼み申してゐる私の心持とは食ひちがつて、怨めしく思ひます。何うなりかうなりお考のことを、はつきりと伺ひたいものです」と、ひどく本氣になつていはれると、大君は「お心に違へまいと思ひますればこそ、このやうにまで、世間並を外づれた有様で、隔てなく致してゐるのでございます。それがお分りにならないといふのは、お不似合に、浅いお心もまじつてゐるやうに存じます。ほんに、かうした住まひを致してをりますと、心ある人でしたら、考へ残すことなどありませんまいが、私は何事にも後れてをります中にも、そのお話しになります筋のことは、亡くなりました方も、少しもお觸れにならず、かういふ時にはあゝいふ時にはと、行末の豫定の中にもませて仰せ置きにもなつて居ませんので、私はやはりかうした有様で、縁談の事は思ひ諦めろと思召になつてゐたことと思ひ合せられますので、何とも御返事の致しやうもございませんので。しかし、少し

は生ひ先もあります年で、み山隠れにさせるのは氣の毒に見えます妹の方を、まるきり此のやうに朽木にはしきりたくないものだと思ひまして、内々、何うにかと思つてはをりますが、さあ、何うなつてゆくこととございませう」と、溜息をつき、心配に亂れてゐられる御様子が、まことに哀れである。中納言は、大君が確りとして大人びてゐても、何うしてさうした事が扱へようと思つて、當惑されるのも尤もと思つて、例の老女房を召出してお話になられる。「この何年もは、たゞ後生の事を學びたく、そのゆかしさから伺ひ初めたのであつたが、故宮が心細くお思ひになるらしかつた諭のお末の頃に、姫君の御事を、私の心のまゝに御扱ひ申すやうに仰せになりお引請もしたのであるに、思召しになつてゐた御有様とはちがつて、お心持がひどく生憎で、お強くばかり入らつしやるのは何ういふ譯であらう。前から他の人をお思ひこみになつてゐるのではなからうかといふ疑までも起つて來ます。自然聞き傳へられたかも知れないが、私は何うも變な性分で、世間の事に何といつて心を打込むこともなかつたのだが、さうした宿縁があつたので、姫君にこのやうにまでお馴れ申したのでせう。世間の人も次第にそんな噂も立てるやうですから、同じ事なら故宮の仰せも違へず、姫君も私も世間並に心が解け合つて、物をいふ仲になりたいものだと思ふのは、たとへ不相應なことであるにしても、さうした例がないといふことではないでせう」など言ひつゞけられて、更に、「宮の御事も、あのやうに申上げるのに、心配はいるまいとお任せにならないのは、内々に、

それにしても、お心向けの人でもあるのだらう。これも何ういふ譯なのですか」と嘆きつゝいはれると、普通のろくでもない女房などは、かうした事には聞き憎い利いた風の文句をまぜて、口先だけの事もいふらしいのに、この老女房は全くそれではなく、心の中では、さうなれば結構なことだと思ふけれども、「もとから此のやうに、世間の人とは違つたお癖でございますか、それはまるきり、世間並に何だかだなどお思ひ寄りになる御様子はいかがでしょうか。此のやうにお任へ申してをります誰彼も、これまでの何年でさへ、何といふ頼みにもなれずお蔭も蒙れませんでした。自分の身の諦められませんか、分相應の振方をつけてお暇をいたゞき、昔からの由縁のあります者までも、大抵はお見棄て申しましたお邸で、まして今となりましては、暫くもぢつとしてはゐられないやうに當惑しとほしてゐまして、『故宮の入らつしやいました頃こそは、格式があつて、身分の低い者との御縁はお氣の毒なことだと、古風な几帳面なお心からお見合せにもなつたのですが、唯今はこのやうに又、頼みのないお身になられたのですから、たとひ何のやうに世間に従つた御縁組をなさいましたも、一概に悪く申す人は、却つて物の分らない、取るにも足らないことなのでございます。何ういふ人だつて此のやうに世を通すことができませう。松の葉を食べて勤めをする山伏でさへも、生きて身が捨て難い所から、佛のお教をも、流派に分れて行つてゐるのでございます』などいふ善くないことをお教へ申して、若いお心のお亂れになるやうなことが多くござい

ますが、大君のお心は曲りさうにもなく、中の君を何うか一人前にお扱ひ申したいとお思ひになつてゐるやうでございます。このやうに山深い所へお尋ね下さるお志の、何年もお見上げ馴れなさいました御様子、疎くはなくお思ひ申し、今では何や彼やと暮し向の細かなことも御相談申すやうなものにつけてまして、あの御方を其方へお振替へ下さつたらばと思召すやうでございます」と申上げると、中納言は、「故宮のお氣の毒なお一言を承つてゐますので、果敢ない世に生きてゐる限りは、御相談相手にならうといふ氣でゐるので、何方と夫婦になつても同じ譯でせうし、又それ程にお思ひ下さるのもまことに嬉しいことだが、心の引かれるといふ事は、これ程までに思ひ捨てた世の中にも、やはり残つてゐるものなので、改めてそのやうに思ひ直すといふことは出来ないことです。世間並の浮いた戀ではない、唯此のやうに物を隔てて、何事も腹に残さずに、さし向つて様々に定めなく變る世の中の話の隔てなく話し合つて、包み隠すことがなく、腹いづばいに扱つていただいたら、私は兄弟などのさうした陸ましい者もなく、まことに寂しくしてゐて、世の中で思ふこと、あはれなこと、面白いことも、心配なことも、時につけての事を、心の中に藏つてばかり暮してゐる者なので、さすがに頼りない氣がするが、疎くはしまいと御頼み申す後の宮には又、馴れ馴れしく、そのやうな取り止めのない、思つたまゝのだからしないことは申上げるべきではない。三條の宮は、親とお思ひ申せも出来ない御若々しさだが、隔てがあるので、氣やすくお馴れ申す譯にはい

かない。その外の女はすべて、ひどく疎く、気が置けて、怖ろしく思へて、心から寄りつけず、臆してしまふのです。戯れ半分にするだけでも、懸想めいたものは、恥づかしくて気が乗らず、はしたなく工合が悪いので、まして深く思ひ込んだ方の事は、言ひ出すことも出来ず、怨めしく、気が腐つて、お思ひする様子さへも見られずにいるといふのは、我ながら此の上もない愚かしいことです。宮の御事も、それにしても悪くはしまいとお任せ下らないのでせうか」などいつてゐられた。此の年寄もまた、お邸はこれ程までに心細いので、丁度お似合な御有様を、心からそのやうにおなりになればと思ふけれど、何方も氣の置かれる御有様なので、思ふまゝには物も申せない。中納言は、今夜はお泊りになつて、お話など心のどこかになさりたいので、ぐづ／＼して日をお暮しになつた。

大君は、中納言が、はつきりとはないが、自分を怨みがちにしてゐられる御様子で、次第に深くなつてゆくの面倒で、打解けてお話をすることはいよ／＼苦しいけれども、その外の事では珍らしくも哀れを知るお心なので、きつぱりとはもてなすことが出来なくて對面なさる。持佛の方の中戸を開けて、燈明の灯を明るく掲げさせて、簾に屏風を立て添へてお出でになる。外の方に燈火を差上げると、中納言は、惱ましくて失禮な様をしてゐるので、明るく」と止めて横になつてゐられる。御菓子などを態とではないやうにして參らせられる。お供の人々にも結構な肴で酒をお

出しになられた。女房どもは廊めいた方に集まつてゐて、此方の御前は人げ遠いやうにして、しめじめとお話をなさる。大君は打解けられはされないものの、なつかしさに、愛敬もあつて、物はいはれる様が一方ならず氣に入つて、思ひ深くなるものはかない。このやうに何でも無い物だけを隔てにして、氣を揉みつづけながら過してゐる間ぬけさを、餘りに馬鹿らしく思ひつづけられるが平氣を装つて、大方の世の中の事を、哀れにも面白くも、色々と聞きどころを多くお話になる。簾の内では、「女房たちは近く」など初めからいつておかれたが、そんなにかげ離れておしまひにならない方がと思つてゐるらしいので、さして附添ひもせず、引退つてみんな俯伏し寝をしてしまつて、佛の燈明も掻き立てる者もゐない。大君は氣味悪くなつて、そつと女房を召されるが、眼を覺まささない。「氣分が亂れて惱ましますから、休息しまして、明け方に又お目に懸りませう」といつて、奥へ入らうとする御様子である。「山路を分けて參りました者は、ましてひどく苦しいのですが、このやうに申上げたり伺つたりするので慰めてゐるのです。捨て、お入りになつてしまはれては心細いこととせう」といつて、中納言は屏風をそつと押開けてお入りになつた。大君はひどく氣味が悪くて、

甚しく口惜く辛いので、「隔てのないといふのはかういふことでせうか。珍らしい事です」と冷かされる様が、中納言にはいよ／＼可愛らしいので、「隔てのない心を少しもお分りにならないので、お聞せしようとしてのことです。珍らしと

は、何ういふやうにお汲取になつたのでせう。佛のお前で誓言ちかごんもしませう。つまらない、怖がりなぞはなさいますな。お心を破るまいと初めから思つてゐますので、人はさうとは推量すいりやうしますまいが、世間並とは違つた偏屈者へんくつしやで通してゐるのです」といつて、ゆかしい程の灯影で、大君の御髪まげのこぼれて懸つたのを掻き遣りながら中納言は御覽になると、姫の御様子は申分もなくほひやかに美しい。かうしたさみしい、人少なな御住みかは、好色の人にとつては障りになる物もなさうなので、もし自分以外の者で尋ねて来る者があつたならば、これだけで終りにもならうか、何んなにか残念なことであらうと思ふと、此れまでの躊躇して来たことまでも危い氣がされるけれども、大君が言ひやうもなく辛つらく思つて泣いてゐられる様子が可哀さうなので、かういふ風ではなく、自然心のやはらぐ時ときもあらうからと思ひ渡される。ひどく悲しんでゐるやうなものも氣の毒で、中納言は體裁よく言ひつくりはれる。大君は、「かうしたお心とは思ひ寄りませんで、不思議なまでお馴れ申しましたのに、縁起の悪い喪服の色までも見顯はされるお心淺さにつけ、自分の言ふ甲斐なさも思ひ知られますにつけ、色々に辛うございまして」と怨んで、何の用意もなく襄れてゐる墨染の姿の灯影で見られるのを、ひどくはしたなく佗しいこと、思ひ惑つてゐられる。中納言は、「ほんにそれ程までにお思ひになるといふのは、仔細があるからだと思ひますと恥づかしくて、申上げやうもありません。袖の色をおかこつけになるのは道理ではありますが、永年ながねんの間お馴れ申して来た志のしるしには、

それ程の忌みもしなくてはならない今始めた關係めいてお思ひになるにも及びますまい。却つて御分別過ぎるお心です」といつて、かの大君の琴の音を聞いた有明の月影から始めて、その折々の、思ふ心の忍び難くなつて行つた様を、まことに多くお聞せすると、大君は恥かしくもあつたことだと思ふと疎ましくて、さうした心持でありながら、平氣らしく眞面目らしくしてゐられたことだとお聞きになることが多かつた。中納言は傍らにある短い几帳を、佛の御方面に隔てとして立て、かりそめに俯伏し寢をされた。名香なかうがひどく香ばしく匂つて、櫛のひどく華やかにかをる様子も、世間の人よりは勝つて佛をお思ひ申すお心なので氣に懸つて、墨染の衣ころもでゐられる今、折節に心苛いららねしたやうなことをするのも飽氣あつきないことで、思ひ初めた心にも違ふことなので、かうした忌みも明けた時に、このお心にも、さうはいつても少しは緩みも出ようなど中納言は強ひてのどかな心になされる。秋の夜の様子は、かうした所ところでなくてさへ自然にあはれが多いのに、まして蜂の嵐も、籬の蟲も、心細く聞き渡される。中納言の世の無常の話をされるのに、大君は時々返事をなさる様子は、様子がよくて見やすい。眠り好きの女房共は、例のそれであると様子を見て取つて、それごとく引込んだ。大君は故宮の仰しやつたことを思ひ出すと、ほんに生きてゐると案外にも、かうした有るまじき事にも逢ふものであると思ふと、たゞ恐しくて、涙が水の音に流れて添ふやうな氣ばかりなさる。

はかなく明け方になつた。お供の人々は起きて合圖をし、馬どもの嘶く音も、中納言は旅の宿りの有様の、人の話に聞いてゐるのを思ひやられて面白く思はれる。朝の光の見えた方の障子を押開けられて、空の様子のあはれなのを姫君と一しよに御覽になる。姫君も少し居ざり出されると、幾らの距てもなく軒が近いので、葱に置く露も次第に光り出して来る。互に、まことに艶な様や容貌であるに、中納言は、「何といふ関係はなくて、唯このやうに、月も花も同じ心持で翫んで、はかない世の有様も話し合つて過したものです」と、ひどく懐かしい様子をしてお話になると、大君は次第に恐ろしさも慰められて来て、「このやうにまことに端たない様ではなくて、物を隔てゝお話しが出来ましたら、本當に心の隔ては少しもないことでせう」と答へをなさる。明るくなつて来て、群鳥の飛びまはる羽風が近く聞えて、朝の鐘の音が幽かに響いてくる。大君は、今でさへもまことに見苦しいものと、ひどく恥づかしく思つた。中納言は、「関係があつたやうに、朝露を踏み分けて歸る譯にもゆきませんまい。又人は何んなに推量するでせう。例のやうに安らかに振舞はれて、唯世間はづれの事にして、これから後も、唯このやうにして入らつしやいませよ。私はあなたの氣遣はれるやうな心は全くないものとお思ひなさい。このやうな私の一途の心も、あはれだと思ひ知られないのは甲斐のないことです」といつて、お歸りになりさうな様子もない。大君は、淺ましい工合の悪いことだらうと思はれて、「これから後は、それでは、あなたのもてなされるままになりま

せう。今朝は又、私の申すのにお従ひなさいまし」といつて、ひどく當惑してゐられるので、中納言は、「あゝ苦しい、曉の別れは。まだ知らないことで、ほんに路を惑ひさうです」(まだ知らぬ曉起きの別れには路さへ惑ふものにぞありける)といつて溜息をつき勝ちである。鶏も何所からであらうか、ほのかに聲がするにつけ、中納言は京を思ひ出させられる。

山里のあはれ知らるる聲々にとり集めたる朝ぼらけ
かな

(山里のあはれ知られる様々の聲がして、そのあはれを取集めてゐる朝ぼらけであるよと、「とり」に「鳥」を寄せてある。)

女君は、

鳥の音も聞えぬ山と思ひしを世の憂きことは尋ね來
にけり

(その鳥の音さへも聞えない山里だと思つてゐましたのに、世の中の憂い事が尋ねて來たことですので、憂き事はその夜のこと。)

中納言は姫君を奥への障子口まで見送られて、夜べ我が入つた戸口から外へ出て寢られたが、まどろみさへ出来ない。姫君の名残が戀しくて、ほんに此のやうにまで思ふものと知つたならば、この

月頃も、今まで心のどかで居られようかなと思はれて、歸ることが辛く思はれる。姫君は女房どもの思はくが憚られて、直ぐには床へも入らない。頼みになる者がなくて世を過す身は心憂いの、こゝにゐる女房どもも、善くない事の何や彼やを、順々に關係をたどつて言ひ出して来るやうであるが、思ひも懸けない事の起つて来る世の中らじと思ひめぐらすにつけ、あの人の様子有様の、厭やだとは思へず、故宮も、あの人にさうした氣持があるならばと、折々仰しやりもしお思ひになつたやうだつたが、自分はやはりこのまゝで通さう。自分よりは様も容貌も盛りで、勿體なく見える中の君の方を人並にしてやる方が嬉しいことであらう。妹の者にした上では、心の届く限り心配もし後見もしよう。自分の世話は、誰といつてする者があらうか。あの人の御様が、言ひ分のある、目にも着かないやうだつたらば、このやうに馴れて來た年來のしるしに、身を任せる氣にもなりもしようが、極りが悪くて逢ひにくいまでの様子なのも、却つてひどく遠慮されるので、自分の一生はかうして過してしまはうと思ひつゞけて、聲を立てゝ泣き勝ちに夜を明されると、その名残がひどく惱ましいので、中の君の寝てゐられる奥の方へ行つて物に凭つて臥される。例とちがつて、人のさゝめく聲の繁くするのを怪しいと思ひながら中の君は寝てゐられたに、かうして大君がお出でになつたので嬉しくて、夜の懸物として御衣をお著せすると、結構な御移り香が、紛るべくもなく大君の御衣から熾りかゝつて來る氣がするので、以前宿直人の中納言から戴いて持て餘してゐた香

のことが思ひ合はされて、女房どもの噂をしてゐるのは本當だらうと姉姪がいとほしくて、寝てゐる風をして物も仰しやらない。客人の中納言は、辨のお許を呼び出して、細々と物を言ひ置き、大君へはさつぱりとした御消息を申し残してお歸りになられた。大君は中納言の總角の歌を、戯れ言に取り做してお返したものの、我が心から尋ばかりの隔てと對面したことだらうと、(催馬樂、總角や、尋ばかりや、離かりて寝たれども、まろび合ひにけり、か寄り合ひにけり)此の中の君も思ふことだらうと、大君はひどく恥づかしくて、氣分が悪いといつて惱み暮された。女房どもは、「日數も残りがなくなつてしまひました。しつかりした事は、ちよつとの事でも外にはなざる方もないのに、折の悪いお惱みでございます」と申す。中の君は、名香の組絲はしておしまひになつて、「心葉などは何う結ぶものか、まるきり分りません」と、達て申されるので、大君は暗くなつて來たのに紛れてお起きになつて、一しよに結びなどされる。中納言から御文があつたが、今朝からひどく惱ましくてといつて、代筆で御返事をなさる。「まあ、見ともないまで子供ぼく入らつしやる」と女房どもはつぶやいてゐる。御忌服の事が終つて、脱ぎ捨てられるにつけても、大君は、片時もお後れ申すまいと思つたものを、はかなくも過ぎた月日だと思ひになるにつけ、甚しくも思ひの外の憂さの添つたことゝ思つて泣き沈んでゐられる御様は、まことにお氣の毒である。この月頃、黒色ばかり著馴らされてゐたお姿が、薄鈍になられてまことに艶めかしいに、中の君は如何にも今が盛りで、

美しい匂ひが立ち勝られた。御髪など、洗つて手入れをさせて御覽になるに、世の嘆きも忘れるやうな氣がして愛でたいので、大君は内々に思つてゐられる事にも叶つて、あの方のお目に懸る折によもや近く見て見劣りがすると思はれることはなからうと、頼もしくも嬉しくも思つて、今は外に代つて世話をする者もないので、親心になつてかしづき御覽になつてゐる。

かの中納言は、大君がそれを憚られた喪服も改められたらうと思ふ九月も、待ちきれない心で又お越しになつた。この前のやうにしてお逢ひしたいと又申入れられると、大君は、氣分を損じて惱ましくてゐるからと、とやかくとお断りをして對面をなさらない。中納言は、「案外にも辛いお心です。女房どもも何う思ふことでせう」と御文で申された。大君も御文で、「今はこれまでと喪服を脱ぎ捨てました折の悲しさから、却つて嘆き沈んでをりまして、お逢ひ申せませぬ」とあつた。中納言は例の辨を召して、いろ／＼と仰せになる。世に又とない心細さの慰めには、此の君だけを頼みまゐらせてゐる女房どもなので、姫君が自分どもの望みに叶はれて、世の常の御住處にお移りになられなどしたならば、何んなにか結構なことだらうと言ひ合せて、唯此の君を姫君のお部屋にお入れ申さうと皆相談してあつた。姫君はその様子はよくは御存じなかつたが、中納言が辨をあつたやうに取り分けて大事にし、手なづけられるのに打解けて、辨も安心させない心を起してゐるかも知れない。昔物語を見ても、女が我が心から、それ此れの関係をつんだといふことがあらうか、皆女

房のしたことである。油断してはならないのは女房の心であると思ひ寄られて、達てあの方の恨が深いやうであつたならば、妹君を押して差出さう。たとひ自分より劣つた者であつても、逢ひ初めたならば薄情にはなさるまいと思はれるお心であるのに、まして妹は、ほのかにでも見初めたならば心が慰まれることだらう。口に出しては何が何でも、ふとさうした事を待ち構へたやうにする人があらうか、本意ではないといつて、承知する様子もないといふのは、一面には、私の思はくを、案外浅い方だつたなどいはれようかと遠慮してゐるのであらうと思ひ構へたが、それを妹君にまきり知らせずしては罪を得ることであらうと、自分の身に引き較べて見て可哀さうなので、中の君と萬づの話をして、「故父宮のお心持も、『世の中をこのやうに心細くて送つてしまはうとも、却つて人の笑ひ草になるやうな軽々しい心は起すな』とお言ひ置きになりましたので、御在世の間は私は御絆で、勤行のお心を亂した罪が大變だつたらうに、御臨終にさう仰しやつた御一言だけでも間違へまいと思ひますので、心細くなどは格別思ひませんが、あの人達が私を、變り者の剛情者にして憎んでゐるのは、本當にひどいと思ひます。ほんにあなたまでも、さうした私と同様に過して行かれるのかと思ふと、月日の立つにつけても、あなたの事ばかりが勿體なくて、氣懸りな悲しい者に思はれますので、せめてあなただけでも世間並な事をして、かうした有様の私をも立派なものにし、楽しみにして見上げる者にしたいのです」とお話になると、中の君は、大君は何んな氣がし

て入らつしやることだらうかと辛く思はれて、「故父宮は、一人だけがさうして世を通せと仰しやつたものではございますまい。しつかりしないからのお氣懸りは、私の方が餘分のやうにお思ひになつたこととせう。あなたの心細いお慰めには、かうして朝夕お目に懸る外に何がございませう」といつて、生怨めしくお思ひになられたので、大君もげに氣の毒に思つて、「やはり誰れ彼れで、私をいやに旋毛曲りの者に思つたりいつたりするので、くさくさするからの話ですよ」といつて言ひさしにされた。

暮れて行くのに客人は歸られない。姫君はまことに困つたことに思はれる。辨が參つて、中納言の御消息を傳へて、お恨みになるのも尤もな由をくどくどと申上げるが、大君は御返事もなされずに歎かれて、何う扱つて行くべき我が身であらうか、もう片親だけでもお出でになつたならば、何うなりかうなり、然るべき人に扱はれて、宿縁といふこととして、我が身を我が心次第にはしない世なので、一切が世の常の事となつて、人の笑ひとなる咎も隠されて行くのである。こゝにゐる限りの女房は年が積つてゐて、利口だといふは思つて、得意になつて自身に相應した事をお教へするけれども、それは筋の立つた事であらうか。何れも人らしくもない心ばかりで、唯一途に思ひ込んで言ふことだと御覽になるので、年を取つて引き動かさんばかりに申上げ合ふが、大君は辛く疎ましくて、心を動かされない。同じ心になつて何事も御相談をなさるべき中の君は、かうした方面

のことは今一層お分りにならずおつとりしてゐて、何ういふものとも理解されないので、不思議な身の上であるよと、大君は唯奥の方に向いてお出でになる。「やはり、ふだんの色の御衣にお著換へなさいませ」など、女房どもはそゝのかし／＼して、皆でその心でゐるらしい様子なのを、大君は淺ましくて、ほんに何の障害になる物があらう、手狭な、かうした住まひの果敢なさ、山梨の花で（世の中を憂しといひても何處にか身をば隠さむ山梨の花）で脱れよう場所もない。客人は、このやうに露はに、此れ彼れの者に口入れをさせず、そつと、何時出來たといふこともない状態で思ひ初めた事なので、「お心が許さなかつたならば、何時までも／＼かうして過さう」と思つて仰しやるのを、この年寄どもは、めい／＼で相談して、露はに下相談などをする。さうはいふものの心が深くないからか、老いて偏屈になつたからか、碌でもないことばかりである。姫君は思ひ煩はれて、辨の參つたので仰しやる。「此の何年も、世間の人とはちがつた御同情だと父宮の仰せになつたのを聞いてをり、又今となつては萬事残りなくお頼みして、不思議な程に打解けてゐますのに、思つてゐるとは違つたお心持がまじつて入らして、お恨みになられるやうなのは困つたことです。私が世間に人めかしくしたい身であつたら、かうしたお話を何だつて振切りなどしませう。昔から世間は捨てた心でゐるので、まことに苦しいのですが、あの中の君の盛りの過ぎようとするのも残念です。ほんにかうした住まひも、唯その事一つの爲に、手狭に思つてゐますのに、本當に昔をお思ひにな

つて下さるお志があるならば、私とあの君とを同じ者と思召していただきたい。身を分けてゐる此の心は、みんな譲つて、お心添をしませう。なほかうした心持を、宜しいやうに申上げて下さい」と、恥づかしくはあるものの、さうしたいと思ふことを言ひ続けられると、辨もまことにあはれにお見上げる。辨は、「私もそのやうにばかり、以前から御様子を拜してをりますので、よく／＼お話し申上げるのですが、そのやうに思ひ改めることは出来ない。さうしたら兵部卿の宮のお恨も深さが増すであらうから、そちらはそちらで、よくお後見を申さう」との仰せでございます。それも亦思ひ通りの御事揃ひでございます。御兩親とも御存命で、格別に変な御心盡しでお世話をなさいましたにしても、とても此のやうに世間にも稀れな御事が、一つになつて來るといふことはございませぬ。恐入つたことではございますが、このやうにまことに頼りないお有様をお見上げしますと、行く／＼何のやうにおなりになる事だらうと、氣懸りにも悲しくも拜されますのに、後のお心の程は分りかねますが、美しくも結構な御因縁揃ひに入らせられますことと、寄り／＼にお思ひ申上げます。故宮の御遺言を遠へまいと思召すのはお道理でございますが、それは然るべきお夫がなく、御身分不相應のことであらうかとお思ひになつて、お誠めになつたことだらうと存じます。「あの殿がさうしたお心持がなくなりになつたら、一人だけは安心ができて、何んにか嬉しからう」と折々仰しやつてございました。身分々々で、頼りにする人に後れました者は、高くても低くても

思ひの外の見苦しいおぢれ方をする者が多いやうでございます。これ程に、特別に誂へて作り出しもしいやうなお有様で、志の深さも珍らしいまでに申されますのを、一向にお相手になされず、お思ひ込みのやうに勤行の御本意をお遂げになりまして、さうかといつてまさか雲や霞をなどと總じて言葉多く言ひつゞけるので、大君はひどく憎く、氣にくはずお思ひになつて、俯伏しになられた。中の君も、ひどくお氣の毒な御様子であると大君を御覽になり、一しよに例のやうにお寝になつた。氣が、りりで、女房どもが何んなことをするだらうかとお思ひになるが、態とらしく、諦め切つてお隠れになれるやうな場所さへもないお住まひなので、大君は柔らかな、美しい御衣を、中の君の上にお着せされて、まだ暑さ加減の頃なので、御自分は少し離れてお寝になられた。辨は大君の仰せになつたことを客人に申上げる。何うしてそれ程までに世の中を離れてしまはれたのだらう。法師めいて入らせられた故宮のお側にゐて、無常なものとお悟りになつたせいであらうかとお思ひになるにつけ、一層御自分の心に通ふ氣がされるので、賢こぶつて憎いとは思はれない。「それでは、物越しに對面することも、今はあるまじき事とお思ひになつてゐるのであらう。今夜だけ、御寝になつてゐられる邊に、そつとたばかつて入れろ」と仰しやるので、その心で女房どもを早く寝静まらせるなど、譯を知つてゐる者同志は用意してゐる。

宵を少し過ぎた頃に、風の音が少し荒く吹くと、しつかりしてゐない薔などは、ぎしぎしと鳴つ

て、物音の紛れる時に、人の忍び寄る音は聞きつけられまいと思つて、辨は中納言をそつと導き入れる。お二方ふたかたで同じ所にお寝になつてゐるのを不安には思ふけれども、常にされてゐることなので別々べつべつには何うして申上げられよう。中納言は大君の御様子をはつきりと見知つて入らせられようと思ふと、大君は教睡まどろぶもされずにゐるので、ふと物音を聞きつけられて、そつと起きて外へ出られた。ひどく早く這ひ隠れたが、中の君が無心に寢入つてゐられたのを、まことに可哀さうで、何んな事をするのだらうと胸がつぶれて、前々まへまへから思ひ續けてゐた心持も忘れて、目を覺まして一しよに隠れたいと思ふけれど、思ふやうに立ち歸ることも出来ず、顫へ／＼御覽になると、灯影のほのかなのに、桂姿かづかたになつて、

のを、ひどく中の君が氣の毒で、何んな氣がされることだらうと思ひながら、變な壁ぎはに、屏風を立て、ある後ろうしろの、ごみ／＼した所にゐられた。前まへ以て話した時でさへも、中の君は自分を辛つらいと思はれたのに、まして何んなにか新たに思ひ疎そむことだらうと、ひどく心苦しいにつけても、總じて確たしりした後見うしろみがなく生き残つてゐる自分どもの悲しさを思ひつゞけられるに、故宮こきゆうの、今はと覺悟されて山へ登られた夕べの御様子などが、目の前に見る心持がして、ひどく戀しく悲しく思はれる。中納言は、一人ひとりで寝てゐられるを、女房どもがかういふ抜はひをしたのであらうかと嬉しくて心が躍るのに、次第にその人ではなかつたと見るにつけ、同じことながら、美しく可愛らしい様子

は、此の君の方が勝つてゐるかと思はれる。女君の淺ましさに、呆れ返つてゐられるのを、全く事情を知らないのだと見えるので、ひどく氣の毒でもあり、又大君が、達たつて隠れられた辛つらさが、眞實まことこゝろ憂く口惜しいので、此の君をも餘所の者には思ひ放はなてない氣がするけれども、急に、淺い心であつたと大君に思はれるやうな事はすまい、此の一條はやはり此のまゝに過して、最後に因縁が通れられないならば、此の君の方に換へたからとて何であらう、他人のやうに思はれないと分別をつけて、例れいの面白く懐かしい風に話をして、夜を明かされた。

老女房らうにようぼうどもは、仕おふせたと思つて、「中の君は何方どなたにお出でになるのでせう。不思議なことだ」と疑ひ合つた。「それにしても、何か譯があるのでせう」などいふ。「大體、いつもの、ちよつとお見上げしても、老の皺も伸びるやうな氣がして、結構な、しみ／＼する、見とれるやうな御容貌おんがう有様なのに、何だつてさう振切つておしまひになるのでせう。何だかこれは、世間の人のいふ恐ろしい神がお憑つきしてゐるのではないでせうか」と、齒はが疎そらになつて、無愛相むあいさうに言ひなす女もある。又、「まあ縁起でもないことを。何が憑ついたりなぞしませう。世間に遠くお育ちになつたので、かうした事にも猶行き届いてお世話を申す人がゐないので、工合悪く御思ひになるからでせう。これから自然お馴れになつて來たら、お思ひ込みになることとせう」など話合つて、「早くお打解けになつて、結構な御身おんみにおなりになつていたゞきたい」など言ひ／＼寢入つて、厭いとなど側迷たが惑まどにさせ

るもあつた。逢ふ人からではない秋の夜ではあるが（古今集、長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば）、程もなく明けたやうな氣がして、中納言は、姉姫と何方とも差別のつけられない、艶めかしい中の君の御様子を見て、我が心からとはいへ、飽つ氣ない心持がして、「思ひ合ひませうよ、あんなに心愛いつらい方の御様は、見習ひなさいますなよ」など、又の逢瀬を約束して立ち出でられた。中納言は我ながら變で、夢のやうな氣がするが、この上とも情ない人の御様子を、今一度見極めようとの心で、我慢しつつ、例の室に出て臥された。辨は參つて、「何うも變です。中の君は何方に入らつしやるのでせう」といふに、中の君はひどく恥かしく、思ひ懸けない心持がして、何うした譯だつたらうと思つて臥してゐられた。昨日の仰しやつた事を思ひ出して、姉君をひどいとお思ひ申す。明るくなつた光について、壁の中の蟋蟀になつてゐられた大君も這ひ出される。中の君の思はれることがいかにも氣の毒なので、互に物もいはれない。二人とも見顯はされて、ゆかしげのないやうになつて、心愛いことではあるよ、今から後も、油断のならない世の中であると、大君は思ひ亂れられた。辨は彼方に參つて中納言から、大君の呆れたものであつたお心強さを聞いて、いかにも餘りに深い、憎らしかつたことと、お氣の毒で、ぼんやりしてゐた。中納言は、「此れまでのつらさは、まだ望みのある氣がして、いろ／＼に思ひ慰めて來たが、今夜は本當に恥づかしくて、身も投げたいやうな氣がします。故宮が捨て難くお思ひになつて御申置きになら

たお氣の毒をお思ひ申す方では、又一概に身を捨てられない氣がします。懸想のことは、何方に對してもしますまい。この憂さつらさは、旁々とも忘れられない。宮などが、押し強く言ひ寄られてゐるやうですが、同じ靡くなら身分の高い方へと、特に思つて入らつしやるだらうとよく分りましたし、あゝした事もいかにも御尤もと恥づかしくて、又伺つて此方の人々に見られるのも忌々しく思ひます。まよよ、かうした馬鹿らしい身の上は、外の人には決して洩らして下さるな」と怨んで置いて、例よりも急いでお歸りになる。女房どもは、「何方に取つてもお氣の毒のことと」ささめき合つた。姫君も、あんな事を何だつてしたことだらう、もし中納言が薄情な心でもお起しになつたならばと、胸がつぶれて心苦しいので、すべて此方の心と喰ひちがつてゐる女房どもの出過ぎた心からのことだと憎くお思ひになる。いろ／＼と思ひ詫びて入らつしやると、中納言から御文がある。姫君は例よりも嬉しい氣のなさるのも、一面には妙なことである。秋の様子になつたのも知らず顔の青い枝の、片枝はまことに濃く紅葉したのに、

同じ枝を分きて染めける山姫にいづれか深き色と問
はゞや

（同じ枝であるのに、差別をして染めた山の女神に、何方が深い色であるかを尋ねたい。）

185
それ程恨んでゐる様子もなく、言葉少なに事を省いて、昨夜の事は押包んでゐられるのを見て、中

の君のことは有耶無耶にして紛らさうとするのであらうと御覽になるにも心が騒ぐが、女房どもの耳かしがましいまでに「御返事を」といふので、中の君に「あなたから申上げなさい」と譲るのも變に思はれて、さすがに御自分では書きにくく思ひ亂れられる。

山姫の染むる心は分かねども移らふ方や深きなるらむ

(山の女神の染める心は分らないけれども、色の變つて紅葉してある方に對して深いのであらう。)

あつさりとお書きになつたが、趣あるものに見えたので、中納言はやはり怨み切つてしまへさうもなく思はれる。大君は中の君を、身を分けたもので同じだなど、譲られる様子が度々見えただけでも、自分が承知しないのに困つて、あんなことを計畫したのであらう。その甲斐もなく、中の君に此のやうに情なくするのも、大君には氣の毒で、又自分を情ない者に思はれて、いよ／＼初めからの思ひは叶ひ難くなるのであらう。とやかくと大君に取次をする老女房の思はくも輕々しく、とにかく、大君に思ひ込んだといふ事だけでも口惜しいことで、此れ程までに世の中を捨てようと思つた心でありながら、自分でも叶はなかつたことだと、外聞悪く思はれるに、まして世間一般の好色者の眞似のやうに、同じ所を繰返し漕ぎめぐつてゐる棚無し小舟(萬葉集、「堀江漕ぐ棚無し小舟こぎ返り同じ人にや戀ひ渡りなむ」)めいてゐることであらうなどと、終夜思つて明かされて、まだ在

明の空も趣のある頃に、兵部卿の宮の御方に訪ねて行かれる。

三條の宮の焼失した後は、中納言は六條の院に移つてゐられたので、近くなつたについては常に兵部卿の宮をお訪ねするのを、宮も思ひ通りのことであるといふお氣がされてゐた。ごたくした所のない結構なお住みで、御前の前裁も、餘所とはちがつて、同じ草花の姿も、木草の靡き工合も、格別に見なされて、遺水の面に澄んでゐる月の光までも、繪に書いたやうであるのに、案の如く宮は起きてお出でになつた。風に連れて吹いて來る薰物の匂ひの、著しくきはやかに薰るので、宮はふとその人と氣がつかれて、御直衣を召して、亂れないやうに引繕つてお出ましになる。中納言は階段を昇りきらずに、蹲つて挨拶をされると、宮は「もつと上に」など仰せられず、勾欄に倚りかゝつて、世間話などをし合はれる。宇治の姫君のことも、物の序には思ひ出されて、宮は様々に恨まれるのも困つてしまふ。自分の心持さへも叶ひ難くてゐるものと思ひ／＼しながらも、さうおなりになつた方がいゝといふ氣のする仔細があるので、例よりは本氣になつて、執るべき方法などを申される。明け方の闇の頃で、生憎に霧が立ち渡つて、空の様子が冷やかなのに、月は霧に隔てられて、木の下は暗く、艶いてゐる。中納言は宇治のあはれな風景を一段と思ひ出される。宮は「近い中に、きつと置き去りにはなさるな」といはれるが、中納言がやはり煩はしさうにするので、

女郎花咲ける大野をふせぎつゝ心せばくや標を結ふ
らむ

(女郎花の咲いてゐる廣い野に、人を寄せまいと防ぎながら、心狭くも、我が物としての標を結ぶのでせうか、女郎花は女の比喩、「大野」は宇治。)

と戯れられる。

霧深き朝の原の女郎花こゝろを寄せて見る人ぞ見る

(霧深く籠めてゐる朝の原の女郎花は、心を寄せて見る、即ち眞に見ようと思ふ人だけが見るもので、霧深き朝の原は深窓、「女郎花」は宇治の姫君の比喩。)

大凡のことでは、とても」など妬ませると、宮は、「あなかしがまし」(古今集「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」といつて、しまひには腹をお立てになつた。宮は何年も此のやうに言ひ續けられてゐるが、中納言は中の君の有様が何んなであらうかと不安に思つてゐたのに、容貌などは逢つて見劣りのすることはあるまいと推し量られる。心持も、逢つて近劣りするやうなこともあらうかと危険に思ひつゞけてゐたのに、何の點も大丈夫で入らつしやるやうだと思ふので、かの大君の内々畫策されてゐることの違ふやうになつてゆくのも、情を知らないやうであるが、さうかといつて、さうも亦心が改められなく思はれるので、まづ中の君を宮にお譲りして、お

二人の何方からの恨も受けないやうにしようなど、内心に思ひ構へてゐるのも御存じなく、宮の自分を心狭いことゝ解してゐるのも可笑しいけれど、「あなたの例の軽いお心持で、姫君に御苦勞をさせるのはお氣の毒です」など、親の身に申上げる。宮は、「それはとにかく、見て入らつしやい、此れ程心に留まつたことは、今まで無かつたことです」など、本氣になつて仰せになるので、中納言は、「あの姫君方の心では、あなたがそのやうに入らつしやるやうだからと云つて、靡くやうな様子には見えません。しにくい御奉公でございます」といつて、たばかりべき方法を細まゝと申上げる。

二十六日は、彼岸の終りの日、日柄がよいといふので、中納言は人知れず心を使つて、ひどく忍んで兵部卿の宮を宇治へお連れ申す。後の宮がさうしたことをお聞入れになれば、宮のかうしたお歩きをひどく制して入らせられるので、まことに氣になることであるが、宮が熱心に思つてゐられることなので、さり氣ないさまをして事を運ばせるのもむづかしい事である。渡船をするのも目立つことなので、改まつての御宿りなども借りず、その邊の最も手近な御領地の者の家に、ひとり忍んで宮をお下し申して、自分だけお出でになつた。宇治のお邸には宮を見咎めする程の人もないけれど、宿直人の僅かに出て歩くのにも、様子を知らせまいとするのであらう。お邸では中納言殿がお越しになつたといつて奔走し合つた。姫君方は小面倒なことだとお聞きになつたが、心を移

す人を別の人にと仄めかして置いたからと、大君はお思ひになる。中の君は、中納言の思ふ人は自分ではなかつたやうだつたから、あゝではあつたものゝと思ひながらも、辛い思ひをしての後は、以前のやうには姉君をお思ひ申さず、氣が置かれて入らつしやる。中納言と大君とは、何や彼やと取次ばかりで物をいつてゐられるので、何ういふ譯であらうかと女房どもは心苦しがつてゐる。中納言は御馬で宮を闇に紛れて此方へお連れ申して、辨を召し出して、「大君に、唯一言申上げたいことがあるが、私をお疎みになる様を見上げたので、まことに恥づかしいけれど、黙りきりにするといふことは出来ないのです。もう少し更かして、前のやうに中の君の所に案内してくれないか」など他意なく仰せになると、辨は何方でも同じことであると思つて、それを申上げに大君の所に参つた。そのやうにお聞きに入れると大君は、それでは中の君にお心が移つたのだと嬉しくて、心も落ちつかれて、其方へお出でになる道ではない方の廂の間で、障子を確りと締め切つて對面をなさつた。中納言は、「一言申上げたいのですが、人が聞くやうな高聲をするのも變ですから、少しお開け下さい。何うにもうるさい」と申されると、大君は、「これでも結構聞えませう」といつて開けない。大君は、中納言も今は思ひ換へようと思つて、黙つてはしまいと挨拶をするのであらう、何も特別な意味の對面ではない、無愛想な返事などはせず、夜も更かすやうなことはしまいと思つて、此所までゞも出て來られたのであると中納言を障子の中から大君の

て、ひどく怨みられるので、何といふ厭な事をなさるのであらう、何だつて逢ふことを承知したのだらうと、口惜しくむしやくしやるけれども、だまして彼方へやらうと思つて、妹を他人とお思ひにならないやうにも、仄めかしつゝお話になる心持は、まことにあはれである。宮はお教へ申したまゝに、一夜の大戸口に寄つて、扇を鳴らされると、辨が参つて御案内をする。先々も中納言が通り馴れた跡と見える道の案内を、可笑しいと思ひながらお入りになつたのを大君は御存じがなく、中納言をすかして其方へ入れようと思つてゐた。中納言はそれを可笑しくも氣の毒にも思つて、内々に事情も知らなかつた恨を残されるのも、申譯ない氣がすることだらうと、中納言は、「宮が私の跡をお慕ひなされるので、お断りのしやうもなく、此方にお出でになりました、こつそり彼方へ紛れてお入りになりました。あのおせつかいの人、だまされたのでせう。私は中途半端で、人の笑ひ者になることとせう」といはれると、大君は現に少しも思ひ寄らぬことなので、目もくらくするやうに、ひどい事をすると思はれて、此のやうに様々に呆れたことをするお心の程をも知らずに、話にもならない足らなさ加減をお見せしてゐる隙を見て、見くびつてのなされ方だと言ひやうもない氣がされた。中納言は、「今はもう詮のないことです。道理は繰返し申上げて、不足でしたら、抓りも捻りもなさいまし。あなたはやんごとない方の方にお心を寄せてゐられるやうですが、宿世といふやうなものは決して思ひ通りにはならないもので、彼方のお心持は外の方に向い

てゐましたので、あなたにはお氣の毒ですが、叶はない私といふものは身の置き所もなくつらいのです。やはり何うにもならないものと、やさしい氣持におなりなさいまし。此の障子の固めばかりは何んなに強くしても、二人の間を本當にきれいなものだと推量する者はありません。手引をしろくといはれた方のお心にも、何だつて私がこのやうに胸を塞いで夜を明してゐるなんてことを思ふのですか」といつて、障子も破りさうな様子なので、大君は言ひやうもなく氣にくはないが、賺さうと思つて心を静めて、「その仰しやいます宿世といふやうな方は、目にも見えない事で、何うにも思ひ遣れませんか。唯行く先の知らない涙で、まで霧が懸つたやうな氣がしてをります（後撰集「行く先を知らぬ涙の悲しきは唯目の前に落つるなりけり」。かういふ事は何うしてなさるのかと、夢のやうな呆れたことで、もし後の世の例話に言ひ出す人がありましたら、昔物語などに態と馬鹿らしく作り出した話の類ひになることとございませう。このやうに計畫されたお心を、何ういふ譯と推量も出来ませうか。此の上とも、こんな隠やかでない辛い事は、お持込みになつて感はして下さいませう。思ふに違つて生き長らへてゐましたら、少し氣が落ちついてお話しもいたしませう。今は心持が一層眞つ暗くなりまして、ひどく惱ましくございませうから、これから休みませう、お許し下さい」と、何うにも辛さうになさるので、中納言はあゝはいつたものの、大君が道理をいかにも尤もにはれるので、恥づかしくも可愛ゆくも思へて、「あなた、お心にお従

ひすることが無類であればこそ、このやうに愚かしくなつてゐるのです。言ひやうもなく私を憎らしく疎ましい者にお思ひになつてゐるやうですから、申上げやうもありません。一段と世の中に留まつてゐまいといふ氣になります」といつて、「それでは、隔てを置きながらお話しませう。まろきり捨てゝおしまひにはなりません」といつて、お許しすると、奥へ入らうとして、さすがに入り切らないのを、中納言はひどく可愛ゆく思つて、「それ程にでもして下さる御様子を慰めにして明かませう。決して無理なことは」と申して、まどろみもされぬ。一段と加はつて来る水の音に目も冴えて、夜中の嵐の音に、雌雄別れて寝るといふ山鳥のやうな氣がして、明かし難くされる。例のやうに明けてゆく様子で、鐘の聲などが聞える。宮は眠をむさぼつてお歸りになる様子もないので、妬ましくて、咳拂ひをされるのも、ほんに變な事である。

しるべせし我やかへりて感ふべき心もゆかぬ明け暗の道

（案内をした自分の方が、却つて道に迷ふことであらうか、心も満たされない此の明け方の暗い道で。）

かうした例が世にあつたことでせうか」と中納言がいはれると、

かたぐくにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道に

(自分につけ、妹につけ、そちこちの事で心を暗うする私を思ひやつて下さい、御自分の心からの道に御迷ひになつたら。)

と大君の仄かにいはれるのを、ひどく飽つ氣ない氣がするので、「如何なことにも此のやうに厳しく隔てをされてゐるのは、まことにひどい」など、さまざまに恨みつゞけられ、ほの／＼と明るくなる頃に、宮は昨夜入つた方から出て來られた。まことに柔らかに身を振舞つてゐられる趣など、艶にしようとするお心のなしで、言ひやうもなくしつとりしてゐられる。年をした女房どもは、まことに不思議に、のみこめなくて惑つたけれど、何にしても中納言に、人の悪いお心などあらうかと思つて慰めてゐた。

暗い中にと急いでお歸りになる。宮は道の間も、歸り途はひどく遠く思はれて、氣やすくは通つても行けなからうと、今からひどく心苦しく、夜を隔てることにならうかと思はれるやうである。まだ人が騒がしくなく朝の中に六條の院にお著きになつた。廊に御車を寄せてお下りになる。變な女車の様にして、隠れてお入りになると、お二人で笑はれて、中納言は、「念の入つた御奉公だと存じます」といはれる。御自分の馬鹿さの方は、ひどく口惜しいので、愚痴もおこぼしにならない。宮は、急いで後朝の御文を差上げられる。宇治では姫君達は、現の事のやうな氣がされず、思

ひ亂れてゐられた。妹君は、姉君がいろ／＼と計畫されてのことを、色にもお出しにならなかつたのだと、疎ましくもつらくもお思ひ申して、目を見合せることもなさらない。姉君も、御自分の知らなかつた譯をさつぱりとは打明けられず、妹君の怨まれるのを、尤もにも氣の毒にも思つてゐられる。女房どもも、何うした事だつたらうと思つて御様子を見上げるけれど、ぼんやりしたやうにして大君の入らつしやるので、變なことだと思ひ合つてゐた。大君は宮から御文を解いて中の君にお見せするけれど、決して起き上られないで、「久しくなりました」とお使は佗びしがつた。

世の常に思ひやすらむ露深き道の笹原分けて來つるも

(世間並のことにあなたは思ふでせうか、露の深い、道の笹原を分けて、苦勞をして行つたのも。)

書き馴れてゐられる墨繼ぎなどの、格別にも艶なものも、一般の事として御覽になつてゐた時は面白くも思はれたが、今は不安な、心配なものに見えて、自分が才覺ある者となつて代筆するのも、まことに不當なので、深切に書くべき様をお教へし、ひどく責めて妹君にお書かせになる。使には祿として、紫苑色の細長一襲に三重襲の袴を添へて下さる。お使が當惑さうに思つてゐるので、包ませて、供をしてゐる人にお持たせになる。これは表立つてのお使ではなく、いつも此方へお遣しになる上童である。宮は殊更に人に様子を洩らすまいと思はれてのお使なので、この祿は、昨夜賢

しがつて案内した老女房のしたことであらうと、氣に入らぬことにお聞きになつた。

その夜も宮は、あの案内にと誘はれたが、中納言は、「冷泉院に、何うでも伺候しなければならぬことがございますので」といつてお残りになつた。例の癖で、事に觸れてはすねた様をして世を茶化するのだと宮は憎く思はれる。宇治では大君は、今は何うしよう、たとひ本意ではなかつたことでも、疎略には出来ないと思はれる。御装飾など整はない御住所の様ではあるが、出来るだけよく仕立ててお待ち申された。宮が遠い御中道を急いでお出でになつたのを、嬉しいことと思ふのも、一面には不思議なことである。御本人は、正氣でもない有様で、装ひをされるままになつて、濃い紅の御袖がひどく涙で濡れるので、確り者となつてゐる姉君も泣きながら、「私は世の中に永くとも思つてゐませんので、明け暮れの眺めにつけても、唯あなたの事だけを心苦しく思つてゐますに、あの女房どもも、結構のこのやうだと、うるさくなる程言つて聞かせますので、年寄の心といふものは、あつした者でも世の中の道理を知つてゐよう、若い確りもしない心で我を張つて、此のやうにばかりさせてお置きするの何うかといふ氣になつた所もあります、たつた今、考へる間もなく、恥づかしい事で思ひ亂れようとは、少しも思ひ懸けなかつたのですが、此れがほんに世間の人のいふ、遁れられない宿縁とでもいふのでせうか。本當に苦しいことです。あなたも少し落ちついたら、私が少しも知らなかつた譯もお聞せしませう。餘り憎いことだと思ひ

なさいますな。それだと罪を受けられるかも知れませんが、御髪を撫で繕ひながら申されると、中の君は御返事はなさらないが、しかし姉君が此のやうに思つて仰しやるのが、しんから氣になつて、我れ悪しかれと思つてなさつたことではあるまい、男君に笑はれて、嫌はれるやうなことが起つて、姉君に持て餘されるやうなことがあつては大變だと、様々に思つてゐられた。宮は中の君が昨夜は、さうした心はなく、打解けもせず、まことに淺ましいことだと、呆れてゐられた様子をさへ、一通りではなく可愛ゆいと思つて入らしたのに、まして今夜は、少し尋常におとなしくしてゐられるので、お志も増さつて来るにつけ、たやすくは通つて来ることもできない山路の遠さをも、胸の痛いまでに思はれて、心深く話され、行末を頼ませるけれども、女君は嬉しいとも何ともお分りにならない。言ひやうもなく大切に冊いてゐる姫君でも、少しは世間の人の様子くらはるは感じ、親や兄などを通して、人の生活を見馴れてゐる人は、男に對しての恥づかしさもたいしたことにはなからう。家の中にあがめ奉る者はないが、此のやうに山深い所なので、人には遠く、奥深い事ばかり馴れられてゐる心持には、思ひも懸けぬ有様が極り悪く恥づかしく、何事も世間の人とはちがつて、變に田舎びてゐることであらうと、ちよつとした御返事をするにも、言ひ出しやうもなく遠慮してゐられた。しかし此の君の方が大君よりも利發で、才氣のある美點はまさつてゐられる。「三日に當る夜は、餅を差上げるものです」と女房どもが申上げると、大君は格別の、改まつ

た祝儀であらうと思つて、我が前でその準備をさせるが、よくは様子が分らず、一方では此のやうに親めいてその指圖をされるのも、女房どもの手前極りが悪くて、顔を赤らめてゐられるのが可愛ゆらしい。此の君は惣領風とでもいふのか、心がのびやかで、氣高いものの、人の爲には思ひやりがあつて情深くあられた。

中納言殿から御消息があつて、「昨夜は何はうと存じましたが、あなたの宮仕の苦勞もその甲斐がなさうなので、お恨めしくて見合せました。三日の今夜はお手傳ひするべき雜役もあらうかと存じますが、先夜の御宿直所の極り悪さに亂れました氣分が、何うにも安まりませんで、躊躇され「ます」と、陸奥紙へ無愛想に行も變へずに書いて、祝儀の夜の衣類ども、細かに縫ひなどもしない物の、いろ／＼の巻いた物を入れた御衣櫃の數多を懸子に入れて、辨の許まで、女房どもの料にといつて下された。母宮の御方にあつた品をあり従ひに、さして多くはお集めになれなかつたのであらう、生地のみ、絹、綾などと、その下の方に入れて隠して、姫君達の御召料と思はれるものを二領、まことに清らかに仕立てて、單の御衣の袖に、古代の風に從つて歌を書いてあつた。

さ夜衣きて馴れきとはいはずともかごとばかりは懸けずしもあらじ

(夜の衣即ち夜具を著ての共寢に馴れたとはいはずにしても、さうした事のあるやうな言ひ願ひく

らゐは、しまいとと思つてゐませんで、「馴れ」を「萎れ」の意で、又「懸け」は衣の縁語。

と威して申された。自分も妹君も、ゆかしげもなく夜の寝姿を、いかにも恥づかしくも御覽になつたと思つて、御返事も何う申さうかと思案してゐる中に、お使は見附けられないやうに逃げて隠れてしまつた。賤しい供の者を掴まへて御返事をお遣しになる。

隔てなき心ばかりは通ふとも馴れし袖とは懸けじとぞ思ふ

(隔てない心だけは互に通はふとも、共寢し馴れた夜の衣の袖などは言ひ懸かりをしまいと思ふ。)

心が慌しく、思ひ亂れてゐる名残として、一段と平凡な歌を、思ふまゝを詠まれたものと、待ちつけて御覽になる中納言は、たゞ哀れだとお汲取になる。

宮はその夜は宮中へ伺候されて、退出が出来さうもないので、人知れずお心も空になつて、思ひ嘆いて入らつしやるに、母中宮は、「まだ此のやうに獨りでお出でになつて、世間に好色との評判の次第に聞えて來るといふのは、やはり本當に悪いことです。何事でも御自分の好き心をお通しなさいますな。主上もお氣にお懸けになるやうに仰しやいます」と、私邸にお暮しになることをお誠めになるので、一段と苦しくお思ひになつて、御宿直所にお出になつて、宇治への御文を書いてお遣

しになる。その後でも、ひどく歎かはしげにお出でになると、中納言の君が参内された。宇治の後援の人と思はれると、例よりも嬉しくて、「何うしたらいいでせう。ひどく暗くなつたやうですが。心も亂れてゐます」と悲しく思つて入らつしやる。中納言はよくお心持を見届けようとお思ひになつて、「幾日目かで此のやうに参内なさいましたに、今夜お詰めになりましたんで、急いで御退出になつては、一段と悪いことにお取り遊ばしませう。唯今臺盤所（女房の詰所）の方で、中宮の仰せを承りましたが、私の内々の面倒な御奉公の驗に、お憎しみの勘當をいたゞかうかと、顔色が變りました」と申されると、「本當に餘んまりな仰せ言です。大方人の悪る口からのこととせう。世間が咎められる程の心を、何の方面で働かせてゐませう。大體、窮屈な身分といふ者は、却つてつまらないものです」といつて、本當に厭はしい事だとまで思つて入らした。中納言はお氣の毒だと見上げられて、「何れにしても、同じ程度に騒がれることとせう。今夜入らしての罪には、私が代りまして、身を徒らにも致しませう。木幡の山に馬は如何でございませう（萬葉集、「山城の木幡の山に馬はあれど徒歩よりわが行く汝を思ひかね」で、馬で入らつしやいませの意）その方が目立たないでせう」と申上げると、唯暮れに暮れて、更けた夜なので、思ひ侘びて、宮は御馬でお出懸けになる。「お供は結句致しますまい。後の事をお引受します」と、中納言は宮中にお詰めになる。

中納言は、中宮の御方に伺候されると、中宮は、「宮はお出懸けになりました。淺ましいお氣の毒なことです。何んなにか人がお見上げするでせう、主上がお聞き遊ばしたら、「お誠めしないといふことはない」と仰せになりませうが、困つたことです」と仰せになる。大勢の宮達がこのやうに大人び整はせられたが、大宮はいよ／＼お若くお美しい様子が増して入らせられる。女一の宮も、此のやうに入らせられることであらうが、何ういふか折に、此のやうに間近く、せめてお聲だけでもお聞きしたいものだと思はれる。好色な人の、不都合な懸想をするのも、かうした關係で、親しくなくもないが、さうかといつて立ち入つて、心のまゝにもならない折の事であらう、自分の心のやうな頑固なものが又と世間にあらうか、その自分でさへもやはり、懸想の心の動き初めた人には、我慢の出来ないものをと思つてゐられた。此方にお仕へ申してゐる女房は、容貌も心持も何れといつて悪いものはなく、それ／＼見やすく美しい中にも、上品に優れてゐて、眼に留まる者もあるが、中納言は決して／＼亂れ初めまいとの心で、ひどくぶつきらぼうにしてゐられた。中には態と中納言の目に著かせようとしてゐる女房もある。大體に氣のひけるやうなしつとりした御殿ではあるが、表面こそ用意を持つて落ちついてはゐても、十人十色の世の中のこととて、色つぼくはずんでゐる内心の、漏れて見えるものもあるけれど、中納言は、それ／＼に美しくも可愛いことだと思つて、何時も唯、世の無常を思つて立ちまじつてゐられる。

宇治では、中納言殿があつたので、果して案じたやうにと思つて、胸がつぶれてゐられると、夜中近くなつて、荒い風の勢ひ吹く中を、まことに艶めかしく清らかに、薫物を匂はせてお出でになつたので、何うして疎略にはお思ひ申さう。女君も聊かお心の靡いて、男の心をお思ひ知りになることもあらう。女君はまことに美しく、今を盛りと見えて、飾り立てられた様は、まして儻はなからうと思はれる。評判に立つまでによい人の多くを見集められた宮の御目にさへも、悪くはない、容貌を初めとして、多くの點で近勝りがしたと思はれる程なので、此のお里の老女房どもは、まして口もとを醜くして笑んで、「かうした姫君の勿體ない御有様を、身分のよくない人の御覽になるやうなことがあつたら、何んなにか口惜しいことせう。望み通りの御宿縁です」と申しつつ、大君の中納言に對して不思議にも變に僻んだ仕打をなされるのを、聲を潜めて悪く申す。此の人々の、盛りを過ぎた様をして、派手な色のいろ／＼な衣の、似合はしくないのを縫つて著て、不調和に取繕つてゐる姿をしてゐるの、我慢の出来るものゝないのを見渡されて、大君は、私も次第に盛りを過ぎた身である、鏡を見ると、ひどく瘦せて行くのに、銘々の者としては、此の人どもにしても、自分が悪るい容貌だとは思はうか、後めは分らないので、額髪を顔に懸け／＼して、化粧を丹念にして、振舞つてゐるやうである、自分の身は、また彼れら程ではなく、目も鼻も丁度だと思つてゐるのは、身最良なの

であらうかと、不安を心附かれて臥してゐられた。氣の置けるやうな人に添ふことは、さう思ふといよ／＼心外で、もう一年か二年すると衰へが増して来るであらう、あはれ身の有様であるをと、手つきの細くか弱く、あはれなのを差出して御覽になりつつ、世の中を思ひつゞけてゐられる。

宮は、得難かつた御暇のことを思ひめぐらすと、今後も氣樂には通へないことだらうと、胸が塞がるやうな氣がされる。母宮の仰せになつたことを女君にお話になり、「思ひながらも御無沙汰をすることがあつても、何ういふ譯だらうなどゝはお思ひなさいませぬ。夢にもあなたを疎略に思ふやうなら、こんなにまでしては何ひますまいが、私の心の程度が何んなかと疑つて氣を揉まれるのがお氣の毒で、命懸けで伺つたのです。いつでも此のやうにして伺ふ譯には行きませんが、然るべき恰好にして、近い所へお移しませう」とひどく深切に申されるが、女君は、無沙汰をするやうに思はれるのは、評判に聞いてゐたお心のひどいのであらうかと氣まづくて、御自分の身の程を思つて様々に嘆かしくしてゐられる。夜の明けてゆく頃の空を、宮は妻戸を開けて、一しよにと女君を誘ひ出して御覽になると、霧の懸つてゐる様が、場所柄のあはれが深く添つて、例の柴を積んだ船が、幽かに行きかはして、跡に残す白浪の様など、見馴れない住ひの有様であるよと、情趣を愛するお心には面白くお思ひになる。山の端にさす朝の光が次第に見えて来るにつけ、女君の御容貌が十分に、美しいのが見えて、限りもなく大切にされてゐる姫君といつても、此の程度のものであら

う、さうした方は、此方から迎へて見る氣のせるでの立派さである、細やかな美しさなど、打解けてよく見たく、一層奥ゆかしく思はるるにつけて、心任せにその出來さうもないのが心苦しく、なまなか逢はなかつた方がといふ氣がする。流の音が懐かしくなく、宇治橋のひどく古くなつたのが見渡されるなど、霧が晴れてゆくと、ひどく荒々しい岸のあたりを見られて、「かうした所に、何うして何年も住んでゐられたものでせう」といつて涙ぐまれるのを、女君はまことに恥づかしくお聞きになる。男君の御様が限りなく艶めかしくも清らかで、此の世ばかりでない深い約束を頼もしくもなさるので、女君は思ひ寄らずも出來た關係とは思ひながらも、却つてかの目馴れてゐる中納言に對しての極り悪さよりはよいとお思ひになる。中納言は思ふ人が別で、まことに心の澄んだ御様子で、逢つて居にく、極りも悪るかつたが、餘所にお思ひ申してゐた宮の方は、まして此の上もな遠い所の方で、一くだりお書きになつた御消息の御返事さへ、遠慮に思はれたのに、今は久しく無沙汰をなさると心細からうと思ふやうになつたのも、我ながら變なものだと思ひ知りになる。宮のお供の人々はひどく咳拂ひをしてお歸りの催促をするので、宮も京にお着きになるのに、工合の悪くならない時刻にと、ひどくお氣ぜはしさうにして、心にはない無沙汰を返す返す女君に仰しやる。

中絶えむものならなくに橋姫の片敷く袖や夜半に濡

らさむ

(この關係の絶えるといふことではない事であるに、宇治の橋姫の獨寝の袖は、空しく待つ夜の涙で濡らすことだらうで、「橋姫」は女君の喩。古今集、「さ庭に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」に依つたもの。)

お歸りになりかねて、立ち返り立ち返り躊躇される。

絶えせじの我が頼みにや宇治橋の遙けき中を待ち渡るべき

(關係はお絶ちにはなるまいといふことを私の頼みにして、この宇治橋のやうに遙かなと絶えも、私は待ち續けることでせうで、「渡る」は橋の縁語。)

口には出さないが、女君の歎かはしげにしてゐる様子を、宮は限りなく可愛ゆくお思ひになつた。若い人の心に沁みさうな、儂稀れな朝明けの宮のお姿を見送つて、名残の留まつてゐる御移り香などを、人知れずなつかしんでゐられるのは、洒落れたお心であるよ。今夜は少し物の識別も出來る時刻だつたので、女房どもは覗いて宮をお見上げる。「中納言殿は、なつかしく、氣の置けるやうなお姿が餘分にあります。御身分が今一段高いといふ思ひなしのせるか、此のお姿は何うも格別で」などと結構がつて申す。宮は道中も、女君の氣の毒にしてゐた御様子を思ひ出し、

して、立ち歸りたさに恰好の悪るいまでに思はれたが、世間の評判を憚かつてお歸りになると、それからは容易くはお忍びになることも出来ない。御文は、夜が明ける毎に幾たびも差上げられる。宮が疎略にはしてゐられないやうだと思ひながら、不安の日數の積るかうした目をひどく氣を揉んで見るやうなことは自分はしまいと思はれたのに、今は自分のことにも勝つて心苦しいことであるよと大君は歎かれるけれども、一層妹君の思ひ沈まれるだらうと思ふところから、平氣な様をして、せめて自分だけでもかうした歎きは加へまいといよ／＼深く思はれる。中納言の君も、宇治では待ち遠にお思ひになることだらうと察して、自分の過ちのやうでお氣の毒なので、宮をお訪ねして、絶えず御様子をお覽になるに、いかにも深くお思ひこみになつてゐるので、これならばと安心してゐられた。

九月十日の頃なので、野山の景色が思ひやられるのに、時雨めいて暗くなり、空の群雲が恐ろしく見える夕暮に、宮は常にもまして心騒がしく眺めをされて、何うしたものだらうかと、心一つには餘つて、出懸けかねてゐられる折に、中納言はさみしさを推測して訪ねて入らせられた。「ふるの山里いかならむ」(初時雨布留の山里いかならむ住む人さへや袖の濡ららむ)で、「布留」は大和、宇治に換へていつたもの」と御注意する。宮はひどく嬉しくて、「しよにといつてお誘ひになるので、例のやうに一つの車に乗つて行かれる。あはれな山路を分け入るにつれて、まして姫君達は、あは

れの深いことであらうと、心の中が一層推し量られる。道の間も宮は、唯その事の氣の毒さをお話になる。たそがれ時分のひどく心細いのに、雨が冷やかに降つて、秋の終りの様子が凄いの、濕つて濡れたお二方の薫物の匂の、世の人には似ない艶な様で連れ立つて入らせられたのを、山莊の山賤どもは、何だつてまごつかずに居られよう。女房どもは此の日頃ぶつぶついつてゐた名殘もなく、笑ひはしやぎ立つて、御座所を繕ひなどする。京の然るべき所々に散つて行つてゐた女房の娘、姪といつた者の二三人を尋ね寄せて中の君に參らせてあつた。年來、此方を侮りまらせてゐた心の浅いこの若い者どもは珍らしい客人だと思つて驚いた。大君も、折柄嬉しくはお思ひ申したが、面倒な人の添つてゐられるのを、極り悪るからうとも、小面倒にも思はれるけれども、お心持が長閑で、思慮深く入らせられるのを、ほんに宮は、あのやうでは入らせられないことだと、見較べられるにつけて、稀れな方だと思ひ知られた。宮は、かうした場所としては、まことに格別に大切にして御案内申し、此の君の方は主人方として氣やすくもてなしするものの、まだ客座敷の、改まらない方へ遠退かせ申したので、中納言はひどく辛く思はれた。大君は、中納言の恨みられるもさすがお氣の毒で、物を隔て、對面をなさる。「戯れにくいものですよ。(古今集、「在りぬやと試みがてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ戀しき」の心。)かうしてばかりですか」と、ひどくお恨みになる。大君は次第に人情がお分りになつたけれども、妹君の御上につけても、ひどく歎き沈まれて、